

あの日の桜の下で永遠
を

リトルデーモンリリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

親を失い 生きる理由も失い 自分の命にすら興味を失い 何を求めて生きていたいのか分からないようになってしまった少年

そんな少年が最後の時間である高校生活の進学先に選んだのは共学化が始まった音ノ木坂学院であった

彼がこの学校で過ごす3年間で9人の女神と出会うことで色々な物を貰い沢山の物を託していった思い出。

9人の女神とのかけがえのない思い出を綴る物語

2020. 1. 26からちよつと今までのを編集します。本編が全然進んでいないんですけど、ちよつと前半設定がテキトーだったのでこの辺で一回編集します。

目次

プロローグ ーいつまでも訪れる春 ー

1

1話 ー出会いの1度目の春 ー

2話 ー巫女と幼馴染達 ー

3話 ーbirth day part

y plan ー

4話 ー真面目な少女 ー

5話 ーhappy birthday

y ー

6話 ー夢見る少女 ー

7話 ーgolden week

145

NOZOMI HAPPY BIRTH

DAY ー

8話 ークレープ食べたい! ー

9話 ーはじめてのおつかい 前半 ー

211

10話 ーはじめてのおつかい 後半 ー

11話 ーお礼とまだ見ぬ女神との夏休

み ー

12話 ー日常1 ー

if story ーNIKO HA

PPY BIRTHDAY ー

13話 ー夏休み前の1日 ー

332

196 163

D A Y	前 半	—	462
K O T O R I	H A P P Y	B I R T H	
1 6 話	く夏の最後	前編く	442
1 5 話	く巫女さんとく	—	423
1 4 話	く夏休みのとある日く	—	401
H D A Y	—	—	349
H O N O K A	H A P P Y	B I R T H	

プロローグ　　くいつまでも訪れる春く

あの日のことは今でも鮮明に脳裏に浮かぶ。

高校入学式の日、桜色の花弁がヒラヒラと舞い踊る中、その下に儂げに立っている一人の少年がいた。

ふと彼と視線が交差する瞬間は、時間にすれば一瞬のものだったが永遠の様に感じられるほどの感覚に見舞われた。彼の瞳はどこまでも広がる蒼穹のような空色をしていて、私と近いものだった。だが、瞳の奥に映る何かは、どこか忘れられないような色をして目が離せなかった。

この出会い・この瞬間が私の高校生活、そしてこれからの運命を変える出会いとなっていくということは誰が想像できただろうか。

「ハアツハアツハアツ」

四月のある日、私にとつてはとても・とても・とてもーも!!大切な日のだが、ある失態により猛烈に焦っていた。

失態に気づいた時から急いで行動し、現在は全力で走っています!!

こんなに走るのはいつぶりだろうか。

高校を卒業してからは運動などは久しくしなくなつたので、あの頃ぶりだろうか。

今日は一年に一度の恒例のあの日だということで、色々な感情が頭の中を駆け巡りなかなか寝付くことができず、そしてやはりというべきか寝坊をしてしまっていた。

この寝坊も一年に一度の恒例となりつつあり、自分でも少し笑えてくる。

？「ああゝゝ、もう!!お母さんも雪穂もなんで起こしてくれないのー!」

走りながら叫んでいるせいか、周りの人から様々な視線を向けられるが、今私はそんなものを気にする余裕もなく走っている!

？「早くしないと怒られちゃうよ～～！！」

時間が迫っていて余裕はないが、このまま走れば予定の時間にはギリギリ間に合う・・・はずだ！！

？「間に合え～～～～！！」

—————

？「で？なんで20分も遅刻したのですか？」

何やかんやあつて時間には間に合わず、着いたのは10分ほど遅れてしまった。

そして私は今、鬼の目の前で正座をしていた。

それはものすごい、いい笑顔をした鬼の前で正座をしている。顔は笑顔で知らない人が見れば魅了されそうな笑顔をしているが、目は全く笑っていない。こんなにも怖い笑顔があるのかと驚くほどだ。

そして私にはわかる、この笑顔は彼女怒りがMAXの状態の時であると。

? 「いや、なんといいですか、そのーいろいろありましてー、アハハハハハ…」

? 「(ニコツ)」

? 「ひい!？」

この時私はヤバイ!! と思つて取り敢えず事実を正直に話すことにした。

? 「ごめんなさいっ! 走れば間に合いそうだったんだけど、走っている途中にパンの香りがしてきてちよつとだけ覗こうかなーって思つて、中に入ってしまいパンを買つて食べていました!!」

正直にありのままの真実を告げると彼女は呆れたのか、こめかみに手を当てながら深いため息をついた。

? 「ハア、あなたはいつも人に心配ばかりかけるんですから!! もう心配して損しましたよ。それよりも後からみんなにもちゃんと謝つてくださいよ? 少しとはいえ私

「達が遅刻しているんですから」

？ 「ごめんなさい……」

？ 「もういいですよ慣れました…それよりもみんなも待っていてくれますし。ほらっ！ 行きますよ」

呆れたように彼女は言っているが、口元には笑みも見えており何だかんだ優しい幼馴染が手を差し出してくれた。

？ 「うん!! ありがとう!!!」

私は思わず心優しい幼馴染に抱きついてしまった。彼女に抱きつくと長い髪の毛から彼女の香りが鼻腔をくすぐる。

強くて優しくしてしっかり者の彼女は、私の憧れであり、そして大事な親友です！

？ 「もうっ！ 歩きづらいですよ！ 離れてください!!」

そういいながらも、特に振り払おうともせずには笑みをこぼしながら言ってくれた。

その様子を見ながら、ここまで口を開かなかつたもう一人の親友が話の区切りがついたのかと口を開いた。

？「フフツ、でもホント事故とかにあつてなくて良かったよー」

？「ごめんね、心配させた上に待たせちゃって??」

？「大丈夫だよそんなに遅れてるわけでもないし」

フワフワとしていて、聞いている相手を癒してくれるような声か耳の中を通り抜けた。

彼女も私の大事な親友だ。料理や裁縫などが得意で、誰よりも女の子らしくて可愛い子!!彼女のことも当然、尊敬していて私の憧れだ!

？「本当に2人ともごめんなさい!」

改めて、謝罪をするために私がそう言いながら頭を下げた。返事が特にないので、顔を上げてみると2人とも笑顔を浮かべながら私の顔を見ていてくれる。

？「大丈夫ですよ、困らされるのは慣れてますから」

？「えー！ひどいー！」

？「アハハハハ…、お話もこの辺にしてそろそろ行こつ！」

苦笑いをしながら、誰よりも女の子らしい彼女が声をかけてきた。

？「うん！そうだねじゃあ改めて行こつか？」

そう言い私は二人の前を向いて歩き出した。

？「あれからもう長い時間が経ちましたね」

？「そうだね、私たちが知り合ったのは幼稚園生の頃だし長い付き合いになったね」

？「うん、本当にいろいろあったね…：：：本当に色々…」

私は後ろに歩く2人と今までの事を思い出しながら歩いていく。

この二人は昔からの幼馴染でずっと長い時間を一緒に過ごしてきた。目を瞑れば、今までのことが昨日の出来事のように思い出せる。

楽しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと、それら全てを共に分かち合ってきた。

高校では同じ部活をして、同じ夢に向かって輝きを追い求めた。大学では少し離れてしまったけど、それでも疎遠になる事もなく今もこうやって会えている。

今日はこの二人と、高校生活で一緒に夢に向かって走り抜けた仲間たち六人、私を含んだ合計九人である場所へ向かっている。

そう、私達の終わりと始まりの場所……

？ 「今年もみんなと行けることができて良かったよ。今年もきつと喜んでくれるよね……」

？ 「そうですね……」

？ 「うん……」

私たちの間では静寂が訪れ、靴の音だけが響いていた。

そんな中、頭上からは桜色の花卉が舞い散っている。これは徐々に目的地に近づいてきている証拠だ。

桜の花弁たちは私たちを歓迎しているかのように、たくさん舞い踊っており、そんな桜色のトンネルの中を私たちは進んでいく。

—————

目的地のある見晴らしのいい丘の上へと着くとほかの六人がすでに揃っており、それぞれが話などをしていた。

私たちの到着に気づくと、あるものは笑顔で胸の前で手を振ってくれ、あるものは不機嫌そうに頬を膨らませていたり、そしてあるものは興味がなさそうに装いながらもどこかソワソワしながら髪の毛をクルクルといじっていた。

こう見るとみんなバラバラな性格であるのによくここまで長く付き合っているものだと不思議に思えてくる。

これも彼が繋いでくれたものなのだろう。

? 「ちよつと、なんでこんなに遅れてくるのよ〜!!」

? 「に、にこちゃん、穂乃果ちゃんも何かあったのかもしれない話を聞いてあげようよ?」

? 「にやー、にこちゃんは相変わらずうるさいにやー、近くであんまり叫ばないで欲しいにやー」

? 「そうよ、こんなところで騒がないで欲しいわね」

? 「まあ、にこも落ち着いて。ちゃんとみんな集まったんだからいいじゃない」

? 「そうやん、彼だつて怒っているにこつちやなくて宇宙No. 1アイドルの笑顔の姿を見たいと思うでー」

怒っている者を宥めてくれていたりしているが、時間に遅れてしまった私が悪いのだからと思ひ、アハハッとバツの悪い苦笑いしながら喋った。

？「ごめんなさい!!寝坊しちやった挙句、寄り道しちやつて遅れちゃいました!!」

私が正直に訳を話すと、長い黒髪の背の小さい少女が前に出て私に向かって指をさしながら喋ってくる。

？「まったくあんたねえー、心配して損したわよ!!」

？「そうやねえー、にこつち穂乃果ちゃんが事故にでも巻き込まれたんじゃないかって相当心配してたけんなー」

紫色の髪色をした彼女はニヤニヤとした顔で黒髪の彼女へと言葉を投げかける。

？「な!!そんな心配してないわよ!!私が心配なんてするわけないでしょ!!」

そう彼女言いながらそっぽを向いてしまった。だが耳まで真っ赤にしているので説得力はなく、その姿を見たほかのみんなは微笑みをこぼした。

私が遅刻したっていうのにみんな怒るところか、心配をしてくれるなんて本当に勿体無いくらいの仲間たちだ!

こんな素敵なお仲間たちに出会えたことは私にとっての奇跡だ。

？「それじゃあ、まずは掃除からしようか!!」

—————

私たちは今、小さな丘の上の一つだけある墓標の掃除をしていた。墓標のそばには大きな桜の木が立っており、満開の桜の花びらが舞っていた。

この場所にしようと提案したのは私で、この場所はみんなにとって、そして彼にとっても大切な場所だったからだ。

ここに墓標を作るのは少し無理を頼んじやったけど、それでも彼ならここが良いと言おうだろうと思つて。

私は墓石に彫つてある名前を見て、口元を緩ませて笑みが零れた。

そこには大切に、絶対に忘れない、忘れてはいけない私の初めて恋をした人の名前

が記されていた。

？「今年もちゃんとみんなで来たよ」

そう心の中で彼に届くよう呟くと、それに呼応するかのように風が吹き抜けていきたくさんの桜を舞い踊らせていった。



それからしばらくの時間掃除をして、来た時よりも綺麗になった墓標の前で私は目を閉じていた。

今はみんな休憩をされていて、墓標の近くにいるのは私だけだ。そんな中、私はあの日のこと・あの時間のこと、そして彼のことを思い出していた。

私が墓標の前にずっといるのに気づいた一人の友人が私の元へ来て口を開く。

？「あの日から長い時間が過ぎましたね…」

私は今にも涙が溢れそうなのを目を開き、海未ちゃんへと話を始める。

？「そうだね…本当に長かった…私たちが今こうして笑いあっているのも彼がいてくれて、彼がみんなを繋いでくれたおかげなのに…、それなのに…彼と一緒に歩いていけないなんて、神様は本当に意地悪だなーって思ってる…」

これは私のワガママだ。人の運命は決まってるって抗いようなんてないのかもしれない。それでも、そんな運命を私は呪ってしまいたいぐらいで、そしてそんな運命を定めた神様は嫌いだ。

？「そうですね…」

彼女はそういうと私の元へときて、優しく後ろから抱きしめてくれた。

？「大丈夫ですよ…彼は今でも私たちのことをちゃんと見ていてくれますし、それに私はもちろん、みんなもあなたのそばにずっと居ます！だから安心してください、あなたは一人居やしませんから」

それだけ私に言うと、彼女は私から離れて少し離れたみんなの元へと向かっていった。

？「本当に敵わないなあーもう………」

私は零れた涙を手で拭き取りながら呟いた。我慢していたはずなのにあの親友のせいで涙は止まらなくなってしまうていた。

彼がいなくなつてしばらくは私は周りが見えていなかった。いや、見たくなかつたのかも知れない。彼がいらない現実を見たくなくて。

自分でも何をしていたかは覚えておらず、毎日泣いていたことだけが唯一記憶に残っている。家族にも友人にも迷惑をかけて、今思えば恥ずかしい限りだ。その時みんなが居てくれたおかげで私は一人じゃないって気づけた。立ち直ることができた。

私は、みんながいてくれなかつたら、こんな現実には耐えることができなくて彼の後を追っていたかもしれない。

みんなのおかげで今の私がある。いま私がここでみんなといれるのは紛れもなく仲間たちのおかげだ。

自分は弱い人間だ。それでも仲間が支えてくれる。

みんなと一緒に乗り越えていける。

みんなは今少し離れたところで賑やかに騒いでいる。この懐かしい光景は昔と変わらず、これに何度救われたことだろうか。

そう思うと止まりかけていた涙が、また頬を伝ってくるのがわかる。

私は墓標の前でしゃがみこみ、目を閉じ、自分の内にある思いを一つ一つの言葉にして紡いでいく。

？「久しぶりだね！まだ覚えてくれてるよね。今年もみんなで君のとこへ来たよ。私だけでもこの日は絶対毎年来ようって思っていたけど他のみんなも毎年来てくれるなんて嬉しいけど、相変わらず他の女の子からモテモテでちよつと妬げちゃうなく〜」
そう私はすこし不満げか表情をしながら口にする。

？「つて言つても、やっぱりみんなも君を大事に思つて来てくれるから嬉しいな」

何だかんだ言つてもやはりこの気持ちは嘘ではない。みんなが彼を大切でかけがえない仲間だと思つて、毎年のように来てくれるので私の心の中は嬉しい気持ちで満たされている。

？「家の仕事は昔から手伝つてたけど、最近をよく褒めてもらえるぐらいたくさん頑張つてるよ。すごいでしょ!!でもまだ寝坊とかでお母さんと雪穂に怒られるんだけどね〜アハハ〜」

そう笑いながら言い、この一年間の出来事を彼へと伝えるべくいろいろなことを喋つた。

？「君がいなくつたあの日から私はしばらく泣いてばっかりだったけど、それでもみんなが支えてくれて、君の分までいっぱい生きようって……君との約束を果たそうって……君が好きだって言ってくれたこの笑顔だけは絶対に絶やさないようにって頑張ったよ？」

彼との約束。これは私の中に永遠と残り続ける約束。

？「それでもねやっぱりにここに来ると君のことを思い出しちゃうんだよね、アハハ……だからね……」

必死に涙を我慢してもどうしようもなく涙が溢れてきてしまい、とめどなく頬を伝って地面へと落ちていく。

？「今日だけは……今日だけは……私のワガママだけど……約束を破っちゃうのを許してください……」

しばらく時間が過ぎ、頬を伝つて落ちていく涙が止まりそろそろみんなのそこへと行かないと思ひ立ち上がった。

最後に一つだけ伝えようと私は墓標向かつて言葉を紡ぐ。

？「私はこれからも君との約束を守れように頑張るね。そして君の分も一生懸命生きていくからね、しっかりと見守ってくれてると嬉しいかな。じゃあまた来年も、再来年も……その先もずっと来るからね」

ふと私は自分の腕で何かが一瞬煌めいた気がした。そこにはブレスレットについた二つの銀色の花があった。

一つは私のヒマワリ。そしてもう一つは彼の桜。その桜が私の声に返事をしてくれるかのように光つたように見えた。彼はずっと私を見守ってくれている、そんな気がしてしまい微笑みが漏れてしまった。

それだけでも私がこれからも頑張っていく理由には十分だ。彼がついていてくれて

いる、それだけで……

私は振り向いてみんなの方へと歩いていく。

そして彼にだけ届くようにと小さな声で呟く。

？「ずっと好きだよ魁君、これからもこの先もずっと……」

私の小さな呟きは誰かに聞こえることなく、ピンク色の風へと流されていき空へと吸い込まれていった。

これから紡ぐ物語は私が初めて恋をした彼との3年間の話。

長いようで短かったあの3年間という、人生においてはごくわずかな時間。

それでも私にとっては、無限にも思えたようなたくさんの時間で、たくさんの思い出を彼から貰えた大切なひと時だ。

今でも忘れることのできない、永遠に忘れることのできない小さな小さな物語。
そんなお話を始めようと思う。

1話　く出会いの1度目の春く

みんなは運命を感じた瞬間というのがあるだろうか。

ある異性を見た瞬間にかを感じただとかそういったものだ。俺は今まさにその言葉には表せないような何かを感じているところである。

桜が舞い踊る、その下に立つこの少女に。

—————

変な感覚だ。

今どの方向に向いているのか分からない、フワフワとした不思議な感覚だ。

きつと夢なのだろう。

で、なければこんなところにいるはずないだろう。

空からは太陽の日差しが降り注ぎ、辺りには一面のヒマワリが咲いている。

こんな場所に見覚えはない。だから自分自身が作り上げた夢の中なのだろう。意識が朧気で、うまく焦点が合わない。

けれど誰かがそこにいる

目を向けても、まるでノイズのかかったようにその人の顔が見えない。

一体誰なのだろう。

小さい女の子のように見えるが、まるで顔が見えない。

「……………」

いま彼女が何かを言った気がする。

いや、言ったはずだ。

明確な確証なんてないけれど、確実にそうだと分かる。

何故なのだろう?!

「……………」

また何かを言っている。相変わらず何を言っているのかは分からない。

必死に耳を傾けようとしてみるが、そうすればそうするほど意識が薄れていつてしま
う。

待つてと口に出そうとしても喋れない。

どんどんと意識が現実引き戻されて、夢の中の意識が薄れていつてしまっている。

ああ、彼女は何を伝えたかったのだろうか？

必死に考えるけど答えなんて見つかるはずもなく、深い眠りから意識が呼び戻されて

いく……………

理事長「この度はみなさんご入学おめでとうございます。今年度からは共学化が始まり男子生徒の方も入学をしていただき……」

意識が戻ればなんて事のない日常へと戻ってくる。

そう言えば今日は入学式なんだったなあ……

現在入学式の理事長挨拶ということで、何やらトサカみたいな髪型をした綺麗な女性
が話をしている。当たり前障りのない至って普通の挨拶をだ。

？「ふわあー」

俺はついつい欠伸を漏らしてしまう。

まあ、先ほどまで寝ていたので仕方がないだろう。

それよりも、何か忘れている気がする。

何か大事なものをさつきまで覚えてた気がするけど、目が覚めた途端に忘れてしまった感じだ。

何か大切なものを夢の中に忘れてきてしまったような……

まあ、いつか思い出さだろうと自分に言い聞かせることにした。

それよりも本当に眠いな。

これはあれだ。理事長の話のせいだな。

良くも悪くもありきたり過ぎる挨拶は眠気を誘うには十分すぎ、まるで子守唄のように感じてしまうのだ。みんなだつて分かるだろ？ つてか分かれ。

つて事で俺は悪くない!!

そんなくだらない事を考えながら俺は暇だなあーと思う。

未だに涙が出ている目元をこすりながら俺は周りを見渡した。周りを見渡せば見えるのはほとんどが女子で男子は数えるほどしかない。眼福だなあー、と思う一方でこれからめんどいなあーとも考えてしまう。

このような光景が広がるのには海よりふかい訳があるのだ。

それもそのはず俺が今日から通うこの音ノ木坂学院は元は女子校なのだが、近年入学者の減少が問題となっておりその処置として今年から共学化という処置が取られたわけである。えっ？理由が全然深くないって？それは気にしたら負けなやつである。

だが共学化にあたって反対意見なども出ており、伝統のある女子校を守れだの色んなところから意見が出たらしい。だがこのままでは廃校の可能性があるとすることもあり、反対者などもしぶしぶ引き下がったという経緯がある。だが共学化により女子の入学者が減るんじゃないのかなーと俺は思ったりする。

女子校っていうブランドは、通う女子や親御さん達にとってもプラスな側面が大きいだろう。それが無くなってしまいうっていうデメリットが俺は大きいと考えている。

？「まあ俺には関係ない事だけだな」

そう俺は誰にも聞こえない声で呟いた。今言ったように俺からしたらどうでもいい

ことだ。

どうせいつまでもここに通っていられるかも分からないことだし。ここを選んだ理由も学費や場所などまあ他にも理由はあるんだが、別にどうしてもここにきたかったという理由は特にはない。なんで、潰れるかどうかなんて俺には関係ない事だ。

？「ふはあく……暇」

二度目の欠伸をもらしながらおれは目を閉じた。

—————

入学式が終わり教室でのHRも終わり今は校庭の桜の前にいる。まあHRなんて自己紹介とかしてただけだな。まあちなみに誰の話も聞いてなかったので一人も名前がわからん。てへぺろー。

まあ、可愛い子達が多かったのでもいいんじゃないか??

関わりが持てるかどうかは謎だけどな。

それでは、突然ですが初めまして。俺の名前は希咲魁翔（きさきさきと）だ。え？名前が読みづらいだ？そんなこと知るか。

俺は今、今後のことを考えて気分が落ち込んでいるとこなのだ。今は入学式が終わって桜の木の下でぼーっとしているところだが、これから理事長室へ行き挨拶、そして病院へ行って定期検診を受けるという忙しいスケジュールということで絶賛ナーバス中なのである！

周りから見たら少し猫背でどんよとした雰囲気を出しているのでなんとも近寄りたいたらう。

つてか俺なら近よらねえな、そんな不審者みたいなやつには。

魁翔「あー、病院行くのだりー、検査なんてしても結果は見えているのになあ……薬だけくれねえかな……」

ついつい愚痴を一人で呟いてしまっている。

みんなだつて分かるだろ、なんかあの病院の中での居心地の悪さ！

昔からずつと行っているけど、本当にあれだけはいつまで経っても慣れる気がせん!!
つてかそれ以上に行く意味があんまり無いんだよなあー。

ふと視線を感じた。

まあこんな雰囲気出してると見られても仕方ないだろうと思うけどな。その方向を
ちらりと見ると数メートル先にいた少女と目があつた。

魁翔「……ん??」「あつ」

目があつた瞬間、先にある少女の口から小さな声が聞こえた。小さい声が聞こえて
も、こちらを見るのはやめず俺の方を見てきている。

いや、俺の目を見ているのか??

その少女の容姿に目を向けてみると、綺麗に輝くオレンジ色の髪をサイドにポニテ
ルを作った少女だった。

目は透き通った青色をしており、十人に聞けば十人が美少女だと答えるような綺麗な
顔立ちだ。

彼女の目を見ていると、なんだか懐かしい感じがした。この子とどこかで会ったこと

があっただろうか?!

目と目を合わせていると、なんだか引き込まれそうな感覚で、それでいて何故か目が離せない。

この感覚はなんなのだろうか?それが何なのかは分からず今は彼女から目が離せないかった。

数秒間見つめあっていただけだが、なんだか無窮の様に感じる。

すると遠くから、

? 「穂乃果——」

凜と透き通るような声が響いた。その方向を向くと薄く青みがかかった長髪の少女こちらへ向かって呼びかけていた。

? 「あ!海未ちゃ〜ん」

目の前の少女はそう呼ばれた方向の少女へと叫ぶと、その子の元へと駆けて行った。

魁翔「なんだったんだ今の感じ?？」

駆けて行く彼女を見ながら俺は呟いた。リボンの色からして同じ新生生だと思いが

：

うーん??

そういえばクラスの自己紹介で居たような……居なかつたようなあ

まあ、見覚えがあつたのはそのせいかもしれないな。

そこで思考を打ち切りさつさと用事を済ませようと校舎の中へと俺は歩みを進めた。

—————

理事長室の前まで来て俺は立ち尽くしていた。こういったお偉いさんの部屋という前はなんとも入り辛い感じがして中々入れずにいた。だが挨拶をしておかないといけないので俺は決心をした。

魁翔「えーっと、確か沙也加さんだったかな？」

俺は記憶の隅から名前を引っ張り出しながら理事長のドアへとノックをした。すると……

？「入っついていいわよー」

そう聞こえたので俺はドアノブへと手をかけ開いた。

沙也加「久しぶりね魁翔君。って言っても会ったのは小さい頃だから覚えてないかしら？」

先程の入学式で挨拶をしていた理事長が椅子から立ち上がり俺の前まできて挨拶をしてくれた。

魁翔「あー、すいません昔の事なのであまり覚えてなくて」

沙也加「フフツ、いいわよそんなにかしこまらなくても今は理事長としてではなくあ

あなたのお母さんの友人として接つてくれたら」

魁翔「いえいえ、やはり目上の方なので意識しなくてもこうなっちゃってるんですよ」

俺は苦笑いをしながら言った。

魁翔「この度は入学の推薦やら手続きやら色々ありがとうございます」

俺はそういうと頭を下げた。

先程ここに入学した理由で説明してないのがこれのことである。俺の母親の親友だった南沙也加さん。

この人に、是非学校に来てくれないかと頼まれたのである。

沙也加「いいのよ、むしろ私の方から誘ったのだから私の方がお礼を言うべきよね、魁翔君うちの学校を選んでくれてありがとう」

魁翔「こちらこそやることなくどこに行こうか決めてなかったのでありがたかったです。まあ卒業まで居られるかもわかんないですけどね……」

最後の方はほとんど聞こえないような小さな声で呟いた。沙也加さんは不思議そうな顔をしてこちらを見ていたが、切り替えるように顔を変え話を続けた。

沙也加「あなたの両親が亡くなってからは君と会ってなかったら心配してたのだけれど、元氣そうで良かったわ」

そう微笑んで沙也加さんはこちらを見た。

今、沙也加さんが言ったように俺の両親はもうこの世には居ない。

子供の頃に事故で両親を共に失ってしまった。今は親戚の家に引き取ってもらい学費まで出してもらい、さらには今は一人暮らしをさせてもらい学校に行かせてもらっている。感謝で頭は上がらない。

魁翔「その頃のこととも記憶はあやふやですしねー、まあだからこそシヨックが小さくてすんでるのかもしれないですけどね」

これは嘘ではない。

両親が亡くなったのはだいぶ小さい頃だったので気づいた頃には今の親戚の家に引き取られていた。親戚のおじさんとおばさんは本当に我が子のように育ててくれているのだが、俺は遠慮をしまっていた。

そういうこともあってか、今回の沙也加さんの誘いにつてみようと考えた。この学校に行くには、家からは遠いので学校の近くで一人暮らしをする必要があるのだ。この事を二人に相談した時も、二人は優しい顔で了承してくれた。本当に感謝しかない。

沙也加「しかもこれからは一人暮らしをするのでしょうか？私も協力できることはなんでもするから困ったことがあつたらなんでも言つてね？君の体の事も分かっているつもりだからね」

魁翔「大丈夫ですよ。それに、そこまでは迷惑をかけれないですよ。でも、まあどうしても困ったことがあつたら言いますね」

実際言うつもりはないのだが、こういう場の社交辞令として返事は一応しておく。

沙也加「うふふ、そう言ってもらえると嬉しいわ。改めてだけど入学おめでとう。共

学化の一期生として君には来てもらったことだけど、他の男子生徒も少なくってね窮屈な思いをする事もあるかもしれないけど、教師陣でしっかりサポートしていくから安心してね」

魁翔「へえ、ちなみに男子生徒は何人いるんですか？」

沙也加さんは少し顔を曇らせながら、少し苦笑い気味で答えてくれた。

沙也加「5人よ」

魁翔「へえ……」

流石に少ないな。それが俺の率直な意見だった。

二クラスに対して五人とは。

苦肉の策で共学化したものの、結果はあまり芳しくないだろう。沙也加さんの顔を見ればそう読み取れる。

まあクラスとかで男子一人とかだったら少し窮屈だなーと思いつつも、学校側の事

情は俺には関係ないけどなと思ひ考えは止めた。

沙也加さんは俺が少ないと思つてゐるのが顔にて出たのかそれを見て苦笑いをした。

沙也加「ところで魁翔君はこれから何か用事あるのかしら？」

魁翔「あー、一応これから病院の検査を受けに行く予定ですが」

まあ、行きたくないのですがね。

沙也加「それは長い間引き止めて悪かつたわね、もう行つても大丈夫よ」

そういうと沙也加さんはドアへと近づき、ドアを開いてくれた。

魁翔「わざわざご丁寧にありがとうございます。それじゃあ失礼しました、これから
もよろしくお願いします」

そう言うとおれは頭を下げた。

沙也加「こちもよろしくお願いね。君もここに入学したのだから高校三年間を楽しく過ごしていつてね、そのためのサポートはしっかりしていくから」

魁翔「まあできるだけ三年間過ごせるように頑張ってみますよ」
俺は小さな声で呟いた。

沙也加さんはドアを閉め、一人残った理事長室の中でこめかみに手を当てながらため息をついた。

沙也加「はあー、彼はやっぱり後ろ向きなようね」

沙也加は先程の声が聞こえていたのかそう言う。

沙也加「彼が本当の意味で楽しく笑顔で過ごしていけるためにも色々頑張らないとね」

つと自分しかいない部屋でまるで自分に言い聞かせるように呟いた。

――――

場所は変わって俺は今病院の前にいる。

西木野総合病院、日本でも有数の病院で様々な分野を専門とする病院である。この病院で俺は定期的に検査を受けているわけだが、

魁翔「あー、やっぱり帰るかー」

うん、やっぱり今日は行かなくてもいいか。先生に言われたら体調が優れなくて行きませんが、言おう！なら病院に行けよってツツコミをしようとした君！それは言わないでくれ：

俺は帰ろうかと回れ右をして振り向いた。

そこには不機嫌そうな顔をした赤い髪の少女がいた。

魁翔「げっ！」

？「人の顔を見るなりなんなのよ!!」

俺は思わず声を出してしまっていた。つてか何で会ってそうそう不機嫌なんだよ。

魁翔「いやいやー、振り向くとこれまたべっぴんさんがいて驚いただけですよー」
？「だ、誰がべっぴんさんよ!!」

彼女はそう言うとそのつぼを向いて髪の毛をクルクルといじり出した。

彼女なりの照れ隠しの時にする癖みたいなものだ。

ちなみに少女は西木野真姫と言いつこの病院で親が働いているのでよく来ており度々俺と顔を合わせている。

赤い巻き髪と鋭いつり目が特徴的で美人と言葉が良く似合う。つてか医者のお家庭に生まれて、顔もいいなんて人生つて不平等だよな……

そんなどうでもいい事を考えてしまう。

つてかこの子、最初こそ礼儀正しかったのに今では遠慮がないっていうかなんという

か。

まあちなみに今は顔と耳は真っ赤になっており怖さよりも可愛いのだがな。
そこで俺はチャンスだと思い……

魁翔「じゃ、俺はこの辺で失礼させてもらおうよ」

真姫の隣をそろーりと抜けようとすると、思い切り腕を掴まれてしまう。
いやっ、つてか力強いなおいつ!!

魁翔「あのー真姫さん、痛いんすけど」

真姫「あなた確か今日は定期検診の日よね?なのになのどこに行こうとしてるのかしら
?」

クソっ、何でこの子俺の予定知ったんだよ。

なに?俺のこと好きなの??

ギロリと睨まれてヤバっと思ひ必死に頭を働かせる。

魁翔「いやー検診疲れたなー、早く帰って寝ようかなー」

真姫「あなたの高校さつきまで入学式してたでしょ」

だから何で俺の予定を知ってたんだよ！高校からついてきてたの!?

魁翔「早く帰らないとお母さんとお父さんが大変なことに!!」

真姫「あなた確か両親いなくて親戚の方と過ごしてるんじゃないかかったかしら？」

残念だったな!!今は一人暮らしなのさ!!まあだから何なんだって話だけど……

魁翔「うぐっ!……いやー真姫ちゃん今日も可愛いね!!」

真姫「うええええ、って誤魔化さないですよ!!さつきから嘘ばかりついて!!」

いや、どんな驚き方してるの。女の子が出すような声じゃないよ今のは。

魁翔「いや、別に真姫ちゃんが可愛いのは嘘じゃないけど」

真姫「もうからかわないですよ!ほら行くわよ!」

おおー照れてる照れてる笑。目の前の少女は俺の手を掴み俺を引きずるような形で引つ張っていく。

つてか何で俺は引きずられてんの!!

魁翔「いやー！引きずられてて痛いんすけど、ねえ真姫さん聞いて！お願いだから！謝りますから！」

いや、マジで痛いんすけど。アスファルトの上で引きずられんのマジで痛いんすけど

!!

魁翔「いやあ~~~~助けて~~~~」

真姫「うるさいわよ!!病院の近くで叫ばないで!!」

魁翔「あっはい」

魁翔「で、真姫さんや病院の中に着いたのにいつになつたら手を離してくれるのかの」

真姫「なんでおじいさんみたいな喋り方になつてんのよ!」

ハアーと真姫はため息をついた。

いやいやため息つきたいのはこつちなんすけど。

真姫「あなたが逃げないようにパパのところまで連れていくのよ!」

魁翔「いやあーでもいつまでも手を掴まれてると周りから見たらどう思われるかー、あ!あの二人付き合ってるの!?!とか」

なあ!と真姫は小さく悲鳴をあげ顔を真っ赤にした。そして勢いよく手を離すと、

真姫「イミワカンナイ!!」

謎の言葉を発しながら平手打ちをされた。

いやつイテエよ!!

マジでこの子さつきから力強いんですけど!! つてか医者のお娘が患者を傷つけないで!!
周りの看護師さんもクスクスつと笑つてて恥ずかしいわ!!

まあ、手を離してもらおう作戦は成功したわけだな。

俺の顔の安泰と引き換えに……

—————

? 「つで、真姫にビンタされて頬に見事な紅葉ができているという訳かな」

魁翔 「はいまじで死ぬかと思いました」

真姫 「あなたが変わなことを言うからでしょ!!」

そんだけで、普通患者さんをピンタしますかね??
全くもうしつかりして欲しいものだ。
アツハイつすいません調子乗りました。

そんな俺たちの漫才?を目の前にいる40歳ぐらいに見える男の人は話を聞いて愉快そうに笑った。

この人は西木野総一郎、この病院の院長であり俺の隣で不機嫌そうな顔をしている西木野真姫の父親だ。

俺の担当医でもあり、ここまで俺を繋ぎとめてくれている人だ。

総一郎「いやー二人とも仲が良さそうで結構だ!」

魁翔「よくないです」

真姫「よくないわよ!!」

俺たちの声がハマったのを聞いて先生はまた愉快そうにハツハツハツつと笑った。
いやいや、何が悲しくてこの子と仲良くしなきゃならないんだ。

こんな可愛い子なんかと……よくよく考えたら得かもな。

魁翔「てか俺の方が年上なんだよ？もう少し敬う気持ちつてかそういうの見せれないもんかね??ほら敬ってみなさい??」

真姫「はあ??」

魁翔「あ、すいません」

はあーとため息をついた真姫は、立ち上がってカバンを持ちドアを開けて出て行くこうとする。

魁翔「おうじやあ真姫またなー、あんまりツンツンしてないでたまにはデレを見せろよ、デレを。そして偶には先輩を敬え」

真姫「本当にあなたはうるさいわよ！もうパパまたね！」

真姫はドアをバンッと閉めて出ていった。

総一郎「ウチの子が申し訳なかったね」

そういうと先生は申し訳なきように頭を下げた。

なんか、いざ謝られるとこつちまで申し訳なくなってきた。

魁翔「いやいや別に大丈夫ですって、それに俺がちよつかい出しているっていうのもあるんで真姫が悪い訳じゃないですから」

総一郎「はははっ、それにしてもウチの真姫があんなに心を開いているなんて本当に珍しい。なにかしたのかね？」

魁翔「別に心を開いてもらっていない気がするんですけどね、いじつてばかりいたからむしろ嫌われてるぐらいいかもしれませんし」

つてか、かもっていうより確実だろう。なんかいつも俺に突っかかってくるしな。まあ、俺的には楽しいのでありだ！

総一郎「それは多分ないと思うんだがね、それにしても本当に珍しい。どうだねウチの真姫は？ なかなか可愛くていい子だと思うが」

先生は冗談まじりで俺に問いかけた。

この人は自分の娘をそんなに簡単に渡そうとしないですよ……

魁翔「いやいやご冗談を、真姫は頭もいいでしょうし俺なんかより相應しい相手なんかいくらでもありますよ。それに先生ならわかってますよ……??」

俺は苦笑いをしながら皮肉げに答えた。

すると先生は申し訳なさそうに、

総一郎「すまないね、もうすこしでドナーも見つかるはずだろうし、それまで

「それは必要ないですよ」

俺は先生の話を守るように言葉を出す。

魁翔「俺はもう十分生きました。だからもういいですよ、俺が死ぬっていうならその運命は受け入れます。だから見つかったら他の人に回してあげてください」

俺の言葉を聞いた先生は、顔をうつむかせて、そうかね、つとだけ話した。
この人は今何を考えているのだろうな？後悔？悲しみ？
まあ他人の俺には理解なんてできないものだ。

—————

無事検査も終わり結果も大していつもと変わらな結果だった。やっぱり来るだけ無駄な気がするんだけどな。

次から薬だけくれないものかね。

魁翔「それでは今日もありがとうございました」

総一郎「ああ、薬の方はあまり飲み過ぎないようにね、…魁翔君もう少し考えてみないかね？」

言葉は足りていないが、俺には十分と伝わっている。

そして答えも決まっている。

魁翔「大丈夫ですよ、自分なりに考えた結果ですから。それでは今日は失礼します」

おれはこれ以上話を長引かせたくないのので逃げるように話を打ち切り背を向けた。

総一郎「いつでも待っているからね」

俺は何も言わずにその場から立ち去った。

—————

魁翔「たでーまー、おかえりー」

一人で二役という何の意味もないやり取りをする。突っ込んでくれる人もいず声は誰もいない暗い部屋の中へと溶けていった。

せめて突っ込んでくれる人がいればなあ。

魁翔「あー飯……めんどいな。まあカップ麺でいいか」

作るのもめんどいのでカップ麺で済ませることとした。カップ麺といえばやっぱりカップ焼きそばだよな！特に○平ちゃん是最強！異論反論は認めんぞ！でも付属のマヨネーズって辛いよなー、あれ捨てて普通のマヨネーズをたっぷりかけるのが俺の食べ方だ。

魁翔「うめえー、これはうますぎて国宝になるかもなー」

訳の分からないことを言いながら俺は明日からのことを考える。明日からは本格的に高校での授業が始まる。

そう考えると少し気分が憂鬱になる。別に勉強が嫌いなわけではないのだがクラスには女子ばっかだから気分があまり休まらないということもありあまり乗り気ではない。

ってか敵対視なんかさされて虐められたら俺引きこもっちゃうわ。

魁翔「つていまごろ思つてもおせーよなー」

まあ別段俺はコミ症といわけでもない。それなりにコミニケーションは取ることのできる方だ。

だが今更友達を増やしたいとも思っていない。俺の人生においてもう必要を感じない。

まあそれなりに話を合わせてそれなりに頑張つてそれなりに仲良くなつてそれなりに友人を増やしてそれなりに遊んでそれなりの関係を築けばいいかと思ひ今日はもう寝ることにした。

2話 巫女と幼馴染達

さあ今日も始まるぞ〜。あた〜らしいあ〜さが来た希望〜の朝〜。

あー学校行きたくねーメンドー。

昨日も何だかんだ夜遅くまで起きてしまっていた。何をしていたかって、そりや夜の
ゴールデンタイムのアニメを見ていたのだ!!

グダグダと余計なことを考えながら学校に行く準備を俺は進めている。

魁翔「えーと昼飯は購買があるからとりあえずそこで買うとして、教科書を入れてま
あそんぐらいか」

よし後は制服に着替えるだけだな。俺は目の前にかけてある制服をに目を向ける。
音ノ木坂学院が今年度から用意した男子生徒の用の制服、つていつてもスカートがズボ
ンになつてゐる以外は特に変わりはないんだが。

魁翔「少し早いが遅れるよりかはマシだな」

そう思い俺は心の中で行つてきますと呟き家を後にした。

――――

俺は学校の近くにあるアパートを借りて一人暮らしをしている。まあ家賃も出してもらっているのだが。

魁翔「バイトでもしてみよーかねー、激しいことはできないけどなにかねーかねー」

流石におじさん達に申し訳ないという気持ちも強いので暇があるならやつてみようかと前から考えていたことだ。だができることに制限があるから決めかねている状態である。

つと悩んでいると少し行つたところに長い階段が見えた。

魁翔「へえー、こんなところに神社なんてあつたんだな。昨日はぼーつとしてたし気づかなかつたわ」

時間も余裕があることだし暇つぶしにでも行つてみるか。

いざ登りだしてみるとなんだこれ！マジ地獄！足にくるわ息が切れて胸が痛いわやっぱり登るんじゃないわかつたわ。

階段を登りきつたところで俺は俯いて肩で息をしていた。

魁翔「はあーはあーウエ…、もう絶対こねーわこんなしんどいところ」

？「そんな事を言いよると神様に怒られるで〜」

魁翔「うお!!」

背後から声が聞こえて思わず俺は変な声が出してしまった。

？「ふふつ、君反応がおもしろいなー」

俺の背後にいたコスプレのような巫女装束を着た女性は笑いながらからかうように声をかけてきた。

魁翔「いやいや、急に後ろから知らない人に話しかけられたら驚きますよ!!」

俺は恥ずかしさを隠すように大きな声で言い返した。

？「ごめんなー、ちよつと知ってる制服の男の子が目に入ったからな」

魁翔「ん？俺の制服がわかるってことは音ノ木坂の生徒ですか？」

東條「そうやでー、音ノ木坂学院二年生の東條希やよろしゅうなー」

東條希と名乗った俺の前に立つ少女は朗らかな笑顔でこちらを見ている。

魁翔「希咲魁翔です。で、その二年生の東條希先輩はそんな格好をしてここでなにをしてるんですか？」

東條「うちここでバイトさせてもらってるんよ、ここはスピリチュアルなパワーがもらえるけん良い場所なんよ」

なるほどそれでこんな格好をしているのか。巫女装束なんて初めて見たが彼女はとも似合っているように感じる。そしてなんといつてもその胸のあたりにある二つの双丘がどうしても俺の視線を離さない。くそ、これがかの比企谷八幡さんが提唱してい

た万乳引力の法則か!!とてつもない力で引き寄せられてしまうぜ!!心の中で激しい葛藤が起きている中、東條先輩はジト目をして、

東條「あんまりそんなところ見てると女の子から嫌われるでー」

魁翔「い、いいいや、みみ、みみてませんし」

盛大に動揺してかみかみで喋ってしまい俺は顔を真っ赤にしてしまった。

東條「あはははー、君ほんとおもしろいなー」

くそく日頃から俺はどちらかと言えはいじる方に回っているためいじられるのはあまり面白くはない。何か反撃はできないだろうか。

魁翔「いやー!でも東條先輩って美人でスタイル良くてモテそーですよね!!」

東條「ふふつ、希でええよ魁翔君。まあ今までは女子校だったからモテるとかなかつたけん分からのやけどなー」

魁翔「いやーもう今年からは必ずモテますよ!!なぜなら東條先輩は　「希でええよ!」

……でも東條先「希でええよ!」

くそ!俺が喋ろうとしたら笑顔で言葉をかぶせてきやがる!

魁翔「いやーでも東條先輩は　「魁翔君……」

え、なんすか?」

なんか俯いてさつきよりも落ち込んだ雰囲気になつてるんだけど！

東條「そんなにうちの下の名前を呼ぶのが嫌なん？」

東條先輩は涙目になりながら問いかけてきた。

マ、ジ、か、よ！え、これ俺が悪いパターンなの別に悪いことはしてなくない！?

魁翔「いや別に嫌な訳とがじゃないんすよ!?!そのちよつと照れくさくて… その一

希……先輩？」

そう言うのと、満面の笑みで

東條「まあ今回はそれでええかなー、それにしても君はほんと単純やなー」

そこで俺はようやくからかわれていたことに気づいた。くそ！反撃をするつもりがいつの間にか追撃をされていたなんて！今日は勝てそうにないから戦略的撤退を俺は試みる。

魁翔「もう良いですよ！俺は学校に行きます！」

東條「あ！それならお参りして行きやー、お賽銭入るとええことあるでー」

撤退はあっさりと失敗した。な、ん、て、こ、つ、た！東條希……こやつできる！

東條「今みたいに呼び捨てで呼んでくれても構わんでー」

魁翔「ナチユラルに心読まないで下さいよ、恥ずかしい…はあー…」

俺は賽銭箱の前までできて財布を取り出した。えーととりあえず五円玉を四枚いれよーかな。

東條「魁翔君なんで五円玉を四枚なん??」

魁翔「俺は四枚の五円玉で良いご縁がありますように教えられたからですかねー、先輩とここではどんな風に教えられたんすか?」

東條「ウチんところは十円玉と五円玉で十分ご縁がありますよーにつて教えられたな」
へえー、地域とかによつてこういうところには差が出てくるのは面白いなと思ひ、俺が五円玉を投げようとするど、

東條「ちよつと待つてよ魁翔君!!」

投げようとした方の手を掴まれてしまう。

魁翔「の、希先輩!」

東條「なんでもう五円玉入れようとしよんよ!」

魁翔「え?!五円玉入れて二礼二拍手一礼じゃなかつたつすけ??」

東條「ちやうよ、もー最初に一回礼してからお賽銭を入れてから二礼二拍手一礼よ!」
え、そうなの??初耳なんすけど。てか正直そんな細かいところどうでも良くない??

東條「もうそんな事思つてやつてるとバチが当たるで」

魁翔「いやだからナチュラルに考えを読まないでくださいって……」

はあーとため息をつきながらも俺は希先輩に言われたとうりに参拝を行なつた。つて言つても願ひなんて特にないしなー、無難に無病息災つて言つても現在進行形で病を患つてるし。まあとくに願わなくてもいいか。

参拝が終わり隣にいる希先輩の方を見ると、希先輩はキョトンとした顔でこちらを見ていた。

魁翔「どうかしたんですか?」

東條「いや、願ひ事とか願わなかつたん?手合わせてお祈りとかしてへんことない?」なるほど俺が特に何も願つているように見えなかつたのが疑問に思つていたのか。

魁翔「まあ神様なんて特には信じてないんで祈るようなことはしませんね」

それにと付け加えるように、

魁翔「別に願ひ事とかとくないですしね、まあもう叶つてるていうかいまここにいる事自体がそうだっていうのもあるんすけど」

俺の言っている意味がわからないか希先輩は頭の上にハテナマークが浮かんでいるのかごとく首をかしげていた。

魁翔「まあそういう事なんで俺はそろそろ行きますね、授業が始まる初日から遅刻な

んて笑い事になりませんか」

そう俺は笑いながら言い、階段の方へ向けて歩き始めた。そうすると背中の方から東條「まあ学校でまた会うことになると思うけんその時はよろしく頼むわー」

魁翔「まあなるべく善処しますわー」

東條「いやそれ絶対にやってくれんやつのセリフやん」

呆れたような声が後ろから聞こえ、俺は手を振り階段を降りていった。

—————

で、クラスに来てみたはいいもののクラスメイトを見て俺は驚愕をしていた。

魁翔「(うちのクラス男子一人もいねえじゃねえかー)」

なんなんだよ！確か五人は男子は入学したはずなんだろ!!なのになんで俺の方のクラスが俺一人でもう一個のクラスに残り全員いつてんだよ!!なんの新手の嫌がらせだよ!!つてか一方で俺知らないんだよ、昨日HRあつたじゃねーか!!

あ、ぼーつとして記憶ねえわ。俺がわるいやうか。

魁翔「(ああー余計明日からキタクナクナツタワ)」

まあ今はこのことは考えないようにしようかねと思ひ自分の席へと座った。

？「おはようございます」

隣の席から声が聞こえてきたので見てみると、

隣の席にはT H E真面目という風な長髪の女子が授業の予習をさつきまでしていたのか開いた教科書が机に置いてあり挨拶をしてくれた。

魁翔「ああ、おはようさん、えっとー確か坂井さんだったかな？」

？「一文字も合っていませんよ!!昨日自己紹介をしたではないですか！」

おおー！見事なツツコミだなど思いこれは逸材を発見したと思い、

魁翔「あーごめん、ちよつと人違いだったわ、で酒井さんはどうかしたのか？」

？「だから一文字も合っていないしさつきと同じじゃないですか!!」

魁翔「そんなことはないぞ!!最初の坂井は坂道の坂で、次のは酒の酒井だ!!」

？「話しているだけじゃ分かりませんよ!!」

魁翔「ごめん、ごめん余りにも君のツツコミが面白くてさ!で、君だれだっけ？」

？「本当に分かってないんですね…、昨日の自己紹介の時にいましたよね？」

魁翔「ああいたけど誰のもの聞いてないんで一人も名前が分からん!さあはよう教え
たまえ!」

？「なんでそんなに偉そうなんですか…」

彼女はハアーとため息をつきながら不満げな顔で口を開いた。

海未「私の名前は園田海未です。部活動は弓道部に所属する予定です」

魁翔「ああーそうだそうだ園田さんだったな。まあ隣の席同士よろしくね！俺の名前は希咲魁翔だ、よろしくな！」

海未「はあー、まあこちらこそよろしくお願いします」

こちらから一方的にいじつたのにちゃんと対応してくれる辺りこの子は真面目なのだろうと思う。

お互いの自己紹介（正確には二回目）が終わったところで丁度予鈴が鳴った。

海未「ちよつと穂乃果起きてください!!」

そう言いながら彼女は俺の後ろの席で寝ている少女方を揺らしていた。

学校来てからすぐに寝てるなんて変な奴だなーと思いつつ後ろへ振り向いた。寝ている彼女は髪しか見えないがどこかで見覚えのある髪をしていた。

魁翔「オレンジ色の髪にサイドに結んでいるポニー……、どこかで見たことあるようなーしかもつい最近見たような気がするんだが……」

うーんと腕を組みながら俺は悩んでいた。そしてその少女か頭をあげた。

魁翔「あ！」 穂乃果「うーん？」

顔をあげた彼女と目が合い俺は思い出した。

魁翔「(昨日の桜のところで会った子か)」

頭の中にあつたモヤモヤが晴れた感じがしてスッキリした気分だ。

穂乃果「うーくん」

彼女はまだ寝ぼけているのか完全に開ききっていない目でじーっと俺の顔を見つめて来た。見つめられていて気づいたのだが彼女の目の色は綺麗なサファイヤ色をしており吸い寄せられるような魅力を放っており顔の方も恐らく大抵の人が美少女と称されるであろう見た目であつた。

魁翔「間違いないく昨日の子だ。でも昨日のようななんか変な感じは感じねーな」

ここでようやく目が覚めたのか完全に開いた目で俺のこゝを見つめ驚いたように立ち上がった。

穂乃果「う、う、海未ちゃんがとうとう男の子になっちゃたーく!!」

魁翔「はあ?」

俺は思わず声が漏れてしまった。

海未「そんなわけないじゃないですか!!私はこちらです!!っていうかとうとうってどういうことですか!!」

俺の横と後ろで騒ぎ出した二人を見ながら俺は、

魁翔「(巻き込まれるとめんどそうだし知らないふりをしとこ)」

そう思い授業が始まるまで前を向いてぼーっとしていた。

授業が始まり今は数学の授業である。俺は文系科目は得意なのだが理数系科目は死ぬほど嫌いなのである。どのぐらい嫌なのかというところファミレスで出る唐揚げにレモンを勝手にかけるやつぐらい嫌いなのである。え、例えがわかりづらいつて……じゃあ自分の家のベッドに勝手に寝ようする人ぐらい嫌いなのである。だったらどうだ!!

つと死ぬほどどうでもいい事を俺は考えながら授業を受けていた。

そしてこれもどうでもいいことだが、現在俺の後ろでは心地の良い寝息が聞こえてきている。

穂乃果「うーん、お茶がーパンがー来ないで〜、カレーパンだけ来て〜」

魁翔「いやー！どんな寝言だよ!!逆に気になるわ!!」

俺は心の中で突っ込んでしまっていた。

穂乃果「あと少しと少しと、春のパン祭り!!!」

急に大声で後ろから叫び声が聞こえ教室の一同が俺の後ろにいる彼女に注目をした。

先生は青筋を立てながら笑顔で尋ねる。

先生「そうか！高坂はこの問題が解けるのか、では答えを言ってみろ。ちなみに間違えればお前は今日の課題は倍だ」

穂乃果「え！えーと…海未ちゃんに??」

小さい声で彼女は友人へと尋ねている。

先生「よし、じゃあ高坂は倍が決定ということでじゃあ希咲こたえてみる」

穂乃果「そんなあゝ、先生ゝゝ」

みんなが笑っている中、先生が次は俺には尋ねて来た。高坂お前は寝ているのが悪いから自業自得だな。俺は一応聞いてるからお前とは違うんだ。

俺は勢いよく立ち上がり自信満々で答えた！

魁翔「先生俺は話を聞いた上で全く分かりません!!」

先生「よし、じゃあ希咲お前は課題3倍な」

魁翔「いや!!なんですか!!俺はちゃんと話は聞いてたんすよ、聞いた上でこんな問題解けるかって諦めただけじゃないっすか!」

先生「なんか腹立ったからしょうがない」

魁翔「なんか腹が立ったってどういことですか!!職権濫用じゃないですか!」

先生「つべこべ言わずやれ!嫌ならおまえのテストの点数は0点とする」

魁翔「ぜひやらせていただきます!!」

教室が笑いで包まれる中、俺は少し苛立ちながらもこんなに楽しく過ごせるなんてい
つぶりだろうかと思いを馳せていた。

—————

キーン
キーン
キーン
キーン

授業が終わり昼休みとなったが俺と高坂は課題を先生のとこへと取りに行くために
職員室へと向かっていた。

穂乃果「ねえねえ、希咲くんって数学苦手なの?」

魁翔「ああ、そうだな。勝手にからあげにレモンをつけるやつぐらい嫌だな」

穂乃果「ん??唐揚げにレモン??」

全然意味が通じなかったのか高坂は首を傾げていた。うーんこのネタはあまり通じ
ないかと認識して封印しようかなと心の中で考えた。

魁翔「ああ何でもないから気にしないでくれ」

穂乃果「んーそう？ …それより希咲君!! さっき海未ちゃんと話してたでしょ!？」

魁翔「ああ話してたけどそれがどうかしたのか？」

穂乃果「なら丁度いいや! 私達と一緒に昼食べようよ!」

何が丁度いいのかはよく分からないが、とりあえずどうしようか。まあぼっち飯を食うつても居心地があまりよくないかもしれないしここは誘われておくか。

魁翔「おお、別にいいぜ。でも昼飯購買で買いたいからプリント取った後にそつちによつてもいいか？」

穂乃果「うん! いいよ!!」

魁翔「じゃあとりあえず早いことプリントもらいにいこーぜー」

そういう俺たちは職員室へと向かう足を早めた。

—————

先生「お前たち最初の授業なのに真面目に取り組む気はないのか？」

先生はため息をつきながら俺たちへと問いかける。

魁翔「だから先生おれは真面目に聞いてはいたんですって、だからかだいなんてもらう意味が分かりません」

穂乃果「あ！希咲君ずるい！！それじゃあ私だけが課題いっぱいやって来なくちゃいけないじゃん！！」

魁翔「いやいや、お前は寝て俺は起きて俺は起きてたんだぜだからおれのほうが普通は課題は少ないはずなのに、なんで俺の方が多いんだよ！！」

先生「おい希咲うるさいぞ、職員室では静かにしろ」

魁翔「あ、はいすいません」

先生「もう二人とも邪魔だからこの課題持つて早く出て行け」

そう言うと先生は手でしっしっしと出ていくように促す。正直俺まで課題を増やされる意味は分からないがもう諦めるしかないようだ。俺たちは二人で職員室から退室した。

魁翔「はあー、初日から良いことねえわー」

穂乃果「元氣だして希咲君！！ファイトだよ！！」

魁翔「いやなんか他人事みたいに応援しているけど高坂も課題あるんだからな？」

穂乃果「大丈夫！！私は海未ちゃんに教えてもらうから！！」

魁翔「へえー園田さんはイメージ通りつちや通りだけど勉強できるんだなく、つてかお前最初から一人でやろうとする気はないのか…」

俺が呆れながら聴くと、

穂乃果「海未ちゃん優しいから教えてくれるから大丈夫だよ!!」

魁翔「へえー二人とも仲良いんだな、俺は手に入れるべきでないものだな……」

俺の声の最後の方が上手く聞き取れなかったのか高坂は首を傾げる。

魁翔「あー、別になんでもないよ」

それでもまだまだ気になっているのかしばらくモヤモヤした感じだったが、

穂乃果「あ！それとね私と海未ちゃんともう一人の子がいてねそのう二人と私を合わ

せた三人は小さい頃からの幼馴染なの！だからねとって仲が良いの!!」

いきなりのマシンガントークに俺は苦笑いをしながら考える。

いついなくなるかも分からない人間が深い関係を築くべきではない、これは俺が人と関わる上で常に考えてしまうことだ。いなくなり傷つくのなんてどちらも良い思いをしない。ならば最初から深く関わらなければいい。そう俺は自分に言い聞かせているが、高坂達のような無償の信頼関係というものはひどく羨ましくかんじた。

3話　　b i r t h d a y　　p a r t y　　p l a n

購買へと行き無事に昼飯を調達した俺と高坂は教室へと戻ってきた。

穂乃果「海未ちゃん、ことりちゃん遅れてごめくん！」

園田「授業をちゃんと受けてないからいけないんですよ！」

南「あははー海未ちゃんも落ち着いて、ね？」

そう言う俺と高坂は二人が座っている机の元へと向かう。

園田「あれ？希咲君も一緒なのですか？」

魁翔「ああ、高坂にお呼ばれたしからな。まあ別にそちらのお二人さんが断るなら俺も無理には言わないけど」

まあ断られたら断られたで俺の豆腐メンタルが砕け散るだけだがな。そしてその砕け散った豆腐で今日の晩飯は麻婆豆腐となる。

相変わらず俺はなにを言ってるんだろーな。

園田「私は別に構わないのですが……」

そう言う園田さんはもう一人灰色の髪の子の方をチラチラと見る。

南「私も別にいいよ」

魁翔「そうかありがとうな、えくくと、親鳥さんだっけ？」

園田「なんであなたは必ず人の名前でボケようとするんですか…」

園田さんは呆れたように言う。

南「違うよ、ことりだよ！」

魁翔「あー！そうだったそうだった！東の小鳥さんだ!!」

園田「もう突っ込むのも疲れます…」

魁翔「そんな！園田さんが突っ込んでくれないとどうやって漫才をするんだ!!」

園田「そもそも漫才なんてしていません!!」

穂乃果「あははー、二人とも仲がいいね！」

魁翔「そのとうり!!」 園田「どこがですか！」

—————

俺は購買で買ったパンを食いながら三人と会話に相槌を打ったりしてぼんやりと聞いている。

魁翔「(それにしても三人とも可愛いなー、高坂は元気って感じで、園田さんは清楚って感じ、南さんは癒しって感じでそれぞれベクトルは違うけどなー。その辺も踏まえてほんとバランスのとれた幼馴染なんだな)」

穂乃果「き・き・ん！きさ・くん！」

ぼーつとしていて話を聞いてなかったので高坂に大きな声で呼ばれたのにようやく気づき意識が戻ってきた。

魁翔「あー悪い悪い、ちよつとぼーつとしてたわ、でどうかしたのか？」

穂乃果「もうちゃんとして聞いててよねー！、でね希咲君！」

魁翔「うんなんだ？」

穂乃果「私の名前でもボケて!!」

魁翔「・・・はああ？」

俺は言葉の意味がわからず数秒間フリーズしてしまっていた。

穂乃果「だから私の名前でもボケて!!」

魁翔「いやいや二回言わなくても聞こえてるって」

穂乃果「じゃあどうぞ!!」

こいつ無茶振りが凄すぎるぞ！俺は助けを求めようと園田さんの方を見る。すると

諦めてくださいと言わんばかりに首を横に振っている。ならばと南さんの方を見ると、すぐくニツコリとした笑顔でこちらを見ていらつしやるではないか。

逃げ道が完全にねえよこれ詰むやつじゃねえか。

それでもとなんとか回避しようと俺は抵抗をする。

魁翔「いやいや高坂、こういうのは初対面の人とやらないと受けないものだからな」

穂乃果「そっかー」

お！意外と聞き分けがいいのかも

穂乃果「じゃあ初対面って設定ですればいいんだよ!!」

魁翔「なんでそこまでしたがるんだよ…」

穂乃果「ええーだって海未ちゃんやことりちゃんだけ羨ましい!」

海未「なにが羨ましいですか…」

ことり「あははー…」

魁翔「今やつても俺がスベってメンタルやられるだけなんすけど」

穂乃果「大丈夫だよ!さっきのもあんまり面白くなかったし!!」

魁翔「ははは!!…へこむ…」

俺のメンタルは一撃粉碎され椅子の上で体操座りをした。

海未「全く食事中に行儀が悪いですよ」

魁翔「あ、はい」

今食事も終わり四人で talk time となってる。なんで英語かって？それは気分だ。

穂乃果「ねえねえ希咲君って誕生日いつなの？」

魁翔「四月十五日だぞ」

穂乃果「えー！もう一週間後じゃん！もつと早く言つてよ！」

魁翔「まともに話したの今日だろうが」

穂乃果「あーそつかく、エヘヘ」

え、なにその反応めつちや可愛いじゃん。

穂乃果「そうだ！その日の放課後四人でお祝いしようよ！！ね、二人とも！」

園田「はい、その日は部活の方もオフの日なので私は大丈夫ですよ」

南「私も大丈夫だよ」

魁翔「三人とも別にそこまでしなくても俺は大丈夫なんだが…」

園田「希咲君一度言い出した穂乃果は中々止められませんから諦めてください、それに知り合ったのも何かの縁ですしここは大人しくお祝いされてください」

そう微笑まれるとなにも言えなくなってしまう。

南「ことりもせつかくだし希咲君のお祝いしたいんだけどダメ…かな？」

うおーそんな上目遣いされたら断れねーだろが!!

魁翔「はあー、じゃあ有難くお祝いされますよ」

穂乃果「やったー!じゃあどこでやるーか!?!」

なんでお祝いする方がそんなに嬉しそーなんだよつとおれは心の中でツツコミを入れながらも頬が緩んでいた。

園田「あ!私はその日はお客様がお家の方にいらつしやるのでちよつと…」

南「私の家もその日はちよつと…」

穂乃果「うーん、私の家もその日はキッチンとか使えないと思うんだよねー」

魁翔「あー、ならウチにするか?一人暮らしで

親への心配とかは無いんだが。まあアパートだから少し狭いんだが」

提案しといてなんだが、自分自身に驚いた。まさか会って間もない友人を家に招き入れるなんて今までなら考えられないことだ。

穂乃果「え!希咲君一人暮らしなの!行く行く」

こうして来週の火曜は俺の部屋でパーティが開催されることが決定した。別に汚い訳じゃないけど掃除しないと。決してエッチな物を隠さないといけないとかそんなことはないぞ！ホントだぞ!!と、とりとめもない事を考えていた。

穂乃果「それにしても明日は授業がなくて嬉しいな〜」

そう言つて高坂は飛び跳ねるように喜んでいただけだ。俺は、はて？つと首をかしげた。明日なにか祝日とかだっけなつと。

園田「はあー、あなたは本当に何も聞いてないんですね…」

魁翔「失敬な、ちゃんと右耳で聞いているんだが左耳から全部抜けて行つてただけだ!!」

園田「それを聞いてないって言っているんです！」

俺の横では高坂は、ウンウンつと頷いているが園田さんにまとめて怒られる。

南「あははー、明日は身体測定と体力測定があるから授業がないんだよー」

魁翔「ああー、そう言えばそんな事言つたような言つてなかつたような」

確か午前中の半分で身体測定、もう一半分で体力測定で午後から残りの体力測定だったかね。

南「穂乃果ちゃんも海未ちゃんも運動できるからいいけど、私運動苦手だから少し憂鬱だなー」

魁翔「確かに印象的にはそういう風に見えるな、まあ三人ともがんばれ」

園田「なんでそんなに他人事みたいなこと言い方なのですか」

園田さんはまたもや呆れたように言う。なんか俺園田さんにこんな反応させてばっかだなと内心で思った。

魁翔「いやだつて実際他人事だし。俺体力測定にはほとんど参加しないし」

ええーと園田さんと高坂の声が響いた。全く俺の耳が壊れちゃうよ。この時、南さんがあまり驚いてないことが少し気になったが話を続けた。

魁翔「俺生まれつき体弱いから体育とかは基本見学なの。まあやるとしても負担の少ない握力とか長座体前屈とかかなー」

穂乃果「そうなんだー、大丈夫なの??」

高坂が心配するように聞いてきて俺は安心させるように答える。

魁翔「日常生活を送る程度ならそこまでは問題ないなー、まあ階段とかみたいに息が切れることをするとしんどいけどな」

朝も神社登って死にかけたしなと内心で苦笑いをする。まあそのおかげで巫女のスプリチュアルな先輩に出会えたんだが。

ここで昼休みの終わるチャイムが鳴り次の授業への準備をしなければいけない時間となる。

魁翔「まあだからそんな気を使うことはないぞ、歩くことも何時間もしない限りはそ

こまでは負担じゃないしな」

そう言い俺は次の授業の準備を始めた。

—————

授業が全て終わり放課後となった。園田さんは部活へ行ってきましたと言いき教室からでて部活へと向かっていった。

そろそろ俺も帰りますかねと思いい立ち上がると、

穂乃果「希咲君一緒にかーえろ！」

そう言い高坂が近づいてきた。横には南さんも一緒だ。

魁翔「別にそれはいいんだが、お前放課後職員室へ呼び出されてなかったか？」

穂乃果「あぁー！！忘れてたー！！

二人ともちよつと待ってて!!」

そう言い残し高坂は教室から飛び出て行った。

そうして教室では俺と南さんの二人だけとなった。

魁翔「(そういや南さんとはほとんど話してねえな、一人だけ席離れてるしな)」

席順は出席番号できまっております、俺の後ろが高坂で右が園田さんだ。そして南さんだけ俺たちとは離れた席なので必然的に話す機会が少なかったのである。

魁翔「高坂は本当にそそっかしいやつだな、昔からああなのか？」

南「うん、昔から私達を引っ張って行ってくれるの！」

なるほどそう言う捉え方もできるんだな。確かに園田さんも南さんもそんな積極的なタイプには見えないし、高坂が引っ張っていき二人が支える、本当にバランスが取れた三人だ。

あ、ひとつ聞きそびれてた事があったわ。

魁翔「そういえば南さん、俺が体弱い事聞いた時あんまり驚いてなかったけどどうして」

何気なしに聞くと、

南「うー、やっぱり覚えてくれてないんだね、はあー私のお母さんが理事長つて言ったら分かるかな」

俺はこの言葉に息を呑んだ。

魁翔「(つて事は俺の病気が知られてる可能性がある。もしそうだとしたらあまり深く関わるべきではないのかもしれないな)」

南「昔たまに会ったりしてたけど覚えてない？」

魁翔「ああ、すまない全然覚えてないな」

南「やつぱりかー、でも昔あつた時よりも元気そうだから体の方もだいぶ治つてるのかな？」

俺は内心ホツとしていた。病気の詳しいことは沙也加さんも言っていないだろうか、きつと人よりも体の弱い子ぐらいの認識なのだろう。

魁翔「ああそうだな、さつきも言つた通り生活をする上では支障はあんまりない程度にはな」

南「そつかー、しばらくしたらウチに遊びに来なくなつちやつたから心配したんだよ。でも元気そうでよかつた！」

そう言うのと彼女優しい笑みを浮かべた。

彼女たちは本当に優しい。だからこそ俺の本当の事は言うべきではないだろう。彼女たちを傷つけないためにも言わずにおこう。

—————

高坂が帰ってきて俺たちは三人で下校をしている。俺の前で二人が会話して、度々話を振ってくれて相槌を打ちながら歩いていった。

ある曲がり角まで着くと、

南「じゃあ私はこつちだからまたね！」

穂乃果「うんまたねー!!」

魁翔「おうまたな！」

高坂は頭の上で腕をブンブン振り、俺は体の前で小さく手を振った。

穂乃果「それにしても希咲君と家が近そうだねー、私の家この近くだし！」

魁翔「そうだな俺ももうすぐ着くしなー」

とたわいも無い話をしていると俺のアパートが見えてきた。

つとそこで、

穂乃果「あー、あそこだよ私の家!!」

魁翔「え!まじで?俺その隣の隣のアパートなんだけど」

つてか今高坂が指差したのなんかの店じゃね??

穂乃果「ええーほんとじゃあついでに私の家寄って行ってよ、いいものあげ、る、か、ら!!」

なんだかそう言われると逆に行きたくなくなるな。なんか怪しいもの渡されそうだ

し。

魁翔「なんか怪しそうだし嫌だ」

穂乃果「ええー、ウチの饅頭食べてってよー」

ウチの饅頭ってことは?!

魁翔「高坂んちって和菓子屋かなんかなのか?」

穂乃果「そうだよ!!和菓子屋穂むら!!だから寄ってこうよ!」

魁翔「まあ時間もあるし別にいいよ」

穂乃果「よーしじゃあ行こー!!」

そう言うとき高坂は俺の手を掴み進み始めた。ってか恥ずかしいからちよつとやめてくんないかな。力が弱い俺は抵抗もできずに連れていかれることとなった。

—————

穂乃果「ただいまー!!」

?「あら、お帰りなさい。ってその子は?」

ドアを開けるとレジに一人の女性がいた。いや正確には団子を食べながらいた。し

かし何事もなかったかのように話すのでこっちの見間違いかと思うほどだ。

? 「もしかして……彼氏?」

恐らく高坂の母親であろう人は人の悪い笑みを浮かべながら高坂へと言う。

穂乃果 「そ、そんなわけないじゃん!ただの友達だよ!!」

高坂よ、そんなに顔を真っ赤にして否定をしなくても。なんか嫌われてるのかと思つて俺のメンタルがやられちゃうぞ!

魁翔 「あー、はじめまして高坂さんと一緒にクラスの希咲魁翔と言います。隣の隣のアパートの方に引越してきたんでちょうど家の近くということで招待されたつて感じですね」

鈴子 「あらあらご丁寧にも、穂乃果の母親の鈴子と言います。よろしくね」

と微笑んでくれた。高坂の母親と言ひ、南さんの母親と言ひ、若くて綺麗な人ばっかだなーつと考える。

穂乃果 「お母さんお饅頭とか余ってるのがある?」

鈴子 「あー、ちょうどいっぱい余ってるから奥の方で二人で食べていいわよ」

魁翔 「あ、そんな悪いですしお金は出しますよ」

つと財布を出そうとする

鈴子 「いいわよ別に、どうせ余っちゃったら捨てちゃうんだからむしろゴミが増えな

いために是非食べてほしいわ」

つと遮られてしまった。

魁翔「じゃあ、お言葉に甘えてご馳走になります」

そう言うのと俺は高坂に奥の方部屋へと通されそこでお茶をする事となった。

目の前に出された饅頭を食うと、

魁翔「うまつ!!これめっちゃうめーじゃん!!」

穂乃果「うーん美味しいんだけどねー、子供の頃から私食べてるからもう飽きちゃつて

るんだよねエヘヘー」

そう言いながらも高坂は饅頭へと手を伸ばして頬張っている。

魁翔「飽きてる割には食うんだな」

穂乃果「お腹が空いてるから何か食べないと死んじやうよ!!」

魁翔「そんなに食べると夜ご飯が入らなくなるんじゃないか?」

穂乃果「大丈夫!!美味しいものはいっぱい食べれるから!!」

魁翔「そんなに食うと太るぞー」

何気なしにそう言うのと高坂が静かになり、下に向けて俯いている。

そしてゆっくり立ち上がり俺の前まで来ると両手で肩を掴み、

穂乃果「女の子にそんなこと言っちゃダメだよー!!」

つと大声で叫びながら俺を揺らしまくる。揺らされてる俺はと言うと、

魁翔「(うう、揺らされて気分が悪いし、そしてなにより顔が近い!!)」

目の前まで顔が近づいており揺らされて気分が悪いわ、高坂からいい匂いがするわでもう頭がごっつちやごちやとなっていた。

魁翔「高坂それ以上やばい、それ以上は俺の胃と心が保たない…」

ようやく至近距離で暴れることに気づいたのか高坂はすぐに離れて顔を真つ赤にしながらそっぽを向いた。

そして俺は顔を真つ青にして口を押さえていた。

鈴子「穂乃果うるさいわよー! ってあんた達なにやってんの?」

高坂の母親が来た時には、高坂は俺に背を向けて顔を真つ赤にしており、俺は逆に顔を真つ青にして頂垂れていた。確かになにしてんだろーな俺たちは。

しばらくして高坂も元に戻ったのか俺に向かって頭を下げた。

穂乃果「さつきはごめん!! ちよつと最近体重がちよつとばかり増えてて八つ当たりしちやつて…」

魁翔「あー、こちらこそごめんなデリカシーないこと言ってすまなかつたな」

そうお互い頭を下げると、プツとお互い吹き出してしまい笑ってしまった。

魁翔「まあでも高坂は十分細かいし気にしなくてもいいんじゃないか？今のままでも十分可愛いしな」

穂乃果「えっ!!」

驚いた声を高坂は上げると高坂は顔を真っ赤にしながら、上目使いでこつちを見ながら、

穂乃果「あ、ありがとう／＼」

照れながら言われるとなんだかこつちも恥ずかしくなってしまう俺まで顔を真っ赤ににしてしまった。

鈴子「イチヤついているとこ悪いんだけど、希咲君は時間の方は大丈夫なの？なんならご飯もウチで食べていく？」

穂乃果「イチヤついてないよ!!」

魁翔「あははー、今日のところは失礼しますよ」

鈴子「そう？別に一人分増えるぐらいなら手間じゃないし別にいいのよ？」

穂乃果「そうだよ！希咲君一人暮らしだけど料理出来ないからカップ麺とかばっか家で食べてるって言ってたじゃん！」

魁翔「うぐっ！」

痛いところを突かれてしまった。確かに俺は料理がほとんど出来ず、小学生レベルの

家事能力しかないだろう。しかしこのままこの家でお世話になるとまたからかわれる可能性もあるしそれは恥ずかしくない!!

鈴子「あらー、それは母親の立場からは放っておけないわね」

くそっ!なんとかして抵抗せねば!

魁翔「いやーでもこんなに借りばかり作るわけにもいかないじゃないですか!」

鈴子「それなら将来、穂乃果のお婿さんになってこの家を継いでくれて返してくれたらいいわよー」

穂乃果「お母さん!!さつきからなに言ってるの!?!」

やばいこれは勝てないやつだ。もう抵抗するのも無駄な気がしてきたわ。

魁翔「はあー分かりました、ありがたくいただきさせていただきます」

鈴子「そうこなくっちゃ!じゃあ料理作って来るわねー」

そう言う和高坂の母親はるんと台所へ向かっていった。

穂乃果「もうーくお母さんったらなにいつてるだろう!!」

顔を赤くしてプリプリと怒っている高坂を見て可愛いなっと思ったのはここだけ話だ。

ちなみに高坂家でいただいたご飯は相当うまかった。ただ俺と高坂のことを母親と高坂の妹の雪穂がいじってくるたびに父親の方からすごいオーラを感じて、正直生きて

帰れないんじゃないかと思った。

何はともあれ無事に家に帰ってきて俺は一つのことを決心した。

魁翔「(もう絶対ご飯はご馳走ならねー!!父親が怖すぎて気が休まらねーよ!!)」
つと心に誓い眠りについた。

4話 真面目な少女

さあ今日も始まるぞ。あたらしいあゝさが来た希望の朝。

なんか昨日の朝も言つてた気がするな、デジャヴだな。つてかデジャヴつて使い方が
いまいちわかんないだがどう使うのが正解なんだ？

まあそんなこんなで今日も今日とて始まりませよ。

魁翔「今日は確かに体力測定とかがある日だっけかな？まあ適当に見学でもしとこ
かねー」

俺は考えながらバックの中に荷物を入れて学校へ向かった。

—————

今日は特に寄り道もせず学校へ来たのだが何か忘れてる気がしてならないんだよ
な。

魁翔「うゝゝん??なんか忘れてる気がするだけどなー？」

誰しもが経験したことがあるこの出てきそうで出てこない気持ち悪さ。そんな風

に机の上で俺が唸っているとドアが勢いよく開け放たれた。

穂乃果「希咲君!! なんで先に行っちゃうの!?! 昨日一緒に行こうって言ったじゃん!!」

そこで俺はあつ!と思い出した。

魁翔「そうだそうだ! 高坂と待ち合わせしてたんだっただわ! いやーやつと出てきたよー」

そんな風にヘラヘラとしている俺の前で高坂はプリプリと怒っている。

穂乃果「もうー笑い事じゃないよ! 心配したんだからね!」

魁翔「心配?」

俺は意味が分からず首を傾げた。

穂乃果「そうだよ! 事故とかにでもあつたのかと思つたよ!」

そこまで聞いたところで俺は肩を後ろから叩かれたことに気づいた。そこには園田さんが立っていた。ただなぜかとても笑顔なのが気になる。

魁翔「おー、どうした園田さん?」

園田「どうした、じゃありません!! どれだけ心配したと思ってるんですか!」

魁翔「いやー、そこまで心配しなくてもー」

これは正直なところ俺の本音だった。これまで親友と呼べるものもいなかった俺は他人に対して心配するなどと言った強い感情は持つたことがなかった。

園田「そりやあ心配しますよ!!そのー・・・一応昨日から友達なんですから:」

後半は声が小さくなって聞き取りずらかったがちゃんと言の耳には届いた。彼女は恥ずかしかったのか顔を赤くしながら下を俯いてた。いつのまにかいたのか園田さんの横に南さんも来て笑顔で微笑んでいる。

魁翔「そつかー:、それは本当にごめんなさい!!すつかり約束を忘れていました。これからはしつかり気をつけます! 南さんもごめんな、待ちぼうけさせちゃって」

南「希咲君に何かあつたわけじゃないからよかつたよー」

そう言いながら笑ってくれた。

魁翔「とりあえず三人ともすまなかつた!!お詫びになにか言う事を聞くので何か考えといてくれ」

穂乃果「ほんと!!なににしよつかなー」

そう高坂は言うと言の満面の笑みで飛び跳ねるように喜んでる。まあ一つぐらいならそこまで無茶な要求もされないだろうし大丈夫だろう。まあ金銭的なことならなるべく安い物にしてもらいたいところではあるが。

園田「別に私はいいですよ」

南「私もそんな怒ってないし大丈夫だよ」

お!この二人は天使なのかな?

穂乃果「ええー二人とも何かしてもらおうよ！」

そしてここには悪魔がいた。

穂乃果「そうだ!!じゃあ私のこと名前で呼んでよ!!」

魁翔「へえ?」

なにが来るかと思っていたら、予想の斜め上な答えが来たので変な声が出てしまった。

魁翔「そんな事でいいのか?」

穂乃果「うん!なんか苗字で呼ばれるの変だなーって思ってたから呼んで欲しいな

!!」

思った以上に簡単な頼みごとだったので正直なところ拍子抜けだ。

魁翔「うん、まあ……穂乃果?」

穂乃果「はーい!!」

魁翔「いや、なんでそんな大きな声で返事すんだよ耳が壊れちゃうよ」

穂乃果「いやーつい嬉しくてー、エヘヘー」

だから可愛いなちくしょうめ!!

なんで俺に呼ばれたぐらいでそんな嬉しそうにしちゃうんだよ。そんなんじゃ好きなのかと勘違いしちゃって告白して振られちゃうじゃん!いや、振られちゃうとこまで

セツトなのかよ。嫌なハッピーセツトだなおい!!

南「じゃあ私も名前で呼んで欲しいなー」

おっと! さっきまで別にいいと言ってたのに南さんまで便乗してきたぞ。

魁翔「まあ別にこんぐらい全然いいけど。えっと、ことり?」

南「はい!」

いや、だから可愛いな!! また振られちゃうよ!!

そこで横の方から視線感じて見てみると園田さんがじつとこちらを見ていた。

魁翔「ん? もしかして園田さんも名前で呼んで欲しいの?」

園田「な!! そんなことあるわけないじゃないですか!! ただ二人だけ名前なのに私だけ

苗字なのは何というか…不公平というか…」

なんと言うかモジモジしながら言う園田さんを見てるとちよつとSっ気が刺激される感じがしてきてならない。まあやり過ぎると仕返しが怖そうなので、定番のあれをやっておくか。

魁翔「じゃあいくぞ!!」

そこで俺はスウーと息を吸い大きな声で、

魁翔「よしこーー!!!」

園田「だから誰なんですか!!!」

おお！ナイスツツコミだなと感心していると先生が教室へと入ってきたてHRの間となった。

—————

ところ変わって現在俺は校庭の隅っこで体育座りをしている。べ、別に女の子が見たくてこんなとこにいるわけじゃないぞ??

簡潔に言う暇だからである。現在身体測定が終わり体力測定も少し終わったところで昼休みを挟み、昼からの体力測定が始まったところだ。俺は自分のできる測定項目は終わってしまったので暇なのでここにいる。

ちなみに隣では穂乃果が死んでいる。

魁翔「おっくい大丈夫か」

俺は持っているうちわで穂乃果をあおいでいる。

穂乃果「はあはあ、こんなに全力で走ったのは一年ぶりだよ」

こんな様子になってしまっているのは体力測定の持久走をしたからである。ちなみにクラスの後半分づつしているので現在は海未とことりが走っている。走っているのだが……

魁翔「なんだあの体力お化けは……」

先頭では海未が独走していた。それは俺がドン引きをするぐらいのスピードでだ。そしてことりは最下位の方を走っていた。

穂乃果「海未ちゃんは今から家で日本舞踊とか習い事してるから体力すごいんだよねー」

え？これはそれだけで説明できるレベルなのだろうか？めっちゃ笑顔で喋りながら走っているの、なんかもう奇声をあげて走っているヤバい奴に見えるレベルなんだが。

魁翔「なんか海未を見ると怖いけど、ことりを見ると癒されるな」

もう前の方の鬼神の様な走りをしているやつは見ずに、後ろで精一杯走っていることりを見て俺は癒されていた。

園田「一位をとってきました！」

指でVマークを作って喜びを伝えようとする海未。

魁翔「あーよくやったよくやった」

つと棒読みで迎えてやった。

ことり「ひくくん疲れた」

隣ではことりが疲れ果てて倒れこんできた。

魁翔「大丈夫かことり！飲み物やるぞ！ことりはよく頑張ったなく、ことりは偉い！！」
と言つて頭を撫でてあげた。

南「う〜んくすぐつたいよ〜」

と言いつつもことりは目を細めながら気持ち良さそうにしている。つてか自然と頭を撫でているのだがこれ大丈夫だよな？後から警察が来て捕まって俺の人生をがゲムセツトしたりしないよな??

と、くだらない事を考えていると、

園田「なんで私の時と態度が全然違うんですか!!」

魁翔「いやーだつて海未こわかつたし、正直引いたし」

園田「うう…私だつて頑張ったのに」

魁翔「え?なんで落ち込んでんの??海未も頭撫でて欲しいの??」

園田「違いますよ!!」

穂乃果「じゃあ代わりに私撫でて!!褒めて!!」

ええー、なんでなの??最近の女子高生は頭撫でてもらうのがブームなんですか??それとも今日の占いでラッキーアイテムは人に頭を撫でてもらうのかなの!?アイテムじゃねーし。

魁翔「よーしよし、ほれほれー」

なるべく棒読みかつ無心で穂乃果の頭を撫でる。　　そうだ！これは犬だ！俺は今
ペットシヨップにきてて犬たちに囲まれてるんだ！

穂乃果「くうーんー」

え!?こいつ本当に犬なの!?確かに喜ぶ時とかシツポがブンブン振っているのが見え
るのかごとく喜んでるけど。

魁翔「(やばいこれは…少しでも集中が切れると変な気持ちになっちゃおう!)」

1分ほど撫でたところで二人とも満足したのかニコニコしながら離れていった。

魁翔「よーし!!それじゃあ海未も撫でてやろう!!こい!!」

そういうと海未はうつむいたまま俺の目の前まで来て手を振りかぶり、つてえ?手を
振りかぶり??

園田「そんなものいりません!!」

パチーンつと気持ちの良い音が聞こえたのを最後に俺の意識は刈り取られることと
なった。

気がつくとも目の前には白い天井が広がっていた。

魁翔「おぉー！これがかの有名な気がついた瞬間目の前に白い天井が飛び込んでくるというやつか!!」

俺がくだらない事に感動していると、足の方に重みを感じるのと寝息が聞こえることに気づいた。

ん？っと思いい見るとそこには穂乃果とことりが俺の足にもたれるように寝ていた。

そこでドアが開き海未が入ってきた。

園田「気がつきましたか。すみません私も看病しておこうと言ったんですが二人が見るから部活に行ってきたよって言われるもんですから……」

なるほどなっとな俺は納得した。まだ知り合ってた数日しか経ってないが、この園田海未という少女は責任感が相当強いように見受けられる。自分が迷惑かけた相手には自分で看病しなきゃと思うだろう。それでもこの場を離れたのはこの二人の親友の言葉のおかげだろうな。

本当に羨ましい関係だなっと思いつつ、

魁翔「あぁー別にいいよ、さっきのは俺も悪かったしな」

園田「いや！さっきのは私の責任です!!なにがお詫びをしないと……」

やっぱり責任感が強い子だなと俺は思う。根っからの真面目な子で他の人からなんて言われようと自分が納得しないと納得するまでこの状態が続くのだろう。

そこで昨日穂乃果が言っていたことを思い出し、

魁翔「あく、急に饅頭が食いたくなってきたなー!!」

俺の言葉の意味が分からず海未は首を傾げている。

魁翔「あーアンコが食いたくてしようがないな!これは穂むらで饅頭を食うしかないなー!でも一人で食いに行くのもなー、誰か付いてきてくれて奢ってあげるから一緒に食べてくれる優しい人はいないかなー」

俺はまくしたてるように早口で喋ると、海未はようやく言葉の意味が分かったのか少し驚きながらも口を開いた。

園田「じゃ、じゃあ私が行きましようか??」

恐る恐ると言った感じで俺に申し出る海未。

魁翔「おおー、本当か海未は優しいなー」

魁翔「よし!じゃあこれが俺からのお願いってことでさっきのことはチャラな」

そう言うとき海未はなにか可笑しかったのか笑い出してしまった。

魁翔「え?どうしたの??」

園田「いやー、魁翔は案外優しいのだなっと思つて…ウフフっ」

そう言い海未はまた笑い出してしまった。

ちなみに俺が三人のことを名前前で呼び始めたので、三人も俺のことは名前前で呼んでい
る。

それにしても俺が優しいか。確かにこの3人に対してはなぜか今まで関わってきた
人たちよりも考えて行動している自分がいるのかもしれない。もしかしたらこの3人
の関係が羨ましくてこの輪に入りたいと無意識に思っているのかもしれない。だがそ
れは良くないことだ。

俺はイレギュラーな存在だ。いついなくなるかも分からない。だから深く関わるわ
けにはいかないだろう。そう頭では理解しているのだが、今はこの3人と一緒に居たい
と思ってしまう自分がいる。だから今だけは、今だけは近くでこの3人を見ていたい
と思う。

魁翔「はいはい、俺はめんどくさくて不器用な男ですよ」

そう俺は言うのと、寝ている二人の耳元まで行き、

魁翔「よーし、穂乃果！ことり！！起きろー！！」

穂乃果・ことり「うわっ！！」

耳元で大きな声を出すすと二人とも飛び上がるように起きた。

ことり「あゝ、魁翔君おきてたんだゝ」

いかにも寝起きといったフワフワとした感じことりは目をこすりながら口を開いた。
穂乃果「大丈夫？ 魁翔君結構な距離飛んでたけど？」

魁翔「え!? そうなの?？」

この事実を初めて知り、確認の意味をこめて海末の方を向くと顔を逸らされてしまった。

魁翔「(真姫といい海未といい女の本気の一撃は恐ろしいな、寿命の前に殺されるかもなー)」

内心苦笑しながら下らないことを考えて、

魁翔「よーしじゃあこれから穂むらにいつて饅頭食いに行こーぜー、今日は俺の奢りだー」

そう言うのと穂乃果からえーっという声が聞こえた。

穂乃果「私アンコはもう飽きたよー」

穂乃果の苦痛の悲鳴が保健室で響き渡った。

今はまだこの3人に俺の本当のことは話せない。いつか話せる時が来るかもいまは分からない。それでも今だけこの3人のそばにいて俺が本当に欲しいものがなんなのかを見て行きたいと思う。

今俺は穂乃果の家の前に立っている。一緒に行く約束があるのだが、穂乃果は朝は相当弱いほうなので、最近では穂乃果を起こしにくる事が日課となりつつある。その事に内心苦笑しながら俺はドアを叩いた。

魁翔「すいませーん、魁翔でーす！」

俺が声を出すと中からはーいと返事をしながらドスドスと誰かが走って来る音がする。まあ聞こえた声てきにあの子なのだろうけど。そこでドアが勢いよく開かれた。

雪穂「魁翔さんおはようございます！」

魁翔「雪穂ちゃんおはよう」

この礼儀正しい少女は高坂雪穂、穂乃果の妹だ。どことなく雰囲気は似ているが、目つきもキリツとしており姉とは対照的でしたっきりとした性格の少女である。

魁翔「穂乃果は起きてるかー？」

雪穂「それがー…いつも道理で…、すみません…」

雪穂ちゃんが申し訳なさそうに言い、つつい苦笑いが出てしまう。先ほども言ったとうり穂乃果は朝に弱いので、俺がきた時には大抵の場合寝たままの時の多いのだ。

雪穂「ほっんとうに毎日毎日すみません！もう別に置いていってもいいんですよ?？」

おおー実の姉に対してこの言いよう。なんとも口が辛いことで。俺も可愛い妹にこんな扱ひされたら辛過ぎて自殺しようかと思つて、屋上までいって、やつぱり怖くなつて戻つて来るまでであるぞ！

いや、戻つてきちやうのかよ。つてか妹なんていねえし。

魁翔「ああー別にいいよ、つてか連れて行かないと海末に怒られるし」

そんな他愛もない話をしばらくしてると、

穂乃果「ごめく〜ん魁翔君!!すぐ準備してくるからちよつとまって!!」

二階から降りてきた穂乃果はそう言うときまた二階へと戻つていった。

何というか嵐のようだなと感じる。

雪穂「あ、そうだ!魁翔さん朝ごはん食べましたか?」

魁翔「いや特には食べてないけど?」

俺は基本的には朝食は食わない派なんだよな。何ていうかあんまり食う気分にならないんだよな。そんな事を考えていると、

雪穂「じゃあちよつと饅頭食べていきませんか??新作の試作品作り過ぎちやつて中々

減らないんですよ」

魁翔「お!じゃあ少しいただいでいこうかな」

最近こうやつて饅頭をよく食べさせて貰っている。つてかいつも高坂家の親父さん

は作り過ぎてしまい余らしてしまうらしい。まあこうして俺へのお裾分けらとなる事で、親父さんもいっぱい作れるし俺も食費が浮くでwin winの関係だね!!
って事で穂乃果の準備が終わるまで俺は饅頭を食べながら待つこととした。

—————

園田「二人とも遅いです!!」

穂乃果「ごめくん!!」

魁翔「うっうー、苦しい…」

南「大丈夫魁翔くん??」

すぐに心配してきてくれることりはまるで女神のようだ。俺も転生したらこんな女神に会いたていな!

園田「はあーどうせまた穂乃果が寝坊してそれをまっっている間に調子に乗って饅頭を食べ過ぎたのでしょうか、早くいきますよ」

魁翔「なぜばれた!?!」

俺が驚愕の顔をしていたら、

園田「先週も同じことをしてたじゃないですか、なぜ学習しないのですか」

あーそういえばしたな。てつきり海未が何か能力に目覚めてしまったのかとおもったわ。

魁翔「まあ大丈夫だつて、昨日も夜飯食つてなかつたし」

園田「余計に体に悪いですよ…、本当に大丈夫ですか??」

今言つたとうり俺はたまに夜飯を食わない時がある。別にダイエットだとかそんなものではないんだからね! いや誰得だよこれ…

まあただ家に食い物がなく買いに行くのがめんどいだけだ!!

穂乃果「魁翔くんうち近くなんだから来てもいいんだよ?」

やだ! この子優し過ぎ! そんなんじや勘違いしちゃうよ!!

魁翔「いや流石にそこまで迷惑はかけれないつて」

園田「でも流石に見てられませんかよ、お昼ご飯も購買で買ったパンとかしか食べてないじゃないですか」

南「もしよかつたらお昼ご飯でも作つてこようか?」

翔魁「え! まじで? ことりが作つて来てくれるのか!? いやでもな…」

穂乃果「じゃあ私が作つてくれる!!」

魁翔「あーそれは却下で」

穂乃果「何で〜」

いやなんか、穂乃果はまずい気がする。なんとというか飯マズヒロインみたいな香りがしてならない。クッキー作ってみたら木炭ができちやう系ヒロインみたいないな！どんなヒロインだよ…

園田「じゃ、じゃあ私が作ってきましようか……？」

いやそんな顔を赤くして照れながら言われても。しばらく過ごして分かってきたが海未はもの凄い人見知りで照れ屋だ。普段はシャキツとしててカッコいい系なんだけどな。まあそういうギャップも、グツとくるんだけどね！

魁翔「別にそこまで気を使わなくてもいいよ、それより早く学校行って、ちゃつちゃつと勉強して放課後を楽しもうぜ」

穂乃果「そうだね！今日は魁翔くんの誕生日だから盛り上げようー」

俺と穂乃果で握りこぶしを上に向けている姿をことりと海未は微笑みながら見ていた。

—————

さあやってまいりました!! 放課後です!!

after schoolです!

なんか俺のテンション朝からおかしいなあ:

え? 元からだって? 今言つたやつ先生怒らないから正直に名乗り出なさい。

つてかこういう教師は大抵怒るんだよなあーすぐ嘘つくんだよなあー。つて俺は何を言ってるんだ。

くだらないことを考えると、パンツと俺の机が叩かれた。

穂乃果「さあ魁翔くん、行こう!!」

魁翔「おう、つてかなんか嬉しそうだな?」

穂乃果「そりやそうだよ! 誕生日パーティーだよ!!」

そう言いながら穂乃果は顔をぐいぐい近づけてくる。いやどんだけ近づいてくるんだよ。てか改めて近くから見てみると海未とかことりもそうだけど、穂乃果もすげー美少女なんだよなあー、つてじゃなくて!!

魁翔「お、おう、顔近いんだけど」

穂乃果「あ…ご、ごめん…」

そう言い穂乃果は顔を赤くして離れた。近すぎるとなんか女の子特有の甘い匂いが出てくるし。ってか女の子ってなんであんないい匂いしてるの？体内でアロマでも生成してるの？

両者とも視線が合わせられずモジモジしていると、

園田「何してるんですかあなたたちは…」

魁翔「にや、にやんのことでりゆか？」

園田「ただだけ動揺してるんですかもう…」

南「あははー…」

海末には呆れられてしまい、ことりには苦笑いをされる始末だ。だってしょうがないだろう！穂乃果は性格は少しちゃらんぼらんだがこれでも美少女だぞ！それが顔の目の前までくると照れるだろーが!!

穂乃果「は、早く行くよ3人とも!!」

そう穂乃果も顔を赤くしながらもそうせかす。

魁翔「そ、そうだぞ！はやく俺の誕生を祝いたまえ！」

園田「はあー、じゃあいきますよ」

南「そうだね！まずはスーパーにでも行こう！」

顔を真っ赤にした二人が二人を引っ張るようにして俺たちは学校を後にした。

魁翔「で、なんでスーパーに来たの？オードブルかなんか買って帰るの??」

園田「違います」

ですよねーと俺は相槌を打ちことりの方を見てどういことと表情で訴えかけた。するとニツコリと笑顔を返してくれた。

え? どういうこと?

俺のことが好きってことですか? 僕勘違いしちゃいますよ?

穂乃果「今日は海未ちゃんところりちゃんが日頃から栄養が偏ってる魁翔くんのために料理を作ってくれるんだよ!!」

魁翔「ああーなるほどなー! って穂乃果はしないのか?」

穂乃果「ほ、穂乃果は二人が料理してる間に魁翔くんが暇にならないように相手してあげるんだよ!!」

魁翔「なるほど、つまり穂乃果は料理ができないのか」

まあ予想道理つちや予想道理だな。

穂乃果「穂乃果だって家の手伝いしてるんだから和菓子ぐらいなら作れるもん!!」
プクーつと頬を膨らまして抗議してくる穂乃果。可愛いなおい!指でほつぺた突き
たくなつちやうだろ!

魁翔「あー、はいはい」

ぎやーぎやーと騒ぐ俺たち二人に対して後ろでことりと海未は何をつくろーかと相
談していた。

園田「魁翔は何か食べたいものがありますか?」

南「あ!ちなみにケーキは私が家で作ってきたからデザート以外でね!」

魁翔「え!まじで?」

南「うん!お菓子作りは好きだから今回のも頑張つて作つたんだ」

おおーこたりの作つたお菓子かー、これは今から心がびよんびよんしてくるな!

…なんか俺がいうと気持ち悪いな。

魁翔「うーん食いたいものかー、野菜以外なら大抵何でも食べるんだが」

園田「野菜以外つてどれだけ好き嫌いするんですか」

いやーだつてあんまり美味しくなくね?料理すれば美味しくなるもんもあるけどそ
のままだとしても苦手なんだよなー」

南「じゃあ、お鍋とかどうかな？」

穂乃果「お鍋がいいー賛成ー!!」

園田「今日の主役は魁翔なんですから穂乃果の意見は聞いてません」

魁翔「いや別にいいぜ鍋で、でよかつたらただけ俺的にはチゲ鍋がいいかなーって？
もう春だげど」

園田「私はそれで構いませんよ」

南「私もいいよ」

穂乃果「よーしじゃあチゲ鍋の材料を取りに行こうー！えーと…チゲ鍋ってなに??」

園田「穂乃果…」

南「穂乃果ちゃん…」

これには海未だけじゃなくことりも絶句してしまった。

魁翔「ま、まあ気を取り直して買いにいくか」

園田「そうですね行きましょう」

穂乃果「ねえ！チゲ鍋ってなに!?チゲってなーに!?!」

そう叫ぶ穂乃果を無視しつつ俺と海未前を歩いていく。その後ろで優しくことりが意味を教えてあげていた。

魁翔「悪いな何個か持つてもらって」

園田「いえ、私は普段から部活などで鍛えていますから」

いま家に帰っている途中だが、買った物の袋は俺と海未で持っている。最初は意地からか、俺が全て持とうとしたが体も弱くインドア派の俺には無理だったのだ。それで仕方なく海未にも持つてもらってゐるわけだ。

ことりと穂乃果も気を使って持とうとしてくれたがそれは流石に断った。

それにことりの手が傷ついたりしたら大変だからな!!

魁翔「あー、やっと着いたー。ここのアパートの二階の部屋のとこに住んでんだ」

穂乃果「私も来るのは初めてなんだよねー」

魁翔「まあそれじゃあ入るか」

そう言い部屋の前まで行き鍵を開けドアを開いた。中はちゃんと整理整頓されてお綺麗なはずだ。まあ昨日の夜に念入りに掃除したからな。

園田「じゃあ私とことりで鍋の準備をするので二人は何かしててください。魁翔、

キッチンにあるものは借りても大丈夫ですか？」

いちいち確認までしてくるなんて本当に律儀な子だなっと思いつつ、

魁翔「ああ、何でも使ってくれていいよ。つて言ってもあんまりものは揃ってないだけだね」

そういうと、海未はありがとうございますと言い作業に取り掛かっていった。

穂乃果「じゃあわたし達はなにをする??」

魁翔「そうだなー、特にこれといってうちには遊び道具もないしなー」

穂乃果「じゃあ！魁翔君の小さい頃の話が聞きたい!!」

魁翔「小さい頃の話かー…」

べつに話すのはいいのだが、話せない部分も沢山ある。全てを話してしまうと彼女たちとこれからの関係次第では傷つけることとなり得る。だから言える部分だけ面白おかしく話してやるか。そう決めると俺は話を始める。

魁翔「じゃあまずこのことからはなそーかなあれはな．．．．

そう話していると時間は立つのは早いものでもう料理ができようとしていた。俺と穂乃果が楽しく会話をして、たまに海未とことりが相槌や言葉を挟む。このやり取りはなんとも気持ちがよく今まで誰かと話して感じなかったような何かにより、俺の心が満たされていく感じがしていた。

南「もうできるよ〜」

園田「なので二人とも少し準備を手伝ってください」

はーい、と二人で返事をして海未たちのいるところへ向かう。俺たちは机を拭いたり、皿を出したりなどまあ料理以外の手伝いをさせてもらえた。

そして部屋の机の上に鍋を持っていき準備が完了した。

そこで音頭をとるのはやはり穂乃果のようで穂乃果が立ち上がり、

穂乃果「それじゃあ魁翔くんの誕生日を祝って〜」

穂乃果海未ことり「誕生日おめでとー！！」

パアーンと音が響き渡った。いつ用意してたか気づかなかったがクラッカーを持ってきていたようだ。

魁翔「いや嬉しいけど、いきなりはちよつとびっくりするし、てかアパートなんでクラッカーはちよつと…」

園田「私はやめようと言ったのですが、穂乃果がどうしてもやりたいと…」

穂乃果「だって誕生日なんだよ！誕生日といえばクラッカーだよ!!」

南「穂乃果ちゃんそれはちよつと無理がー」

魁翔「どういふ方程式なんだよそれは」

てか、穂乃果は俺にめがけてやらないで欲しいんだが。海未ことりは天井に向けて

打っていたが穂乃果だけは俺の顔面めがけて打ってきやがった。紙とかが飛んできてマジでビビるからやめて欲しいんですけど。

魁翔「ま、まあとりあえず冷める前に食べるか」

俺がそう言いみんなで食べ始めた。

魁翔「お！うめえな！二人ともやっぱり料理上手いんだな!!」

南「うーん？お鍋だったらそこまで変わらないと思うけどな」

園田「そうですね、基本的に具材を入れて煮込むだけですから」

魁翔「うーんでも今まで食べた鍋の中で一番うまく感じるんだよな」

園田「そ、そんな褒めてもなにも出ませんよ!!」

顔を赤らめながら照れている海未を見ながらみんなで笑った。

それからしばらく談笑をしながら食事続けた。

魁翔「みんなありがとなわざわざ俺なんかのために」

穂乃果「友達だから当然だよ!!」

他の二人も同じ思いなのか頷いている。

友達だからか……正直こんな言葉は俺はあまり好きではない。綺麗事にしか聞こえないからだ。

こんな事を言う奴は大抵裏ではなにを考えているのか分からない。

だが綺麗事のような事を本気で言う人間もいるのだろう。この三人がいい例だ。だからこそこの三人とは関わるべきではないのじゃないかと再度考える。

だが何度考えても答えは出そうにない。

魁翔「そっかー…友達だからか…」

南「魁翔くん??」

俺の反応を不審に感じたのかことりは心配そうに俺の名前をよぶ。

魁翔「なんでもないよ！それよりことりのケーキが食べたいかなー、なんて！」

ことり「じゃあ切り分けてくるからちよつと待っててね！」

そう言いことりはキツチンに向かって箱を持って移動していく。

穂乃果「ことりちゃんのケーキはとっーても美味しいんだよ!!」

魁翔「へえー、それは嬉しい限りだな」

穂乃果「今年からは食べれる回数が増えるから嬉しいなー！」

魁翔「そうなんだ、なんか分かんが良かったな」

そう言うとは思議そうに穂乃果がこちらを見てきた。え、なんか俺変な事言っちゃつ

た??なんかやばい事言っちゃったの??

そうすると海未が

園田「今年からは魁翔の分のお祝いが増えるからという意味ですよ」

魁翔「あー、そういうことね…」

そつか穂乃果たちにとつてはそれが当たり前なんだよな。俺が来年もこの場所においてお祝いができるっていうことが。俺自身先のことはいつ無くなる分からない状態なので考えたこともなかった。

魁翔「そつかーそうだよな…、ありがとうな」

穂乃果「魁翔くん??」

なにのお礼なのか分からなかったのか穂乃果は首をかしげる。

南「みんなーできたよー、今年は魁翔くんがチョコが好きということでチョコケーキにして見ました!」

へえーよく覚えてるなつと俺は思った。確か最初の方にちらつと言った気はするがよく人の話を覚えてくれてるもんだな。

魁翔「つてかクオリティすげーな、店で売ってるやつみたいだな」

南「そんなにはすごくないよー、気に入ってもらえるといいけど…」
俺が一口パクツと食べる。

程よく甘く、決して甘すぎないこの感じは俺にはちようど良い味だった。

魁翔「うつま!!ことりめつちや上手いよ!!ことりは料理ができてすごいな」

穂乃果「ことりちゃんは本当にお菓子作りが上手いからね」

そう言いながら穂乃果も口に持っていき食べている。

園田「そうですね、ことりは料理がとても上手です!」

南「そんなことないよ、二人と比べたら私なんて…」

最後の方の声は声小さく近くにいた俺にしか聞こえなかったかもしれない。

先ほどの言葉からしてもしかしたら二人に対してことりも何か思うことがあるかもしれない。俺にできることは今はないからどうする事も出来ないんだけどな。

魁翔「うん本当に上手いよ、この俺が言うんだ自信を持っていいぞ!!」

園田「なぜ魁翔に褒められと自信を持っていいのですか…」

南「あはは…：ありがとう魁翔くん!」

みんなケーキが食べ終わり片付けでもするかと思っていると三人ともが俺の方へ向いている。

魁翔「な、なんだ、俺なんかした?」

穂乃果「違うよもうー、はいっ!これプレゼント!!」

そう言うのと穂乃果は小さい箱が入った袋を渡してきた。

魁翔「え?いいのかパーティをしてもらっただけじゃなくプレゼントまで?」

穂乃果「うん!そのために選んだんだから!」って言ってもそんなに高いものじゃ無いんだけどね」

魁翔「そっかー、ありがとな！開けてみてもいいか？」

穂乃果「うん！いいよ!!」

そう言ってもらい俺は袋から取り出した箱を開けた。そこには桜の形をしたキーホルダーが入っていた。

魁翔「これは…桜??」

穂乃果「そうだよ！最初に魁翔くんと会ったのが確か桜の木のことだった気がして、もしかして嫌いだった…??」

俺の反応が薄いので気に入らなかつたのかと思つたのか穂乃果がそう尋ねてきた。

魁翔「いや、よく覚えてたなつて思つてな」

穂乃果「なんか選んでいる時にふと思ひ出してね！それにこれ!!」

そう言うのと穂乃果たち三人は携帯を出し付けているキーホルダーを見せた。

魁翔「あ、もしかしてお揃いのやつなのか??」

園田「そうです、中学生の時に三人でお揃いのをかつたんです」

南「それで穂乃果ちゃんがせっかく友達になつた魁翔くんともお揃いのをつけて欲しいつて言つてね」

そう言われながら俺は三人のキーホルダーを眺めていた。穂乃果はヒマワリ、ことりはユリ、海未はアジサイをモチーフにしたものだろう。しかしこれは…

魁翔「でも俺が貰ってもいいのか？なんていうか三人の友情の証とみたいなものじゃないのか？」

穂乃果「魁翔くんは嬉しくなかった…?？」

魁翔「いやー、嬉しいんだがなんていうかな…」

穂乃果「もういいの!!私達が魁翔くんとこれからもずっと友達でいようねっていう証なんだから!!」

魁翔「そうか…じゃあありがたく付けさせてもらおうよ」

そう言うのと三人とも満面の笑みを見せてくれた。

それにしても桜か…。俺が母さんとの記憶で一番残っているものかもしれない。あの日母さんと一緒に見た桜だけは色褪せることなく俺の心の中に残り続けている。もしかしたらあの時穂乃果と会ったのが桜の下だったのももしかしたら…：…：そこまで考えておれは頭を振った。

今はこんな事を考えても仕方がないことだ。

魁翔「よーしそれじゃあ夜はまだまだこれからじゃー」

俺がそう叫ぶと穂乃果がノリノリでわーと言いつたり、ことりは拍手をしながら笑顔に向けてきたり、海未は頭を押さえながらやれやれといった感じだった。

これから先のことなんて分からないけど今一つ言えることは、今この瞬間を生き続け

ていこうという考えだけだった。

6話 夢見る少女

？「にっこにっこに♡」

今起こった事をありのまま話そう。

「屋上で絶対零度が起き世界が凍りついたという感覚だろうか？俺の目の前で世界が凍える現象が引き起こされていた。

黒髪のツインテールの少女が目の前で独特の指の形を作り、妙に甲高い声で放った言葉により俺は一步も動けなくなっていた。

そもそもなんでこんな事になったんだろーな？少し時間を巻き戻して振り返ってみよーか？よし！そうだな少し時間を巻き戻して現実から逃げてみるとするか！！

—————

俺の誕生日から一週間ほどが経ち、今日も今日とて通常通り授業があった。昼食前の最後の授業は数学で俺にはチンプンカンプンだったので夢の世界へとダイブしていた。そしたら教科書の角で頭を打ち抜かれていた。あのー先生後ろでは穂乃果が寝ているのに俺だけっすか？男女差別だ!!っと文句を言ったらまたもや角で打ち抜かれて俺はダウンした。

くそーあの暴力教師め！今度靴の中にもゴキブリのオモチャでも詰めてやるーか！

……仕返しが怖そーだからやめとこ……

ってなわけで昼休みに入って俺は今日も購買へパンを買いにいっていた。

魁翔「うーん、今日は気分転換にどこか別の場所で食おーかね〜」

大体の日は教室へ帰り穂乃果たちと机を並べて昼食を取っているのだが、たまに学校の中をブラブラと歩き回ってテキトーな場所で昼食をとることがある。今日はそんな気分だったので探索をする事にした。

魁翔「そうだなー、屋上って入れるのかね?」

アニメの世界でキャラたちがよく屋上で何かをしているものだが、実際は危険などの理由から立ち入り禁止の学校も多いのだ。この学校はどうなのか知らないから暇だし行ってみるか？中学の頃は立ち入り禁止だったので少しショックだったので期待を込

めて今は向かっている。

屋上へ近づいてきたところで屋上の方から何か声が出て聞こえてきた。

魁翔「なんか大きな声が聞こえるけど部活でもしてんのかねー??」

気になりドアを少しだけ開けて屋上の様子を伺ってみる。

東條「にこつち：それはないわあ：：」

にこつち? 「だから!ぬわあんでよ!!」

そこには希先輩とにこつちと呼ばれているちっこい少女がいた。

なんかめんどくさい事に巻き込まれそーなのでそろそろドアを閉じて見なかったことにしようとしたら、

東條「魁翔くん、覗き見は感心できんなさ〜」

マジかよこの人、この前は心読まれるし今回はいるのバレるしこれがスピリチュアルパワーというやつか。

魁翔「希先輩奇遇ですねこんなところで会うなんて」

東條「ウチがおること気づいてて逃げようとせんかった?」

魁翔「いやーそんな訳ないじゃないですかー」

俺は極めて冷静さを保ちながら答えた。ここでボロを出せば俺の心を攻撃してくるに違いない!今回こそ俺が勝つんだ!!

謎の宣誓を心の中でしていると希先輩の隣ににいるにこつちという少女が少し不機嫌そうに口を開いた。

にこつち? 「希こいつ誰よ?」

自分だけのけ者にされていたのが気に入らなかつたのか睨むような目でこちらを見てくる。

身長は低く、赤いリボンで二つのポニーテールを左右に二つ作つたいわゆるツインテールという髪型をしており、髪も綺麗な光沢が輝く黒だ。そして何より目が奪われたのが彼女の紅色の目だ。宝石のルビーのような輝きを放っており太陽光の反射で紅く光っている。穂乃果の空色の目とは正反対の色をしているなるとなんとなしに考えていた。

東條 「こちらは希咲魁翔くん。えーと趣味は女の子の覗き見?」

魁翔 「普通の紹介かと思つたら俺への風評被害がスゴイ!!」

東條 「まあこのようにノリがいい一年生の後輩やね」

にこつち? 「ふーん新しく入ってきた新入生ねー」

あまり興味なさそうににこつちという少女は答える。

魁翔 「で、あなたはもしかして俺とは別のクラスかな? 一緒のクラスにはいなかった気がするし」

そういうとそのにこっちは口元をピクつかせた。明らかに怒っていらつしやる様子だ。俺が何かやってしまったようだが、何が気に入らなかつたのかは分からない。

隣にいる希先輩は笑いを零しながら俺に答えてくれた。

東條「にこっちはウチと同級生やから、魁翔くんの先輩やで」

魁翔「え？まじっすか??こんなになににこっこのに??」

そこまで言う和我慢の限界だったのかにこっちは先輩?が大きく口を開いた。

にこっち?「誰がちっこいよ!!人が一番気にしてる事をはつきり言っちゃって!!私は先輩よ!!敬いなさい!!」

魁翔「まあまあにこっちは先輩落ち着いて、ドウドウドウ」

にこっち?「人を馬扱いするな!!てかにこっちって呼ぶな!!」

魁翔「えくくだつて名前知らないですもん」

東條「じゃあにこっちはさっきのを見せてあげたらええんとちゃう?」

さっきの?つと意味が分からず俺は首を傾げているが二人の間では分かる事らしいので話は進む。

にこっち?「全くしやうがないわねー、ちゃんと目ん玉かっぴらいて見ておきなさい

!

魁翔「いや、目ん玉かっぴらいたら死ぬんすけど。まぶたを開かせてくださいよ」

俺が知らないと言ったらにこっち先輩は目を見開いて顔を迫ってきた。

矢澤「あんたスクールアイドルも知らないの!!そんなんでよく生きていけるわね!!」

魁翔「いや逆に何で知らないと生きていけないんですか?てか顔近いです」

矢澤「そんなんじゃないや人生の10割を損してるようなもんよ!」

魁翔「10割って俺の人生を全否定じゃないっすか、てかアイドルなら俺も大好きっすよ?」

東條「え?そうなん?」

魁翔「ケータイの中でプロデューサーとなつてアイドル達を育ててますから!」

俺がドヤ顔でケータイを見せると、にこっち先輩はプルプルと震えながら下を向いていて、顔をおもっいきりあげたと思うと、

矢澤「あんたのゲームなんかと一緒にするな—————!!!」

つと叫んだ。

後から聞いた話だがこの声は学校中に聞こえており、教室の窓が相当震えたやらしい現象が起きたらしい。

—————

魁翔「高校生の間だけなれるアイドルで部活動などで行なっていて、インターネットなどで日々ランキングを競い合ってるねー」

今は壁に腰掛けて三人で座っている。にこつち先輩を真ん中に俺が左、希先輩は右という位置で腰掛けている。真ん中のにこつち先輩が携帯で動画を開いてアイドルの子達が踊っている姿を見せてくれている。ちなみに俺はパンをかぶりつきながら見ているので、正直半分ぐらいしか内容は入ってきていない。

東條「へえーこの子達、歌も踊りも上手やねー」

矢澤「当たり前じゃない！この三人はA——RISEって言ってスクールアイドル界のトップよ!!」

なぜか自分のことのように胸を張るにこつち先輩を見て、ついつい希先輩の大きな双丘と見比べてしまう。

矢澤「なにかしら、なんか無性にアンタのこと殴りたくなってきたわ」

魁翔「完璧なる理不尽な暴力ですね。その場合もう二人が引くぐらい泣いて先生に言いつけますからね」

慌てて返事を返せたものの内心冷や汗をかいていた。なんだ最近の女子高生は心を読むのが流行っているのか、希先輩といいこの人と言いつきに考えを読まれてしまう。

東條「別に流行ってはないと思うでー」

魁翔「だからそういうところ!!」

また読まれてしまったようだ。くそーこうなったら希先輩に教えてもらおうしかないのか？あ、でも人の心が読めるようになって、もしことりとかが心の中で俺のことキモいとか思ってたら自殺しちゃうかも。：：ほっとけば勝手に死ぬんだったな俺。

魁翔「まあ、つまりさっきのにこっち先輩のはスクールアイドル活動の一環ってことですか？」

矢澤「にこーよ！スクールアイドルといえばキャラが大事なよ、見に来てくれた会場みんな最高に笑顔を届けるのが私たちスクールアイドルの誇りよ！」

東條「でもさっき私も魁翔くんもにこっちのあれを見た時死んだ目をしてたよ？」

矢澤「それはアンタ達がおかしいのよ！」

ええー俺たちのせいなのあれ、確実にスベってただけじゃんと思いつながら怖いので口にはしなかった。

魁翔「それにしても二人で練習してるなんて希先輩もスクールアイドルなんですか？」

俺はこの二人を見てから気になっていたことを聞いてみた。

東條「あーちゃうで、にこっちが凄いいこと思いついたから見て欲しいってここに呼び

出されたんよ」

魁翔「そういうことつすか、まあ確かに凄かったですね……いろんな意味で……」

矢澤「ちよつとどういう意味よそれ!!」

魁翔「別に深い意味はないつすよーマリアナ海溝ぐらいしか」

矢澤「どんだけ深い意味があんのよ!!いいわアンタにスクールアイドルが何たるものか教えてあげるわ、放課後アイドル研究部にきなさい!!」

魁翔「あー今日はアレがアレで大変なんで無理つすね」

矢澤「そうじゃあ授業終わったら迎えに行くから待つてなさいよ」

なんだと、俺の人間関係における誘いの断り文句を見破るだど!?

東條「頑張つてきてなー」

魁翔「希先輩はきてくれないんすか?」

東條「ウチこれでも生徒会の一員やけん結構忙しいんよ?」

へえー希先輩生徒会に入つてたんだ。巫女のバイトしてたりとか本当に不思議な人だ。

魁翔「はあー、分かりましたよ授業終わつたら逆立ちしながら気長に待つてますよ」

矢澤「なんで普通に待とうとしないのよ!」

はあーとにこつち先輩ため息をつきながら呆れていた。

矢澤「だーかーらー!!にこにー!!」
だから勝手に思考を読まないで下さいよ……

—————

園田「それじゃあ私は部活に行きますので三人とも気をつけて帰って下さいね」

魁翔「ああ気をつけて道行く人に抱きつきながら帰るわ」

園田「気をつける意味がわかりませんよ……」

魁翔「確かにそれもそうだな」

海未は俺の言葉に呆れてこめかみに手を添えながら部活へと向かっていった。

南「じゃあわたし達は帰ろっか?」

魁翔「あーそれなんだけど 矢澤「希咲魁翔—————!!!」

魁翔「あ、にこっち先輩」

にこっち先輩は凄い形相をしながらズカズカと俺の目の前までやってきた。

矢澤「アンタ違うクラス教えたでしょー!!お陰で大声で叫びながら入ったらクラスに

そんな人はいないって言われて恥をかけたじゃない!!」

魁翔「あーそう言えばそうでしたね」

放課後呼びに来るからって事でクラス教えたけど、別のクラスの名前をなんとなしに教えたらまさか叫びながら飛び込むとは思わんわ。

矢澤「意味のわからない嫌がらせをするんじゃないわよ!!」

魁翔「にこつち先輩おこつてちゃ可愛い顔が台無しですよ、ほらにこにこにー」

矢澤「だからにこにーよ!!そして人のを軽々しく使うな!!もつとリスペクトの気持ちを込めなさい!」

そういうと頭を教科書でふりぬかれていた。

魁翔「痛いじゃないっすか!!バカになつたらどうするんすか!!」

矢澤「アンタは元々バカだから関係ないわよ!!」

スパーンと気持ちの良い音が俺の頭上でまたもや鳴り俺はノックアウトされた。へへ、床が冷たくて気持ちいな。

穂乃果「えっーと：：魁翔くんの知り合いかな?」

矢澤「そうよ、このバカをちよつと借りて行くわね」

そういうと俺は首根っこを掴まれて引きずられて行く。なんかこの前も似たような事あったな。つてかドアとかにぶつかつてて痛いんすけどね。

魁翔「穂乃果もことりもまたな〜」

南「う、うんまたね…」

穂乃果「バイバイ…」

二人とも状況に全くついていけない様子であった。

それから数分俺はにこつち先輩に引きずられているんだが、

魁翔「にこつち先輩まだ着かないんすか？いい加減お尻とかがすれてて痛いんすけど」

矢澤「じゃあ自分で立って歩きなさいよ!!」

魁翔「ええー、引きずり出したのににこつち先輩じゃないですか〜」

そういうとにこつち先輩は手を離したので俺は立ち上がる。

矢澤「それにもう着いたわよ」

ドア窓の左下にちっさいシールが貼られておりそこにアイドル研究部と書いてある。扉を開けて中に入ると、棚などに所狭しとグッズなどがあり、だけど綺麗に整頓されている部室だった。

魁翔「ここがアイドル研究部ですか。思ったよりは普通っぽいですね」

矢澤「どんなのを想像したのよ…」

魁翔「うーん？グッズが散乱したゴミ屋敷みたいな感じですね」

矢澤「そんなことするわけないでしょ、貴重なグッズたちを!!」

まあ確かに言われてみればそうだな。俺もアニメのグッズとかは比較的綺麗に保存してるし。

魁翔「まあまあ、落ち着いてお茶でも飲みましょうよ。ほらにこっち先輩お茶でも入れて下さいよ」

矢澤「ほんとうに腹立つわねー」

魁翔「もうだからにこにこにーですよ!」

矢澤「だからアンタはもつとリスペクトして使いなさいよ!!
はぁーとりあえずお茶入れるわね」

何だかんだしてくれるあたり根はやさしくていい人なのだろう。まあ面白くてついついからかつちやうんだけどな。

魁翔「それにしても凄いや量ですね、全部自腹なんすか?」

矢澤「自分で買ったものもあるけど、部費から買ってるやつも結構あるわね。はいこれ」
そう言い入れたてのお茶を出してくれた。ってか今気になることを言った気が……
部費!?

魁翔「つていうことは部活を作れば部費で好きなもの買えるつてことですか!?!」

矢澤「そうだけど部を作るには五人必要よ」

魁翔「なーんだじゃあめんどいいいですね。ってか今はこっち先輩しか居ないっすけどほかに四人部員がいるんすか？」

そう言うときにこっち先輩は気まずそうに目をそらした。何か事情があるのだろうか？

矢澤「今は私だけしか居ないわ。創立時は五人必要だけどそれからは何人でもいいのよ」

魁翔「へえーそうなんすか」

何か訳ありなのだろうけど本人が気にしてるみたいだし聞かない方がいいだろう。俺が聞いたところで何かできるわけじゃないし、その内この先輩を救ってくれる人が現れるだろうと無責任なことを俺は考える。

魁翔「で、スクールアイドルについて教えるって言ってたけどどうするんすか？」

矢澤「そうね：：まずはこれを見てもらおうかしらね」
そう言って取り出したのはでかい箱だ。

魁翔「なんすかこれ？はこ?？」

矢澤「これは伝説のアイドル伝説DVD全巻ボックスよ!!通称 伝伝伝よ!!」

魁翔「でんでんでんでんでだけ伝説にしたいんすか」

矢澤「取り敢えずはこれを見てスクールアイドルたるものが何なのかの基礎を学びな

さい、詳しくはそれからよ！」

魁翔「へいへいそれじゃあ見ますかね」

そんなに乗り気じゃないが、まあ暇つぶし程度にはなるかなと思いい取り敢えず言われたとうり見ることにした。

そして現在……

魁翔「はあ：はあ：はあ：、死にそう……」

矢澤「やるわねえ：ぜえ：私についてくるとは：ぜえ……」

俺たち二人は部室で死にかけていた。しかも俺は結構リアルにだ。

なぜこんな事になったかという、理由は至って簡単。ライブの映像を見ていたら二人ともヒートアップしてしまいサイリウムを借りて力の限り腕を振り声を出していた。つてかマジで死にそうなんですけど、心臓バクバクなんすけど。

取り敢えず薬でも飲んでおくか。そう思いバクから錠剤の薬を取り出して飲んだ。

矢澤「アンタ何飲んでんの？」

魁翔「あー、ちよつと風邪気味なんで薬を飲んでんすよ」

本当のことは言えないので、適当にごまかしておこうと思いいテキトーな嘘をついた。

矢澤「ちよつと何で先に言わないのよ！道理で苦しそうな顔しているわけね。ほら！送って行ってあげるから帰るわよ!!」

魁翔「大丈夫つすよちよつと休めば」

矢澤「ダメよ、病人は大人しく帰って寝るのよ。ハアー全く先に言ってくれば無理に今日見せなかつたのに」

魁翔「にこつち先輩つて案外優しいですよね」

そう言うのにこつち先輩は顔を赤くしてその顔を隠すかのようにそつぽを向いてしまった。

矢澤「別にそんなんじゃないわよ！ただ私のせいでアンタの体調が悪くなると後味が悪いだけよ!!」

やっぱり優しい先輩だ。そんな先輩を俺がニヤニヤと見ているとさらに機嫌が悪くなったのか、

矢澤「ニヤニヤしてるとぶつ飛ばすわよ!!もう早く帰る!!」

そう言いバツクを持ち扉へと向かって歩みを進めていく。

了解ですと俺も言いこつち先輩の後を追う。校門を出たところらへんでにこつち先輩が俺の方へと顔を向け、

矢澤「今日の感想は？」

あーそう言えばまだ言っていないなーと思い率直に感じたことを言ってみる。

魁翔「そうつすね思ったより普通でしたね」

矢澤「普通？」

俺の言葉が気に入らなかったのか不満げな声でにこつち先輩が言う。

魁翔「そうですね何て言うかそんな俺たちと変わらないような普通の子たちが一生懸命頑張っているなーって。でもみんな輝いていて見ているこつちまで笑顔にさせてくれるような感じでしたね。最初のにこつち先輩が言っていた笑顔を届けるの意味はわかった気がしますね」

矢澤「そう！それは良かったわ」

さっきの顔とは打って変わって満足げな顔となったにこつち先輩を見て俺は笑みがこぼれた。

矢澤「何よ??」

魁翔「いや、にこつち先輩もスクールアイドルなんですよね？」

矢澤「そうよ、なんか文句でもあんの？」

魁翔「ちよつとだけにこにこに見せてくださいよ」

矢澤「なんでこんなところでやんなきゃいけないのよ!？」

魁翔「ええーいいじゃないですか、スクールアイドルならいつ如何なる時でも笑

顔にしない」と

矢澤「そうだけど：：はあ一回だけよ？」

そう言うともた後ろを向きあれの準備をしてる。

矢澤「につこにつこに〜にこ〜にこ〜って呼んでにこ！♡」

にこつち先輩の一発ギャグ??を見て俺はついつい笑ってしまう。

矢澤「なんなのよ！アンタがしろって言ったくせに!!」

魁翔「別に悪い意味で笑ったんじゃないですって」

矢澤「じゃあ何なのよ!？」

魁翔「いや、にこつち先輩はスクールアイドルに向いてるんだろーなって思いましてね」

矢澤「あ、当たり前じゃない!!にこにーは宇宙ナンバーワンアイドルになるんだから」
急に褒められて照れたのかにこつち先輩は腕を組んでそっぽを向いてしまった。宇宙ナンバーワンアイドルとか意味不明な言葉は聞こえはしたがそれでも俺のさっきの言葉は本音だ。この人のギャグはさておき、笑顔に関しては見ている人を自然と笑顔にしてみようような不思議な魅力があった。なので俺はこの人は素直にスクールアイドルに向いているんだろうと思う。

魁翔「そうっすか、じゃあ俺は今日から宇宙ナンバーワンアイドルのファンですね」

矢澤 「そ、そう！じゃあ特別にファン第一号の称号をあげるわ！」

魁翔 「宇宙ナンバーワンアイドルなのに今までファンいなかったんすね……」

矢澤 「そんな同情に満ちた目で私を見るな!!」

魁翔 「はは！宇宙ナンバーワンアイドルのにこにーさんこれからも頑張っていてくださいね、ファンとして心の中からは密かに応援してますから」

矢澤 「普通に言葉とかにして応援しなさいよ!!」

魁翔 「ええー嫌つすよ、こんなちっこい人のファンなんてバレたら恥ずかしいじゃないっすか」

矢澤 「ぬわあんでよ!!アンタそれでもこにーのファンか!!」

もう時間も遅くなってきて空は夕焼けに包まれる中、ギヤーギヤーと叫ぶ二人組がいた。一人の男はギヤーギヤー言う女を宥めつついじり、女はそんな男に文句を言うように叫んでいた。夕焼けの空の下に二人の伸びた影は、二人が動いたびに一緒に動いているがその影の間隔は少しあり、二人の今の距離感を示しているかのようであった。

7話 ｝ golden week ｝

今日から遂にゴールデンウィークだー!!

にこつち先輩と出会ってからは、海未に殴られたり先生に叩かれたりにこつち先輩をいじつたり海未にしぼかれたりなど特にこれといった事はなかったなく日々が過ぎて行きもう5月だ。：：なんか殴られたりとかばっかだけど気のせいかな？

って事で現在絶賛睡眠中です。朝までゲームやアニメなどといった徹夜コースだった俺にとっては、現在8時は就寝時間なのだ。

って事でおやすみなさい!!

ピンポーン、ピンポーン

うるせーなこんな遅い時間に(俺にとって)、俺の睡眠を妨げるのはどこのN○Kや宗教団体か!?

穂乃果「魁翔くくくんいるくく?」

魁翔「(お前かよ?!?)」

こんな遅い時間に(何度も言うが俺にとって)何のようなんだよ。まあこういう時は

居留守に決まってるな。ごめんな穂乃果、そしておやすみ穂乃果。

南「お出かけでもしちやてるのかな?？」

園田「大丈夫ですことり、魁翔が休日にかから出るわけないでしょう」

いや普通に出るわ!! つか海未とことりも来てるのかよ。居留守バレたら怖いしますます出れねーじゃねーかよ!

ピンポーン、ピンポーン

穂乃果「やっぱりいなのかなー? 携帯に連絡しても返事ないね」

南「うーん、魁翔くんも誘いたいのにな」

ごめんなことり! 今の俺はHPがゼロなので遊びに行けないのです!

てか連絡してんのか? あッ、通知きてるわ、なになに一緒に遊ぼうか。このままじゃここから離れてくれないし返事でもしとくか。

園田「二人ともいつまでもいたら迷惑ですしそろそろ行きましょう」

穂乃果「うーん: そうだね: :、あ! 返事きた!! えくと、今は帰省中でごめんなだつて。あー: : 魁翔くんいないのかー: : : :」

うおー! そんな悲しそうな声を出さないでくれ!! 今度パンをあげようと俺は心に決めたぜ! つか俺もそろそろ意識が限界だな: : :

そこで俺の意識はプツリと消えて深い眠りについた。

魁翔「うーんよく寝たわ、もう12時か」

寝た時間じたいはそんなに長くなかったけど頭はスッキリしたからいい感じだな。

魁翔「あゝ腹減った」

流石に腹が空いたので冷蔵庫の中を見てみると、中身はすっからかんで飲み物しかない。本当こういう時に自分の性格に呆れるしかないわ。

魁翔「カツプ麺もないしどうすっかな」

頭の裏をガシガシとかきながらふと呟いたが当然誰も返事はしてくれない。

魁翔「あ！そういうえばあのラノベの発売日今日だったな。家にも暇だしラノベ買うついでに飯でも食いに行くか」

そうと決めたら行動は早いもので1分たらずで支度をして俺は家を出た。

魁翔「でもなんか忘れてる気がなー」

さつきから頭の中で何か忘れてる気が、ていいうかなにか危険信号みたいなのを感じているのだが思い出せないのととりあえず無視して家を出発することとした。

—————

さあやって参りました！みんなに大人気の某ショッピングモールです！やつぱりこういう広くてオシヤなところは来ると緊張すんだよなー、俺にとつては色々キラキラ輝きすぎてるんだよなあ……あーリア充どもばっかりいやがる、全員滅びてしまえばいいのにな……。夢も希望も彼女もいなくて胸が痛むぜ！！

まあ冗談はこのくらいにしといてまずは書店にでも行きますかね。

魁翔「えつと確かこつちの方だっけな」

そう一人で呟くと俺は目的地に向けて歩き出した。この書店は品揃えがいいのでたまに俺は足を運んでいるのだ。そうこう考えてる内に目的の書店が見えてきた。まあ入り口から結構近いんでそんなにかからないんだけどな。

魁翔「ラーノベ〜ラーノベ〜って、んん？」

ひとりでに訳の分からない歌を口ずさみながら店内を歩いていると一つのコーナーが目止まった。そこには「スクールアイドル大特集」と大きな文字で書かれていた。

魁翔「へえーやつぱり人気あんだねー、こりやにこっち先輩もハマる訳だな」

魁翔「面白そうだし買ってみるのもありかね」

俺はそのコーナーの前で本を手取るわけでもなく立ち尽くして買うか買わないか悩んでいた。しばらく悩んでいるとふと隣から視線を感じたのでその方向を向いてみると、

? 「ヒア!!」

眼鏡のかけた子が俺の方を見ていたのだが、俺が急に振り向いて目があったことで驚かせてしまったようだ。恐らくこのコーナーに用があつたけど俺が邪魔だったのだらう。

魁翔「あーごめんな、すぐ退くから」

? 「す、すみません」

今にも消え入りそうな細かい声だったが何とか聞き取れた。これ以上怖がらせてもいけないしさつきと目当てのどこに行きますかね。

? 「かよちーん欲しかった本あつたにや??」

? 「うん、あつたよ!」

さっきの子の友達が来たのか俺の後ろで二人が仲よさそうに話していた。それにしてもさっきの制服はこの辺の女子中学校の制服だっけな？

よく外で見かける気がするしな。……なんか女子中学校の制服わかるって少しヤバい気がするな……俺はストーカーじゃないぞ!!

一人でなに考えてんだ俺は……

それにしてもさっきのもう一人の子の語尾が非常に気になるな、にや!だぞ!!

もう一回言うけど、にや!!だぞ!!萌えるわー!!

……ハイさーせん自重します。

—————

って事で無事本は買ったので飯にしようかと今はモール内を探索中である。まあ探索中っていうかただ迷ってしまっただけなんだけどな。

だって普段こんなところ来ないんだもん!!しようがないもん!!

ってか本当に何処だよここ、フードコーナー何処にあんだよもう……

魁翔「もうシンドイし帰りたくなってきた：もうコンビニの弁当でええや：：：」

もう心が折れてしまい俺は回れ右をして帰ろーとしたのだが、これほどに俺は自分の運の悪さを呪った瞬間は今後来ないだろう。

振り返った先には橙・灰・青の見慣れた色の髪をした三人の姿が目に入った。

魁翔「やばっ!!」

咄嗟に振り返り俺は今世紀最大のピンチに身を震えさせていた。

魁翔「(どうする!?!振り返ったのは一瞬だったし向こうは気づいてない可能性も大きくある。だがここで俺が逃げ出して、もし向こうが俺に気づいていたら後から俺が確実に殺されてしまう：：海末に!!どうする!素直に謝りに行くかそれともバレてないことを信じて逃げるか。否!!俺は自分を信じる!!自分の出した答えを信じて突き進むだけだ!!つまりにげる!!)」

俺は向こうが気づいてないのを信じて逃げることを選択した。そろーりそろーりと一歩一歩慎重に歩みを進める。

魁翔「(あそここの角を曲がれば後は出口に向かってダッシュするだけだ!心臓への負担は大きいがやるしかない!!)」

よし後少しだ!10メートル：：5メートル：：あと1メートル：：!!

【ガシツ!!】

あと少しというところで俺は何者かによつて肩を掴まれ前へと進めなくなつてしまつた。まあ誰かは分かつているのだが……

園田「魁翔ですな……?」

これはマズイ!!なにがマズイつて?それは何かマズイんだ!!つてか今こいつ何処から声出したんだよ!?!決して女子高生が出しちやいけなような声出してたんだが!!しかも下向いてて髪で顔隠れてて非常に怖いんですけど!!後ろのこつりと穂乃果も海未の様子に怯えてる様子だしこれはやばい!

さあここで人生の分かれ道だ。この選択肢によつて俺は死ぬか生きるかが決まるだろう。海未の状態を見るからに下手な答えをすると確実にヤラれる!

魁翔「(考えるんだ俺、この状況から脱するための最適解は何なのか!?)」

そして俺は一つの結論に至つた。これは成功すれば逃げられるだろうが、失敗したら間違いなく俺は跡形もなく粉々にされるだろう。それでも俺は絶対に諦めない!!粉々だったら後残つてんなこれ……

てかなんか主人公ぽいな笑

まあ冗談は置いて今はこれに賭けるしかない!さあいくぞ!!

俺は普段持ち歩いてる伊達眼鏡と帽子を被り、

魁翔「ホワツツ？アイノットスピーキングジャパニーズ??」

そう言いそろーりと視線を上にあげ海未の方を向くと、そこには満面の笑みの海未がいて、

園田「言い残したことはそれだけですか??」

魁翔「誠に申し訳ありませんでしたー!!」

俺は体を直角にまで曲げて頭を下ろした。一瞬土下座をすることも考えたがこんなシヨツピングモールでする度胸はチキンハートの俺にはなかった。

—————

園田「で、そのまま寝たということですか。はあー……」

海未はコメカミに手を当てながらため息をついた。俺と話をしている時によくするポーズだと思う。つまり俺がいつもため息をつかせているということだから、なんか申し訳ない。って言っても態度を改めようとは思わないんだけぞな!!

って事で現在は四人ともお昼ご飯がまだという事で近くの喫茶店に連行されて尋問

をされていたわけです。

魁翔「ハイソウイウワケデスマコトニモウシワケアリマセンデシタ」

そう言いました頭を下げて、今回は机に頭をつける形で頭を下けている。

穂乃果「でもよかつたよー、最初見つけた時は私達と遊びたくないから嘘ついていたのかと思つちやつたよー！」

南「うん、私も嫌われちやつたのかと思つちやつたよー！」

魁翔「うぐう！そんな風に思わせてしまったなんてごめんなことり!!このお詫びはいつの日かするからな!!」

穂乃果「あれ!?私には!？」

魁翔「あーはいはいごめんな」

穂乃果「なんか軽い!!ううー海未ちやくくん」

だつてことりだぞ?ことりを悲しませるなんて男としたら絶対にしちやいけない事なんだからな!それにしても穂乃果が海未に慰めてもらつてるけど、こうしてみるとこの二人つて姉妹に見えるな。

園田「大丈夫ですよ穂乃果、ここは魁翔の奢りで食べ放題ですから」

穂乃果「え!そうなの!?!じゃあこれに、あれに、うーんこれも頼んじやお!!」

魁翔「いやいやなんでそんな事になつてんすか??そして穂乃果もただけ頼むんだ

よ

園田「え？違うのですか？」

いやそんな笑顔で無言の圧をかけないで貰えますか。怖くて反抗できないじゃないですか。俺と海未のそんな攻防を見ていたことがおずおずと手を挙げ、

南「えっーと私は自分で払うから大丈夫だよ？」

魁翔「(天使かよ!!なにこの子可愛いし良い子だし家で飼ってもいいですか!?)はい嘘です、すみません)」

それにしてもやはり何かしらの形で三人には示した方が良いでしょう。そういう意味ではご飯を奢るぐらい安いもんだろう。

魁翔「分かったよ三人とも好きなものを食べ!!」

穂乃果「やったー!!じゃああとこのパフェくださーい!!」

魁翔「お前は少しは遠慮せんかーい!!」

南「本当にいいの？魁翔くん独り暮らしなんだよね？」

園田「あっ！」

なるほどことりはその事に気を使ってたのか。たしかに独り暮らしで親の仕送りだけで生活してたら経済的にはしんどいように見えるのだろう。海未も今その事に気付いたのか申し訳なさそうにこちらを見ている。はあーこの子らはもうちよい人にワガ

ママを言ってもいいとおもうんだけどねー。

魁翔「いいよいいよ俺が悪かったのが事実だしね、それにほら！穂乃果なんてもう食べてるし二人も遠慮なんてしなくていいよ」

そう言う二人ともしぶしぶと言った感じだったが納得はしてくれたようで注文を始めた。

そしてようやくみんなが食べ終わったところで、

穂乃果「これからどうする??」

魁翔「俺は特に用事ないし三人について行くよ」

ことり「じゃあ私、服見たいんだけどいいかな??」

園田「私もそれで構いませんよ」

穂乃果「じゃあ早速いこー!!」

言うが早く穂乃果は店の中から出て行き店に向かおうとしている。

魁翔「ほら二人とも穂乃果を追いかけていいよ、俺が払っておくから」

俺が言う二人はしっかりとお礼を言い穂乃果を追いかけていった。

店員「10856円となります」

高!! どんだけ食ったんねん!! いやでもことりと海未は普通の量しかたしか食ってなかったな。 つてことは犯人は穂乃果か：：つか一人であいつはどんだけ食ったんや!!

「はあー明日からはご飯の量が寂しくなるなあ……」

俺は支払われる福沢さんを見ながら、今後の事を考えつついついたため息をついてしまった。

店内から出ると三人とも店には向かわず俺を待ってたらしく、入口の前に立っていた。

穂乃果「魁翔くんご馳走さま！美味しかったよ!!」

魁翔「はいお粗末様でした」

満面の笑みでお礼を言ってくれる穂乃果を見ると、この笑顔を見れたので払ったのも良かったかもしれないと俺は思ってしまったている。

穂乃果「あ！でも穂乃果食べ過ぎちゃったよね??大丈夫??」

お前もかよ！と漏れそうになったがなんとか堪えて口には出さなかった。本当に三人とも人に気持ちを考える子だな。

魁翔「はいはいもう三人とも心配しすぎだつて、大人しくこう言う時は、俺の顔を立てるためにも男子に奢られとけつて、ほら服屋見に行くんだろ行くぞ」

そう俺は言い右手にことり、左手に海未の手を掴んで歩き出した。

二人とも驚いた様子だったが恐らく俺の伝えたい事伝わったのかちゃんと付いてき

てくれている。

穂乃果「ちよつと三人とも待つてよ〜」

穂乃果も最初はぼーとしていたが俺たちが遠ざかって行くのを見て、意識が戻ったのか急いで追いかけてきた。

—————

魁翔「で、ことりさん何で俺がきせかえられてるんでしょう?」

俺はてつきり三人の買い物について行くだけだと思っていたのだがことりが最初に入った店は男性の服屋だった。そして現在に至り俺は着せ替え人形のごとくことりの持つてくるものを着ていた。

南「うーんさつきの男らしさの出る服装も良かったけど、こつちの中世的な服も似合うね!!」

魁翔「え、無視ですか?」

ことりに無視された事によって俺のライフは著しく減少したので他の二人に助けを求めようと探したが姿が見えない。

魁翔「あれ？穂乃果と海未は?？」

南「二人なら向こうだよ」

ことりの指差した方向をみると二人は向かい側の店でアンティークなどを見ていた。まあつまり助ける気はないらしい。

南「じゃあ魁翔くん!!次これ着てきて!!」

またもや服が俺の目の前に出されて着るように促される。そしてそれに着替えてまたことりの前へと姿をあらわす。この作業を一体何回繰り返し返せばゴールになるのだろうか。

南「うーんさっきのよりこっちの方が似合ってるね!」

魁翔「はははっお褒めに預かり光栄です……」

南「魁翔くんは体格もちょうど良くてカッコいいから色んなものが似合うね!!」

魁翔「そんな事お世辞でも始めて言われたよ、ありがとう」

南「お世辞じゃないんだけどな……」

そうことりは不服そうに言っているのだが、俺は自分がそこまでカッコいいのかどうかは分からない。事実誰かから好意を寄せられたりの経験などが無いからわからないんだよな。

穂乃果「あ!魁翔くんその格好カッコいいね!!流石ことりちゃん!」

園田「そうですね、いいんではないでしょうか」

二人ともいつのまにか戻ってきていたのか気づけば後ろにいて声をかけてくれた。

南「だよね!!これは自信作なんだよねー」

そうウツトリした表情で言うことりを見て俺は苦笑いしかできなかった。流石に疲れたのである。

魁翔「ほらそろそろ時間もいい頃だしここから出ようか」

さりげなく提案をしてこの城田から脱しようと試みるが、

南「えくまだいっばい試したいのあるよ?」

え!まだあんの??おれの気持ちを海未が察してくれたのか援護をしてくれる。

園田「ことり今日はこのくらいにして今度でもいいんじゃないですか?それにこの後はあれをするつもりですし」

南「うーん、そうだね!また来ようね魁翔くん!!」

また次があるんですか: : おれは苦笑いで返事をした。それにしても、

魁翔「あれをするって何のことだ??」

園田「穂乃果は長期休暇の課題を溜め込む癖があるので、早い段階でやらせようと思
います」

穂乃果「別に大丈夫って言ってるのにねー」

園田「あなたはそう言つて毎回最終日に泣きついてくるじゃないですか!!」

南「アハハハ……」

ああなるほどね、確かに穂乃果は夏休みの宿題を最後まで溜め込んでおくタイプだわな。

それにしても勉強会か……

魁翔「まあじゃあ俺はここまでだな、おつかれ」

そう言いクールに去ろうとするとまたもや肩を掴まれてしまう。

魁翔「……なんだよ??」

園田「そういうえば魁翔、課題忘れること多いですよね??」

魁翔「えつと……気のせいじゃないか??」

園田「一週間に一回は忘れてませんか??」

魁翔「まあ……たまたまだな」

園田「これからは予定もなく暇ですよね??」

魁翔「いや何でお前が俺の予定を決めてんだよ。今日はあれだ……あれがこれであれだからちよつと無理だな」

園田「なるほどじゃあ魁翔も参加で決定ですね」

そう言ううと海未は俺の襟を掴み引きずり進んで行く。

魁翔「嫌ダーーーー!! 勉強したくないーーーー!!」

穂乃果「お勉強できない同士頑張ろうね!! ファイトだよ!!」

魁翔「一緒にするなーーーー!! 俺はやらないだけだ!!! つてか海未さん痛い!! 色んなところに体ぶつかってんすけど!!」

何を言っても聞く耳を持たないのか海未は無言で俺を引つ張っていく。俺の休日は突然の三人の訪問で大きく狂わされて、最終的には勉強をする羽目となっている。いつもなら家でゲームやアニメをしてるだけだったのに、こんなに騒がしくなるとはな。まあ、でもこういう休日も悪くはないかなと思ってしまうていた。

魁翔「この海未の鬼ーーーー!!」

園田「魁翔うるさいです」

魁翔「あ、はいサーセン」

NOZOMI HAPPY BIRTHDAY

一週間後に元μ、sのメンバーである希の誕生日が迫ってきている。一年の頃はまだそこまで親しい間柄ではなかったので知らなくて祝わず、2年の頃はにこと絵里との4人で祝った。

そして今年には希も大学生という事で俺たちとの予定の都合とかも懸念されたが、元μ、sのメンバーみんなで集まり祝う予定となり盛大にパーと盛り上げる計画である。そんな中、何故この話をしているかというところ、

魁翔「プレゼントが思いつかねー」

そう、コレなのである。去年こそそこまで深く考えずにアクセサリをあげたのだが、今年はそのもいかないだろう。それなりに、というかかなり彼女の人となりを分かっているでそれなりの物を選ばないといけない。

しかもメンバーも沢山いるので下手したらカブる可能性もあるが、だからと言って奇

をてらいすぎて気に入って貰えなかったら本末転倒である。

魁翔「さてと、本当にどうしたものかね。いつそ誰かに相談してみるのもありかな？」

「そう思い俺は携帯を開く。SNSのアプリを開くと履歴には、sメンバーだったみんなとの履歴ばかり残っていて、それが可笑しくてついつい笑ってしまう。しかし俺はカプリをふって携帯を閉じた。

魁翔「やつぱりこういうのは自分で選ばないと意味ないよな。よし!!とりあえずなんか見に行くか!!」

「取り敢えず俺は出かけることにした。まあこういうのは考えてるだけじゃなく分からないからな! 早速レッツゴー!!!」

って事で近くのショッピングモールにやってきました。

魁翔「さてとまずはどこから向かおうかね？」

どこに向かおうかと頭の中でモールの構造を思い浮かべながら考える。こんな広くて騒がしいところは俺の好みではないのが、なんだかんだけ、sのみんなに連れ回されていたからモールの構造も自然と覚えてしまっている。

魁翔「まあ無難に最初は小物でも見て行くか」

最初はブティックのようなどが密集しているエリアへと行くことにした。

魁翔「それにしても不思議だよなー、こんなに誰かの事を考えることがあるなんて。昔の俺が見たら笑うだろうな」

そう言いながら笑ってしまう。別に昔は暗かった訳ではないけど特別、誰かと仲が良

かった訳でもないからこんな気持ちになるのは何回体験しても慣れないもんだ。ていうか昔は人との間に壁を作ってしまっていたのだろう。

特に希に対してはいろいろあるからな……

そこまでかんがえてると、目的のエリアまで付いたようだ。

魁翔「さてとまずはどこから入ろうかな？つてなんか見覚えのある三人組がいる気がするんすけど？」

ちようどこのエリアの一番近くにあった店の中を見ると、見知った三人組がいた。

魁翔「ようー、まきりんばなの三人さん何してんの？」

俺が声をかけると三人とも急に声をかけられたことに驚いたのかビクツと肩を震わせている。

西木野「ちよつと!!いきなり後ろから声をかけないでよ!!それにその名前はやめてっ
てば!!」

魁翔「ええーいい名前なのになー、まあ真姫が嫌がるならしようがないし今度からは、
ぱなりんまきつて呼ぶわ」

小泉「順番変わってるだけだし意味ないような……」

お!気がついたか花陽!そんな君にはお兄さんがナデナデしてあげよう!!

………これってセクハラなのか??いや本人が嬉しいならいいのかな??

星空「それにしても驚いたにやー、どこの変態さんかと思ったにや」

魁翔「おい、流石にそれは俺でも傷つくぞ」

西木野「自業自得よ!」

小泉「あはは……、それにしても魁翔くんもここにいるなんて、もしかして希ちや
んのプレゼントですか?」

魁翔「お、よく分かったな正解だ」

西木野「まあそうでしょうね、あなたが休日の外に出るなんてよっぽどのことだし」
星空「そうだにや、魁翔くんは1人だと家に引きこもってニート生活してるだけにや」
魁翔「お二人さんは今日も俺に対しての攻撃が強すぎじゃありませんかね?？」

まったく失礼だなあこの後輩2人は！俺だつて休日に外ぐらい出るさ！この前だつて……みんなの練習の手伝いだとか……穂乃果に連れ回されたりとか……うん一人で外出したのいつか分かんねえ!!

小泉「真姫ちゃんも凜ちゃんもダメだつて〜」

魁翔「花陽お前だけが俺の癒しだ」

そう言いながら俺は花陽の手を取り固く握る。当の花陽は苦笑い気味で握手を返してくれた。

まあ冗談はこんぐらいにして、

魁翔「まあ目的はさつきのとおりだが、正直何選んでいいか全く分からないんだよな」
星空「たしかに魁翔くんはセンスなさそうだにや」

魁翔「はいはいそうですよ。だから参考までに三人は何を買うつもりなんだ??」

小泉「私はヘアアクセサリーとかを考えてるんですけど」

星空「凛は希ちゃんにオススメのカップ麺をいっぱいあげるにゃー」

西木野「私はダイヤモンドのネックレスとかあげようかしらね」

魁翔「うんぜんぜん参考になんねーわ、てか凛の至ってはただの凛の好きなもんじゃないか」

コイツらのセンスも中々だから全然参考になんねーな。花陽のは可愛らしくていいのに、つか真姫に至ってはいくら金を使う気なんだよ!!

西木野「うるさいわねー、じゃあアンタは何を買うつもりなのよ?」

魁翔「えーと……水晶??」

星空「全然センスがないにゃ……」

うるせー!!お前達には言われたくないわ!!

小泉「でもこういうのは希ちゃんのことを考えてあげることが大事ですから、思いが

こもっているかが重要じゃないのかな」

西木野「そ、そうよ!! 私はずちんと希のことを考えているんだからいいのよ!!」

星空「凜もしつかり考えてるにやー!!」

二人とも花陽の言葉に乗っかりすぎじゃねーか? まあ確かに花陽の言うことは一理あるな。俺が希のことを考えてか……

魁翔「そうだな、ありがとな花陽!! すこし考えがまとまった気がするわ、これも花陽のおかげだわ! 本当にありがとな花陽!!」

西木野「なんで私と凜にはお礼がないのよ!!」

星空「そうだにや!!」

え、そりやだつて……

魁翔「お前らの意見は参考ならんかったもん、まあていうことでまた今度な花陽」
クルリと方向転換をして歩き出すと、後ろからイミワカンナイとかにやーとか聞こえてくるが、気にしない気にしない〜

絢瀬 「あら？ 魁翔も買物なの奇遇ね」

魁翔 「さつきから本当に奇遇だらけっすね??」

矢澤 「あんた何言ってるの??」

本当に偶然は続くものだ。

あれから俺はしばらく歩いていて、アンティークなどを取り扱ってるこの店にビビッと感じるものがあつたから入ってみるとあら不思議、希を除いた上級生の二人がいた。これはあれだな、スピリチュアルってやつだな。

魁翔 「二人もやっぱり希のプレゼント選びか??」

絢瀬 「ええ、って言ってもまだ決まってるだけだね」

矢澤 「そうね、まあ希の事だし水晶でもあげとけばいいんじゃないの?」

魁翔「にこと同じかよ……」

矢澤「なんのことよ??」

俺はさつきまで一年生三人と一緒にいて、なおかつにこと同じ提案をして凜に馬鹿にされたことを話した。

矢澤「ぬわあんでよ!!別にいいじゃない水晶!!希なら似合うでしょ!」

絢瀬「いや、私も水晶はどうかと思うのだけれど……」

魁翔「全くだ!!にこはなにを言ってるんだか」

矢澤「あんたも一緒のこと言ってたんでしょーが!!」

え?そんなこと忘れましたよテヘペロ。

絢瀬「まあそれはいいとして、魁翔はもう決まったの??」

魁翔「うーん、やっぱり決まんないんだよな、花陽からは俺が選んで想いを込めたものなら大丈夫みたいなのは言われたんだけど」

俺は先程花陽から受けたアドバイスを話してみた。

矢澤「へえー花陽にしてはいい事言うじゃない、一年生達はなに買うかとか言つてたの？」

魁翔「……：……へアアクセにカップ麺にダイヤモンド……：……」

絢瀬「それはまた誰がどれを選んだのかすぐわかるチョイスね」

絵里は苦笑い気味でそう言うがにこはというと、

矢澤「凜も真姫も二人ともなに考えてんのよ!!」

魁翔「かく言うにこも水晶だけだな」

矢澤「うるさいわよ!! これからもっといいもの選ぶんだから!! さあはやく行つた行つた!!」

手でシツシツという風にして俺を追いやろうとしてくる。まあ別に一緒にいる理由もないしな。

魁翔「はいはい分かりましたよ、精々水晶よりかはマシなものにしてくださいよ」
矢澤「いいわ目にも見せてやるわ!!」

そういうと俺は二人に背を向けて歩き出した。そこで、

絢瀬「魁翔ー！少しだけアドバイスをあげるわ！花陽と少しカブる事だけど、あなたがしっかり考えて選んだものなら希は喜んでくれると思うわよ！」

魁翔「了解で〜〜〜す」

そう言い残し俺はその場を離れて行った。

俺が考えて選んだものか、なんでも喜んで貰えるっていうのはまあ希だからそうかもしれないが、やっぱり希が欲しいものをあげたいだな。つて言ってもなー希の好きなものってなんだろうーな？オカルトとか焼肉ぐらいしか思いつかねーわ。

今更ながら俺って希のこと全然分かってねえのかもしれないねえな。

魁翔「はあー、にこと絵里に聞けばよかったかなー」

深いため息をつきながら俺は取り敢えず足を進めていく。

――――

園田「あら？ 魁翔ではないですか、奇遇ですね」

魁翔「そうだな、もう驚かんぞ」

園田「なんのことですか?？」

場所は変わって現在服屋さんの前に来ていた。近くに通りかかると海未がボーと立っていたのだ。

魁翔「そんなとこで突っ立ってなにしてんだ？」

園田「希のプレゼントを買いに来たのですが、ことりが服を見たいと言いここにきてそれからは穂乃果が着せ替え人形にされてるってとこです……」

魁翔「ああ道理で姿が見えないはずだ……」

ことりは服のことになると少々テンションが上がってしまふ時があつて、ことりと一緒に服屋に行つてしまふとたちまち着せ替え人形にされちゃうのだ!!

魁翔「で、海未は逃げてきたわけか」

園田「まあ：そうですね……」

罪悪感があるのか海未は目線を逸らしながらそう答えた。

魁翔「ところで海未達はもうプレゼントは決まつてるのか」

園田「そうですねことりはお菓子と服を作るらしいんですが、そのの視察を兼ねて今穂乃果が……」

魁翔「海未も大変だな」

あの思い立ったら猪突猛進の穂乃果と、普段は大人しいのにこういう時はアグレッシブになることりの二人を抱えてる海未は本当に苦勞人だとしみじみ思うり

園田「ま、まあ！私と穂乃果はまだ特にはきまってませんね」

魁翔「そつかあー、俺もきまってないんだよね。何にしたもんかね」

園田「そうですね、何か候補はないのですか？」

候補ねー、つて言ってもさつき言つたとうり、

魁翔「希の好きなものなんて分かんねーだよな」

園田「そうですね、希はμsの中でも一番掴み所が難しいかもしれませんね」

魁翔「だよなあー、なにかいい案ねえかなー」

穂乃果「ん？どうしたの??」

俺たち二人が頭を抱えて悩んでいると、後ろからふと声をかけられた。

魁翔「うおをお！驚かせんなよ!! つかいつからいたんだよ!?!」

穂乃果「ごめんごめん、今さつきだよ。やっとことりちゃん満足してくれて」

南「穂乃果ちゃんすごく可愛かったよ!!」

魁翔「あ、ことりも来てたんだ」

穂乃果「で、海未ちゃんとなに話してたの？」

魁翔「ああ、希の誕生日プレゼントが思いつかなくてなにかないか相談してたんだよ」

穂乃果「そつかあー魁翔くんも悩んでるんだね」

魁翔「うーん、ことりみたいに俺も器用だったら何か作れたらいいのにな」

俺も器用だったら心のこもったものを手作りで作れたんだけどな、とありえもしないような事を考えてしまう。

それに服はことりにしか作れない最高のプレゼントなるだろう。

魁翔「うーん、俺だけが希にあげられるものかー」

穂乃果「うーん魁翔くんのできることかー」

園田「ゲームしかありませんね」

魁翔「いや合ってるけども、そこまではつきり言われると結構ショックなんですけど」

いや合ってるんだけども!!他人に言われるとなんか妙に傷つく事ってあるだろ!!

南「あ！魁翔くんってあれとってたよね？」

穂乃果「あ！そうだよそれがあつたよ！」

魁翔「え、どれのことだよ?！」

そこからしばらく同級生組と話して俺は一つの案を思いついた。希の好きで大切なものであり、俺にしか作れなくて俺の思いを込めるためのものが見つかったがこれは少々時間がかかりすぎるかもしれない。残り一週間で終わるかどうか。

魁翔「よし三人ともありがとう!!早速探して作業に取り掛かるよ!!」

俺は目当てのものを探して三人に背を向けて走り出した。え?店内は走つちやダメって?そんなこと知ったこっちゃない時間が惜しいんだよ。

後ろから頑張つてねーやファイトだよ!つという声が聞こえて元気が湧いて来た。

魁翔「よーし今日から忙しいぞー!!やるつたらやるぞーファイトだよ俺!!」

うん、俺が言うとなんかゾワゾワする感じだな。

とはいえ、やることは山積みだ。

まあでも取り敢えず今は、

魁翔「ちよつと調子乗つて走つて死にそーだ………」

ベンチに横たわつて体力を回復するでしょう。柄にもなくはしやいでしまつてたださえ少ない体力が全部持っていかれた。なので1時間ほど休憩します!!

……はい嘘です5分だけ休ませて!!

—————

穂乃果「それじゃあみんなコツプは持ったかなー? それじゃあ希ちやーん誕生
日ー」

みんな「おめでとーーー!!!」

みんなのコツプがぶつかり合つてカンッと高い音が部屋に響き渡る。今回は、という

より今回も場所は真姫の家を借りさせてもらっている。

まあこんだけの大所帯ともなると普通の家には入りきらないのだ。まあ真姫の両親は真姫のこと大好きだから、真姫の友達のためならと二つ返事でOKをくれたのだ。それからは毎年メンバーの誕生日はここでお祝いをしてるのだ。

東條「みんなありがとう！みんなに祝ってもらって嬉しいわー」

希は顔を赤くしながら、少し照れくさそうに言った。

穂乃果「よーしそれじゃあプレゼント渡しタイムにしまーす！じゃあはい私からのプレゼント!!」

穂乃果が渡し出したのをキツカケにみんなが希に詰め寄って行ってプレゼントを渡している。ことり、花陽、海未、絵里あたりは特に変なものは渡さないだろう。問題は
……

東條「えつと穂乃果ちゃんのこれは……パン??」

穂乃果「そうだよ!! 穂乃果の大好きなパンを希ちゃんにも食べてもらいたくて!!」

星空「じゃあ凜もー、はい!! 凜の大好きなカップ麺!!」

魁翔「二人ともそんなものあげても希が困るって」

東條「いやいや、そんなことあらへんで! 二人ともありがとなー」

そう言つてニツコリと微笑む希。

魁翔「まあ希が嬉しいのならなあ……」

西木野「じゃあ私からはこれね」

真姫はそういうと小さな箱を取り出して希に渡す。いやなんか高級感がすごいんですけどね。

東條「開けてみてええ??」

そう聞くと真姫はコクリと頷いたので希は箱を開けた。開けてみるとそこには青く光る宝石がついたネックレスがあった。

東條「綺麗やねー、これなんて宝石なの？」

西木野「ムーンストーンって言うのよ、6月の誕生石だし、それに希にピッタリだと思ってる」

そう真姫は言いながらも照れくさいのか、顔を赤くしながらそっぽを向いて髪をクルクルといじっている。

東條「ムーンストーンか……うん気に入ったわ！真姫ちゃんありがとう！大事にするわ」

希がいうと、真姫はフンつと言って後ろを向いてしまった。まったく素直じゃないなと思いつつながらみんな笑っていた。ってかあれいくらしたんだろーか？あとでこっそり真姫に聞いてみよう。

矢澤 「それじゃあ次は大銀河宇宙No.1アイドルのニコニーの

東條 「あ、そういうのいいからはやく渡してくれへん」

矢澤 「ちよつとー!!最後まで言わせなさいよ!!つてか私にだけ冷たくない!？」

希はイダズラが成功した子供のようになり、それに乗っかるように、にこが言葉を返す。

あー平和だなーと感じながら、こんな時間がいつまでも続けばいいのにと感じる。それにしてもにこは何を選んだのだろうか？店であった時は水晶という俺と同様のセンスのない物を選んでいたが。

矢澤 「はい私からのプレゼントよ！感謝しなさい!!」

そういうとにこは一つの箱を出した。つてかまた箱かよ、にこのことだからそんなに高価なものではないと思うけど。

希 「これは……リボンやね？」

矢澤「そうよ、私との色違いのリボンよ！私と同じリボンなんだから喜びなさい！」

希「そっかーにこつちとお揃いか……ありがとなにこつち」

希は嬉しそうに微笑んでにこにお礼を言った。希が素直に感謝を言ったことにこは照れたのか、

矢澤「そ、そう、どういたしまして……」

照れてしまつて後半の声はよく聞き取れないぐらい小さかったが、それでも希の心からの感謝に照れくさそうに反応を返した。

それから順調にプレゼント渡しは進んでいきとうとう最期の俺の番になつてしまつた。つてかなんで最後になつたんだよ。緊張しちゃうじゃねーか。

まあ最後の方が流れを切らなくて良いから都合はいいんだけど。

魁翔「じゃあ最後は俺からだな。つて事でちよつとセッティングするんで待つてく

れ」

この案を一緒に考えた同級生の三人と、あらかじめ許可を得るために真姫には話していたが、他のみんなは何をするのか知らないので首を傾げている。

魁翔「はいじゃあ電気消すからな」

パチツという音を境に部屋の明るさを失われ、今部屋の中は暗闇に支配されている。

魁翔「それじゃ始めるぞ」

俺はそう言いプロジェクターの操作を始めた。そして壁に映し出されたものは、

東條「こ、これは……μ sの頃の？」

魁翔「ああ、そうだよ」

そう今流れているのは、μ sだったころの映像や写真である。このムービーこそが俺の出した答えだった。

俺は元々パソコンを弄るのは得意なので編集自体は問題はないのだ。まあ時間がなさすぎるっていうの問題はあったのだが。

まあそれは置いて、希の大切で大好きなものを考えた時に、sのみんなという答えが出てきたのだ。俺はマネージャーだったので写真や動画などはたくさん撮っていたので材料にも困らなかつた。

正直初めて作つたからうまくできたかは分からないが、自分の中では最高の出来だと自負している。

周りの人みんなの様子を見てみると、楽しかったことを思い出して笑っていたり感慨深そうに見ている子もいれば泣きそうに見ている子もいた。

希の方を見てみるとちょうど俺の方を見ていたみたいで目線が合わさつた。そして口を動かしていた。おそらくは、ありがとうと、伝えたかつたのだろう。

俺も口を動かしながら、どういたしまして、っと伝えた。

希にも伝わつたのか笑顔を向けてくれたの作つた甲斐があつたつてもものだ。

—————

あれからは進みもう遅い時間ということでお開きになり、今は玄関のところのみなでお喋りをしていた。

絢瀬「はい！あんまりこんなところで騒いだら真姫の家に迷惑だしそろそろ帰るわよ」

はーいという返事をみんな返して、それぞれは自分の家の帰路へと着く。
つともう一つやることあるんだよな！

魁翔「希ー!!」

東條「どうしたん魁翔くん？」

魁翔「はいこれ、さっきのムービーのディスク」

東條「ありがとなー、他のみんなのプレゼントも嬉しかったけど、魁翔くんのプレゼントは本当に嬉しかったで。それだけウチにとつては、 μ s が大切だったから……」
魁翔「そうだよな、あとこれもプレゼント！」

俺は一つのアルバムを手渡した。不思議そうに見る希に開くように促して、アルバムを開かせると、

東條「あ！これさつき流れてた写真とかのアルバムかー、ホンマに懐かしいなー」

魁翔「そうだろう、そして最後のページ開いて見て」

そうせかして希に開かせると、そこには最後のライブである【僕たちはひとつの光】の集合写真が貼ってあり、そしてみんなからのメッセージが書いてあった。

それを見た瞬間、希は目を見開いてパーティー中にも見せなかつた涙を流した。

東條「ほんま魁翔くんはずるいなあ……こんなに色々なもの貰ってたら感謝しても全然足りへんわ」

魁翔「いいんだよ別に、それに希を祝えるのも今年が最後かもしれないしな……」

そう言う希はさつきまでの嬉しくて懐かしそうにしてた表情が嘘だったのよう顔が曇る。

東條「魁翔くんは……やっぱり考え直す気はあらへんの？」

魁翔「ああ、俺はもう十分に生きたよ。それは最高の人生だったよ、特に高校の3年間は忘れたくても忘れられないぐらいにね。みんなに、μ sのみんなに出会えたことは俺の中で生き続けて行くから大丈夫だよ」

安心させようと希に笑顔を向けるが、果たしてちゃんと笑えていたかどうかは自分には分からない。

そう言うのとタダでさえ曇っていた希の顔が、先程の涙とは違う悲しみからの涙を流しながら曇らせた。

東條「そつかあ……みんなには言うたん？」

魁翔「いや……真姫と穂乃果しか知らない……」

俺の秘密は元から知っていた真姫、そして二年生の頃に希にバレしまったのと、少し前に穂乃果に伝えたので三人しか知らない。

東條「言わへんと後悔することもあるで」

魁翔「言つて後悔することもあるんだよ」

東條「そんなことない!!言わずに後悔するよりかははずっといい!!」

……それを魁翔くんは私に教えてくれた!!」

いつもの関西弁がなくなり標準語になつてゐる希を見て俺の心が動く。彼女が本気の証拠だ。

ああ、そんな事もあつたなと思う。自分の心をみんなにさらけ出すと迷惑をかけるかもしれないと、思いを押し殺していた希の背中を押しつけた。

魁翔「でも!……それでも!!それでも……俺は最後までみんなに笑つて欲しい……俺の勝手なワガママだけど俺のせいでみんなの笑顔を奪いたくないんだ……」

東條「本当に……それが魁翔くんの答えなんやね?」

魁翔「ああそうだよ、これが俺が考え抜いて出した答えだ。だから希の頼みでもそれだけは聞けない」

希はそれつきり喋らなくなつたけど、俺への目線は離れず見つめ合う形で時間が過ぎていく。

どれくらい時間が経つたのだろう、1分だったのかもしれないし1時間だったのかもしれない。

東條「なら私からはもう何も言わへんわ」

魁翔「ああありがとう希」

東條「でも!!」

俺が返事をする、希が力強い声で俺の言葉を遮るように喋る。

東條「それでもウチは魁翔くんには死んでほしくないっていうことだけは覚えておいてな？」

魁翔「……善処するよ」

希「それ守らん人が言うセリフやん」

俺がボケて希がつっこむいつもの感じが戻ってきてようやく緊張感から解放された。二人して笑い、俺たちはようやく帰路につこうとする。

東條「それじゃ今日はお別れやね、プレゼントありがとう。おやすみ」

魁翔「おやすみ希」

素晴らしい俺は身をひるがえして希とは反対の方向へと歩みを進める。

東條「魁翔くん!! 沢山の思い出を私にくれてありがとうね!! この思い出も、魁翔くんのことも絶対に忘れへんからね!! ……だから!! ……」

背中越しに聞こえる希の声。俺に何かを伝えたくて必死な声は確かに俺へと届いた。今にも消え入りそうな震える声だがあたたかくて包まれるような優しさを含んだ希の声。

東條「うちも! ……魁翔くんも! ……一人じゃないからね!! それだけは忘れないでね!!」

泣いているからなのか途切れ途切れの声になっているがその声、思いは確かに俺の中へと響いた。

俺は何も言わずに、振り向かずにとただ手を上げてふった。

一人じゃない。

この言葉は俺がずっと無意識に求めていたのかもしれない。両親がいなくなり俺はずっと孤独を感じて過ごしてきた。

高校に入り初めて仲間と呼べるかもしれない人達と出会い一緒に成長してここまでやってきた。何回もくじけそうになったり、辞めてしまいたいそうになったけれど今こうしてみんなで笑いあえていることが何よりも俺の宝物だ。

だからこそ俺はみんなには笑っていて欲しい。俺の前でだけは笑顔を絶やさないと欲しいと願う。

だからこそ絶対に言えない。もう伝えてしまった三人はともかく、後のみんなにはバレルわけにはいかないんだ。もう一年体が保てばいい方だろう。

残りの一年を忘れられない記憶にするためにも今回の希のプレゼントを全力で考えた。最後のプレゼントには申し分ない出来になっただろう。

それに、

魁翔「絶対に忘れないかあ……みんなもそうだと嬉しいなあ……」

みんなとの思い出が永遠に残る形にできたのは俺にとっても喜ばしいことだ。これで少しでも俺が生きた証になればいいなあと思は思う。

魁翔「さてと!!他のみんなの誕生日も最高にもりあげるかあ!!!」

夏に入ろうとしてジメジメした夜の中俺は一人で声を上げる。

願わくばみんなの誕生日を祝ってから俺の体が限界を迎えるのを願うばかりだ。

8話　くクレープ食べたい！く

魁翔「あくだりくく」

先生がプリントを列の一番前の人に順番に配っていく中で、配られたプリントを見て俺から思わず声が漏れてしまう。

そのプリントとは何を隠そう、中間テストの予定表である。まあ期末テストと違って一般科目しかテストがないのが救いである。

まあどうせ勉強しないからどうでもいいんだけどねー。

その君、俺の事を頭が悪そうだと思っただろ??残念だったな!!俺の成績はちやうど真ん中ぐらいだ!!

……真ん中ぐらいなのかよ、

魁翔「まあどうせ数学は補習だろうしなー」

園田「なんで受ける前から諦めてるんですか……」

海未は呆れたように半目で俺の顔を見ってくる。

やめて!そんなに見られちゃうと体力がゴリゴリ持っていかれちゃう!

魁翔「だって考えてみるよ？俺が数学で30点も取れると思うか？」

園田「それは……無理ですね」

少し考えてみたようだがやはり俺と同じ結論だったらしい。ってか新しいクラスになつてから一ヶ月ちよいでここまで馬鹿だと思われていると思うと少しくるものがあるな。

少し悲しくなるわ……

魁翔「まあ後ろで今寝てるやつもどうせ補習だろうし一人じゃないならそれでいいわ」

俺は後ろで寝ているやつを見ながら海未にそう告げた。先生がテストについての説明をしているのに呑気なやつだなーと思う。

海未も呆れたため息を漏らしている。

園田「魁翔もちゃんと勉強してくださいね？直前に泣きついてきても知りませんから」

魁翔「大丈夫だ、本当にヤバイと思つたら諦めるから」

俺の言葉を聞いてまたもやため息をついている。

魁翔「海未はため息ばかりだし幸せが逃げて行きそうだよな」

園田「全く誰のせいだとおもってるんですか……」

はーい俺ですね。もう海未のため息をつかせているのは俺と言っても過言はないほどだ!!

威張ることじゃねーなこれ。

このやり取りを最後に俺も睡魔に誘われてしまい深い眠りに落ちていった。

—————

穂乃果「魁翔くん!!クレープ食べに行こう!!」

魁翔「いや、急にどうした?」

ほんとうに急にどうしたんだ?穂乃果が急にこんな事を………

魁翔「うんいつも通りだな。でなんかあったのか?」

南「近くの公園にクレープ屋さんに来てるらしいんだよ」

魁翔「へえーなるほどねー。え?俺も行くの?」

穂乃果「え?行かないの?」

いやそんなに純粹な目で見ないですよ。俺がついて行くのが当たり前みたいになつてんじゃないかよ。俺はそんなに甘くないぞ!!クレープだけに!!

魁翔「まあ行くけど」

はい私は甘いものは大好きなので同行させていただきます。

魁翔「海未は今日も部活あるのか？」

園田「はい、だからすみませんが魁翔と穂乃果の事をお願いしますねことり」

南「任されました♪」

その言い方はとっても可愛いんですが、それより一つ物申したいんですけど。

魁翔「そこは男の俺にお願いとところじゃないんすかね？え、なに？俺の信用性つて穂乃果と同じぐらいなの？」

それは流石に心外だぞ海未よ。俺だつてそれなりに真面目に生きてきたつもりだ！

園田「二人ともどうせ遊びだすでしょうし、早く帰らせて勉強でもするようにさせろつていう意味ですよ」

魁翔「ぐうの音もでない」

穂乃果「うう…でもまだ一週間以上あるし今日くらい大丈夫だよ!!明日から頑張るからさあ行こう!!」

穂乃果はそう言う俺とことりの手をとって教室の出口へと向かつて行く。つてかちよつと恥ずかしいから手とか取らないでほしいんですけどね。

園田「はあー：気をつけてくださいねー!」

俺たちが教室から出る直前に海未は大きな声で心配の声をかけてくれた。何だかん

だ言つて海未も穂乃果のことが好きだからうるさく言つてしまふのだろうな。

まあそれはいいとして、

魁翔「なあー穂乃果、別におれ逃げたりしないしそろそろ手を離してもらえませんか？」

そう告げると穂乃果はマジマジと俺と繋いでる手を数秒間見たかと思うと、パツと勢いよく手を離された。

なんかこんな風に離されると俺の手が汗だらけだったから気持ち悪かったか思つちやうんですけど……私シヨツクです!!

穂乃果「そ、そうだね!!ごめんね？」

魁翔「いや別に怒つたりはしてないよ」

穂乃果は顔を赤くして言つてるんだが、そんなに俺の手を握つてるのが気づいた瞬間嫌になつたのか？そろそろ俺泣きますよ??

隣ではことりが「穂乃果ちゃん可愛い♪」つて言つてるし、俺は涙が溢れそうだし、なんかカオスだな。

魁翔「オホン！それにしても来週ぐらいからテストだけど二人は勉強できるの？」

そう聞いた瞬間、穂乃果は苦い顔をしているがまあ予想通りだな。ことりはイメージ的には結構上の方だな。

穂乃果「穂乃果は苦手だけど、ことりちゃん和海未ちゃんは上位の方なんだよ!!」

魁翔「なぜ穂乃果がエラソーーしてんだよ、勉強をしろ勉強を」

穂乃果「穂乃果だって色々あって忙しいんだよ!」

南「でもこの前、雪穂ちゃんが穂乃果ちゃんが家に帰ってきてから勉強もせずに遊んでばっかって言ってた気が……」

おっとここでまさかのことりからの攻撃です。この意外なところからの攻撃には穂乃果選手も唸るしかないようです!!

魁翔「まあ遊んでるだけだな」

穂乃果「うぬぬぬ……そういう魁翔くんだって数学できないじゃん!」

く、こいつめ痛いところつきおって。

魁翔「いいんだよ、それでも順位的には真ん中の方だからな」

穂乃果「うそ!!穂乃果と一緒にのおばか仲間じゃん!!」

魁翔「いつから仲間になってんだよ、言っておくけど俺は数学以外は普通だし現文は上の方だからな」

本当に意外だったみたいで穂乃果は「これじゃあ私だけおバカじゃん!」と唸っているが、ここまで俺のことをみんなバカに思ってたなんて少し傷つくわ。まあ数学はまったく出来ないのは本当なんだけど。

南「そうなんだね、ことりも今度教えてもらおうかな？」

魁翔「つて言ってもな現文つて感覚的な感じだしな教えるつて感じは難しいな」

南「うーんそつか、私現文はあんまり得意じゃないから教えてもらおうかと思つたんだけど」

魁翔「まあ今度暇だつたら少しやつてみるか？うまく教えられる保証はないけどな笑」

南「うんじゃあお願いしようかな？」

穂乃果「つて穂乃果だけ置いてけぼりにしないでよ!!わたしにも現文教えてよ!!」

魁翔「はいはい暇だつたらな」

穂乃果が隣でブーブー言ってるがまあ無視してていいだろう。お！公園の中のクレープ屋さんが見えてきたな。

魁翔「ほら穂乃果、クレープ屋さんつてあれだろ？」

穂乃果「あ！本当だ!!」

そう言うとい目散に一人だけ駆け出していつてしまった。俺とことりはその様子を見て顔を見合わせて笑つてしまった。

南「私達もいこつか？」

魁翔「ああそうだな」

俺たちも先に行つてしまった穂乃果を追いかけて小走りで行く。穂乃果に近づいて

みると、当の本人は何を食べようか選んでいるところだった。

穂乃果「うーんこれも食べたいしあれも食べたいし全部食べたくて選べないよー!!」
「どんだけ食べたいんだよこいつは。全部なんてだべちやったら太っちゃうぞ。まあ口に出したらまた痛い目にあいそうなんで出さないが。」

魁翔「じゃあ俺のやつ穂乃果が選んでいいぞ」

南「私も穂乃果ちゃんの好きなやつでいいよ。そしたら三人で分け合いっこしよ?」

穂乃果「いいの二人とも私の食べたいやつで?」

俺とことりの二人はコクリと頷く。

穂乃果「うーくん、二人ともありがとー!!」

そう言うのと飛びつくように俺とことりの二人にあらうことか抱きついてきた。

いや別に嫌じゃないんだけどねーむしろなんか甘い匂いとかして嬉しいんだけど、ちよつと色々柔らかいものとか当たって俺の理性がくく!!

魁翔「ほ、ほら早く選んでこいって!!」

はーいと言いつつ穂乃果はことりを連れてクレープを選んでいる。

俺はと言うと近くににあったベンチに座って心臓の動悸を治めていた。

魁翔「あーもう、このままじゃあ心臓がダメになる前に穂乃果に殺されそうなんすけ

どね」

穂乃果はひいき目無しに見ても美少女の分類だろう。もちろん海未とことりもだが。そんな子に抱きつかれてしまう必然的にこうなってしまうよな？

まあやって欲しくないかって聞かれると、そりややって欲しいのだが。

……だって男子高校生だもん!!

気持ちわりーな俺が言うのと。そんなこんな考えていると穂乃果とことりがクレープを買ってきて俺の隣に座る。

穂乃果「はい魁翔くんの一！」

穂乃果に渡されたクレープをみるとこれはこれは。クリームにチョコ、バナナやイチゴなど様々なトッピングが乗っており見てるだけで胸焼けしそうな甘い匂いが漂ってくる。

隣の二人を見ていると二人とも美味しそうにクレープを食べていた。

俺も一口かじってみると、

魁翔「うまい、そしてあめえ……」

うん思ったとうりの甘さである。逆にこの見た目で甘くなかった方がビックリするわって感じだけど。

穂乃果「魁翔くんのどう？おいしい??」

魁翔「ああおいしいよ、美味しすぎて胸が張り裂けそうだ」

穂乃果「本当!?!じゃあもらーい!」

そう言うところうことか穂乃果は俺のクレープにかぶりついてきた。

別にあげること自体は元からの予定だから良いんだけど、俺の食いかけの場所をかじるのはちよつと……

穂乃果「ん??どうしたの顔赤いけど?」

魁翔「いや、なんか暑いなー今日は!!」

そう言い俺は手で顔をあおる。

穂乃果の奥に座っていることりを見てみると、俺たち二人の様子を見て嬉しそうにニコニコとしている。いや、ニヤニヤしているの方がこれは正しいかもな。

穂乃果「うーんまだそんなに暑くないと思うけど。あ!私のもあげないとね、はい!!」
穂乃果はそう言うのと今度は自分の持つているクレープを差し出してきた。もちろん食べかけをだ。

魁翔「いやー別にそんなに食いたいわけじゃないから俺はいいよ」

穂乃果「ええーダメだよ!穂乃果だけ貰うのは悪いし、ほら!」

グイグイと俺の口元にクレープを近づけてくるので必然的に穂乃果との距離が縮まり俺とくつついて必死に食べさせようとしてくる。

ことりに助けを求めようと見るが、先程と同じくニヤついた顔で俺の方を見てくる。

魁翔「(くそーことりめ、絶対にこの状況を見て楽しんでやる)」

魁翔「あーもう分かっちゃって、食うからちよつと離れろ！」

穂乃果の肩を掴み無理やり距離を取らせた。

穂乃果「じゃあーはい!!」

魁翔「はいはい、あむっ」

穂乃果「どうどう?おいしい?」

魁翔「うまい：：：」

正直、頭の中で色んなことを考えてて味どころじゃなかったので美味いかどうか分かんなかったけど、とりあえず美味いと言っておいた。

それから次はことりにも食べさせてもらおうという「もちろん食べかけ」羞恥プレイをやらされておれの体力はほぼ尽きていた。

穂乃果「うーん美味しかったね!!明日も来ようよ!!」

魁翔「え!明日も!?!」

このやり取りを明日もするのは流石にきついんですけどね。主に俺の精神的に。

穂乃果「明日は海未ちゃんも来れると思うし四人で来ようよ!!」

魁翔「ま、まあ暇だったらな」

そう言い残し俺たちは帰路に着いていった。

あれから次の日はしっかりとクレープ屋さんに来ていかれてまたみんなで食べあいつこをしようとしたけど海未の「ハレンチです!／＼／」の一言によって回避をすることができた。

まあ何だかんだ結構毎日のようにクレープ屋さんへは連れていかれた。当然のごとく帰る時間も遅くなり勉強などは全然しなかった。そしてテストを迎えて、今日はテストの返却日だった。

穂乃果「うわーん!数学欠点だー!!補習嫌だー!!」

魁翔「まあ自業自得だな」

園田「ですな」

南「アハハハ……」

まあ、あんだだけ毎日のように寄り道して遊んでたらなそりやあ勉強なんてできないだろうな。寄り道しなかったところで勉強したかどうかは怪しいけど。

園田「魁翔はどうだったんですか?」

魁翔「ふっ!これを見よ!!」

サツと三人の前に一枚のプリントを出し結果を見せる。そこには……

穂乃果「現文学年1位!」

南「すごい魁翔くん!!」

園田「二人とも騙されなくてください。数学のそこをよく見てください」
そうだと現文自体は過去最高の結果だったのだが、

穂乃果「数学2点で最下位……」

南「えつと……極端だね!!」

園田「なんでここまで極端になるんですか……」

だって意味わかんねーだもん。なんだよXつて!なんで点Pは勝手に動きやがんだよ!!てか方程式つてなんだよ!!

正直なこと言うと2点自体も選択問題をテキストに選んだら当たっただけなので実質は0点みたいなのだ。

魁翔「まああれだな。人間誰しも得手不得手があるって事だな。なので俺は悪くない!!」

園田「開き直らないでください!!」

まあこうして結局俺と穂乃果の二人は補習にて先生からのしごきを受けるのだった。ちなみに海未は学年で5番だつらしい。ことりは上の下ぐらいらしい。

—————

補習にて

魁翔「せんせーい、聞いてもどうせ分かんないので帰っていーすか?」

先生「開始早々に舐めた口を聞くとはいい度胸だな?」

魁翔「嫌ですなー先生、これは先生のためですよ?」

先生「どういう意味だ??」

魁翔「だつて俺にいくら教えたつて何にも分かんないしただの時間の無駄だし、先生のストレスも溜まるだけでしょ?それだつたらお互いのためにもこの補習を俺は受けないべきじゃないでしょうか?」

先生「よーし分かった遺言はそれだけか?」

そう言うのと先生はチョークを構えて振りかぶろうとする。

魁翔「先生最近は何罰とかの問題で色々大変ですよ??」

先生「大丈夫だ、これはただの指導だ!!」

そう言い俺の顔にめがけてチョークを投げてきた。俺はとっさに頭を下げたが、避けてから気づいたのだが俺の後ろの席には……

穂乃果「痛ったー!!なに!なにがあつたの!?!」

こいつ全然気づいてなかったのかよ。もしかして開始早々に寝てやがったのか??

先生「あーすまん高坂、手が滑った」

穂乃果「すまんじゃないですよ!!びっくりしたじゃないですか!？」

先生「開始早々に寝ているお前が悪い。そして補習は本当は一週間だが不真面目なお前たちのために二週間に伸ばしてやろう」

二人「ええー！ー！！」

こうして仲良く三人だけの補習は二週間にわたり行われるのだった。

ちなみに俺たち二人の成績自体は補習開始前とさほど変わらなかった。

人間そんな簡単に成長できたら苦労しねーよ。

9話 くはじめてのおつかい 前半く

外を見れば青空が一面に広がっていて夏を感じる季節が近づいて来てる。まあまだ6月にも入っていないのだが。ってか最近暑すぎんだよ

まあ、激闘のテストを終え、中間テストの傷跡「補習」を無事乗り切り、暦の上でも6月を迎えようとしているのだが、今日も今日とて通常どおり授業を謳歌していた。まあ寝てたけど。

とりあえずいつものように授業が終わりやつと昼休みになったと思った束の間、俺の携帯が振動した。ラインとかは通知を切ってるので恐らく電話だろう。

魁翔「誰からだ？」

普段連絡を取り合う相手なんて親と穂乃果たちぐらいしかいないし、全然心当たりがないので少し不審に思う。

園田「携帯の電源は切りなさいといつも言ってるでしょうに」

魁翔「はいはいごめんなさいお母さん」

園田「誰がお母さんですか!!」

海末の的確なツツコミを頂戴したところで画面を覗いてみると、そこには「宇宙NO1アイドル」と表示されていた。一瞬間なのかと思ったがよく考えてみたらにこつち先輩の名前を遊びで自分でつけたものだった。

操作をして通話を始めたが、

矢澤「魁翔!!!いまか：　　ブチっ!!」

にこつち先輩の声があまりにもうるさ過ぎて、つい終了ボタン押ししてしまった。

当然のごとくまたかかり直してきて再び俺の携帯が振動を始める。

なんか言われそうだからあんまり出たくないけど、出なかつたらで出なかつたでめんどくさいしなーと思えば操作をして通話をつないだ。

矢澤「ちよつと何でさっき切ったのよ!!」

魁翔「すいません。ちよつとあれがあれだったんで」

矢澤「まあ今は急いでるしいいわ。それよりも今すぐに部室に来なさい!すぐによ!!」

そこまで言うとは一方的に通話は切られ、プープーという機械音のみが残った。

穂乃果「魁翔くんごはんたべ：：：どうしたの?遠い目をして??」

魁翔「いやー災害つてのはなんの前触れもなく起きるんだなーって思つて」

穂乃果「??、どーゆうこと?」

魁翔「いやこつちの話さ、つて事でちよつと用が出来たので昼飯は三人で食べてくれ」

穂乃果「わかった！いつてらっしやーい！」

俺は穂乃果からの激励を受け教室を後にした。早足で部屋に向かっているのだが正直嫌な気しかない。

魁翔「あーなるべくめんどい事じゃなきやいいけどー」

一人誰かに聞かせるわけでもなく俺が呟いた声は、昼休みの喧騒の中に溶け消えていった。

しばらく歩き部室の前までもう少しといったところでドアの前に誰かが立っているのが見えた。いや、見覚えのある二つのおさげの女の子が見えたのが正しい。

魁翔「あれ？希先輩もにこつち先輩に呼ばれたんすか？」

東條「あ、魁翔くんやん久しぶりやな。そうやでー急に、にこつちから連絡が来てるー、もつてことは魁翔くんも呼ばれたん?？」

魁翔「そうですよ、でも様子からして面倒ごとの気しかないんすよね」

東條「うちもそう思うわ」

まあドアの前でグダグダしてても何も始まらないのでとりあえず中に入ることにした。

ドアを開けてみるとそこにはもうにこっち先輩は座っていて明らかに不機嫌そうな顔でこちらを見ている。

矢澤「あんた達遅いわよ!!特に魁翔は先に連絡したのに何で希と同じなのよ!!」

魁翔「そんなこと言われても学年同士の階が違うんですし、希先輩の方が近いじゃないですか」

矢澤「まあそういう事なら今回は許してあげるわ、とりあえず話したいことがあるし二人とも座りなさい」

俺の言い訳で納得してくれたようで今回は許してくれたようだ。つてか別に怒られる意味もわからないのだが。

まあ座れと言われたし俺と希先輩は素直に言うことに従い席に着いた。

矢澤「単刀直入に言うわね。あんた達今日の放課後は暇?」

正直言えば暇なのだが、間違いなく何かやらされるのだろう。今日は昨日のアニメを見るという使命があるので帰るのが遅くなるのは嫌だ!!

東條「うちは生徒会の仕事があるけん今日は無理やね」

魁翔「俺もちよつと今日は用事が：：」

矢澤「そうじゃあ私と魁翔の二人だけね」

魁翔「あのー俺の話聞いてましたか？俺には人権なんてないという遠回しなディスプレイですか?？」

矢澤「あんたが嘘ついてるなんて顔見りや分かるわよ」

え？そうなの!?俺ってそんな顔にでる方なのかなーと思ひ希先輩の方を向いて尋ねてみると、

東條「そうやね、魁翔くんは顔にすぎや」

ケラケラと笑いながら希先輩に言われてしまった。そんなに俺は顔に出やすかったのか。少しシヨックだ。

魁翔「はいはい分かりましたよ。で、何をすればいいんですか？鑑賞会ですか？イベントでもあるんですか?？」

はあーと呆れたようにため息をつくにこっち先輩。

矢澤「あんた今日が何の日なのかも分からないの?？」

魁翔「えっーと誰かの誕生日ですか?？」

東條「うーん？私と魁翔くんの共通の知り合いで誕生日の人はいないと思うけど」

矢澤「まったく二人ともしようがないわねー。今日はなんと!!：：：：：：：：：：」

A — R I S Eの新曲のCDの発売日よ!!!」

魁翔「………帰っていいですか？」

矢澤「なんでよ!!用事があるから呼んだのに帰るな!!」

えー、もうめんどい予感の中するやつじゃんこれ。

魁翔「ちよつと希先輩からも言つてやつてく………いない!!」

これ以上めんどろうことは嫌なので希先輩に任せようと思ひ横を向くとそこには希先輩はもういなくなつた。

代わりとして一枚の紙が置いてあり、そこには「用事思ひ出したし帰るわ。ほな頑張つてな〜」と書いてあつた。

魁翔「あの人、何時の間に消えてたんだよ……」

俺のみ取り残されてしまい今日の放課後のコースが確定してしまい、頭を抱えていると、

矢澤「そんな事よりも私の用事つてのはそのCDを買う手伝いをして欲しいの」

CD買うつて何言つてんだこの人？ 買い物も一人で行けないのか？

魁翔「にこつち先輩は一人で買い物も行けないんですか？ はじめてのおつかいじゃあるまいし」

矢澤「そんなわけないでしょーが!! 今回のCDはねー、店舗によつて限定の特典があるのよ! それを集めるためにあなたにも手伝つてもらおうわよ!!」

うわ! めんどくせ!

特典とかいらないじゃん、同じCDなんていらないじゃん、行くのめんどいじゃん。

……最後のほちよつとおかしかったな。

魁翔「別に俺が行かなくても一人で回れるでしょーに」

矢澤「あのねーA——RISEは人気がすごいんだからすぐ売り切れちゃうのよ!!
今回は希がないくて二人しかいないんだから正直買えるかどうか」

え、買えるかどうかってそんなに直ぐに売りきれんの？ってかアイドルオタクの中に
つっこむのって結構勇気いるんすけど？

つえ？おれはアニメオタクじゃないかって？

それとこれとは話が別なんだよ！

矢澤「はいこれがあんたに行つてほしい場所のメモよ」

そう言い渡されたメモを見て俺はギョツとする。行く店舗自体は4店なのだが、店舗
間の距離がなぶん遠いのだ。

正直俺の体力からしたら全部回つてると日が暮れそうだ。

魁翔「あのーにこさん？ちよつとばかし遠すぎじゃないですか？」

矢澤「別にそこまで遠くはないでしょ、それに電車とか乗ればすぐだし」

あー、電車ね。その手があったか。

……

オレデンシヤノツタコトナインスケド??
ヒロスギテヨクワカラナインスケド??

矢澤「それじゃお願いね」

そう言い残しにこっち先輩は部室から出て行ってしまった。

ええーまじっすか?これ詰んでんじゃん。

はあーまあ後のことは後で考えよ。取り敢えず教室に戻るか。

――――

ついに最後の授業が終わってしまった。これからの事を考えると嫌になってくるが、引き受けてしまったことだ。どうにかするしかない。

って言ってもなー何も方法が思いつかん。駅員さんに聞くのはなんか恥ずかしいし。

穂乃果「魁翔くん帰ろー!!」

魁翔「あーすまん、今日は用事があるから帰ってていいぞ」

穂乃果「そうなの？じゃあまた明日ねー!」

南「魁翔くんまた明日ね♪」

魁翔「おうまた明日」

そう言い二人は教室から出て行ってしまった。

園田「珍しいですね魁翔がすぐに帰らないなんて」

魁翔「ああさつき言ったとうり用事ができたからな。海未は今日も部活か？」

園田「はいもう大会の時期ですから今まで以上に集中していかなきゃいけないところで
す」

魁翔「あーそう言えばそんな季節だな、部活やったことねーし気づかなかったわ」

園田「そうですか……」

海未はアゴのに手を添えながらオレの目を覗き込んでくる。ほんとうこういう姿が似合うなーと思いつながら何事だろうかと俺が口を開こうとすると、

園田「魁翔は弓道には興味はありませんか？弓道ならば魁翔の体力でも出来るでしょうし、それに向いてると私は思います」

海未の言葉を聞いて俺は目を見開いた。

今まで俺の事を知った人は俺の心配をしてこのような話題には触れないようにしてきたのだが、海未はそんな扱いをせず一人のヒトとして扱ってくれる。いや最近周りにいるみんなもか。

魁翔「有難い誘いだけど今は断っておくよ。まあ今度一回ぐらいはやってみたいかな」

園田「そうですか。その時は是非きてくださいね」

そう言い、海未は礼儀正しい佇まいで立ち上がり教室から出て部活へと向かっていった。

誰も居なくなった教室の中に俺は一人いる。

教室の中は音ひとつ立ってないが、外からの部活の喧騒が教室の中にも響き渡っている。

魁翔「まあ今は急いで行かないといけないし行きますか」

もう少しここで考えたいこともあったが時間は待つてくれるはずもなく、急がないとにこつち先輩にしばかれてしまう。

取り敢えずは秋葉原の目的の店の方に向かうかね。

—————

店員「ありがとうございますー」

取り敢えず1個目の目的のブツは手に入ったのだが、これからどうしたらいいことや
ら。

魁翔「あー電車のところに行ってみるか、それとま歩いて行くか、いやでも本格的に死
んでしまうかもしれないし……」

俺は一人道の真ん中に突っ立ってブツブツ喋っていた。俯いて考えていたので周り
は全然見てなかったたので俺に近づいてくる影に気づかなかった。

雪穂「何してるんですか魁翔さん？」

自分呼ぶ声が聞こえたので、ふと顔を上げてみるとそこにはご近所さんであり、クラ
スメイトの妹にあたる高坂雪穂がいた。

魁翔「雪穂ちゃんよ、俺は今人生という迷路に迷っているんだよ……」

雪穂「はあー迷子ですか？」

呆れたように雪穂ちゃんに見られるが違うんだよ。

魁翔「いや場所もそこへの行きかたも分かるんだが、行く方法がないんだよ」

雪穂「一体どこへ行くこうとしてるんですか??」

魁翔「いやーこことこことここなんだけどね」

にこつち先輩からのメモを見せながら雪穂ちゃんに言うと、

雪穂「行く方法がないって言うからどこに行くつもりなのかか思ってたけど、歩くなり電車なりで行けるじゃないですか」

魁翔「雪穂ちゃん、電車の乗り方が分かりません……………」

雪穂「え!? 電車乗ったことないんですか!?!」

魁翔「恥ずかしながら四月からここに来たもんで……………」

雪穂「あーそう言えばこの辺の出身じゃなかったんですよね、それじゃ仕方ないですね」

魁翔「そこで一つお願いがあるんですけどちよつとだけ乗り方とか教えてもらえないでしょうか?」

俺は頭を目の前の少女に向かってさげる。秋葉原の中心街で俺はプライドなど何処かに投げ捨てて年下の少女にお願いを乞うことにした。

雪穂「頭あげてくださいって！私もそこに用事ありますし大丈夫ですって!!」

おぉーここに女神が降臨したようだ。気のせいか雪穂ちゃんの後ろに後光が差している気がする。

魁翔「雪穂ちゃんありがとう。今度なんでもしてあげるよ」

雪穂「あ、じゃあおねえちゃんに勉強教えてあげてください、数学以外はできるんですよね？」

魁翔「穂乃果は……もう手遅れだ……」

雪穂「諦めないでくださいよ!」

そんな軽口を言い合いながら俺たちは電車のある方へと向かって行く。

駅へ着いたがやはり迷路のようだ。これどうなってんだろーな、どこを向いても人、人、人。電車も乗る場所とかたくさんあるし、マジで意味わかんねーよ。

雪穂「ほら、行きますよ」

いつのまにか俺の分の切符まで買ってくれていたのか雪穂ちゃんが俺に近づいてくる。

無事電車へと乗り込むと席が空いてなかったので二人で入口の近くに立つておくこ

とにした。

雪穂「それにしても魁翔さんの目的地ってどこもCDが売つてるところだと思ふんですけどなんの用事なんですか？」

魁翔「ちよつと先輩におつかいを頼まれてしまつてね。最近有名なA——RISEっていうスクールアイドルって知ってる？」

雪穂「知ってるもなにも私もそのCDを買いに来ましたから」

なるほどなつと俺は心の中で納得した。先ほど雪穂ちゃんは目的地が一緒と言っていたがその意味はこれだったのか。

魁翔「で、そのCDの特典とやらが店舗ごとに違うから買うのを手伝ってほしいってことで俺は店を周らさせられてるってわけだ」

雪穂「なんだか大変そうですね」

魁翔「ハハは：もう慣れたよ：：」

雪穂ちゃんに同情の目で見られながらも電車は目的地へと進んで行き、目的についていることをアナウンスが教えてくれた。

10話　　～はじめてのおつかい　　後半～

俺は人に軽く酔ってしまいふらつきながら目的地の駅で降り、ようやく電車の中での窮屈感から解放されて背伸びをしていた。ってか電車の中マジで人多すぎだろ。

みんななんであんなの普通に乘ってんの？東京では普通なのですか？

魁翔「まあ、それじゃあ行きますか」

雪穂「はい、そうですね」

俺たちは軽く雑談をしながら目的の場所へと向かっている。

なんか穂乃果達という時にも感じるのだが、歩いているといろんな人からの視線を感じる。やはり美少女が隣にいると目立ってしまうな。ってかむしろ目立ちすぎて、隣の俺が残念に見えるのではないか!?

いと悲しきことだ

魁翔「雪穂ちゃんに傷つけられた……………」

雪穂「急になんの話ですか!？」

まあいきなり言われたら普通そうなるわな。

魁翔「いやー雪穂ちゃんみたいな美少女が隣に歩いてると目立っちゃうし、隣の俺が邪魔に見えるなーって思ってるわ……」

なんか言ってる悲しくなってくるわ……

雪穂「もおー何言ってるんですか??それ多分私じゃなくて魁翔さんを見てるんじゃないですか?」

魁翔「はあ?ないないない、俺なんか見ても不快な思いし shouldn't でしょう」

いやまあ流石に後の言葉は冗談だよ。ってか冗談であってくれよ、本当だったらメンタル破壊されて散々泣いた後に家に帰っちゃうぞ。

雪穂「うーん?顔もまあまあいいんですし勉強もできるのは出来るらしいし中学とかモテなかったんですか?」

魁翔「俺なんかモテたら地球上の大抵の人間がモテちゃうって、あ!店ってあれじゃね?」

目的の店が見えてきたので雪穂ちゃんに確認のために指をさして言う。

雪穂「あ、そうですね」

とだけ雪穂ちゃんは返事をしてくれて早速俺たちは店内に行ったのだが……

魁翔「なんだこれ……」

俺が見た先には人の大行列があった。もちろん並んでいる人の手には先ほど俺が購入したのと同じCDがあった。

え？こんなに人気あるもんなの？さっきの店ではあんまり並んでなかったんですけどね。

俺が驚愕に打ちひしがれているのを脇目に、雪穂ちゃんはCDを俺の分も手に持ってきてくれた。

雪穂「さあさつさと並んで帰りましょ」

魁翔「あ、はい」

こんなものなんですかね？こんなものなの普通か？最近の女子高生は強いなあと俺は遠い目をしながら見当違いなことを考えていた。

—————

雪穂「それじゃあ私ここから帰りますので頑張ってくださいね」

魁翔「ああありがとな雪穂ちゃん！今度お店になんか買いに行くからね」

雪穂ちゃんは最初の店でお別れとなり電車に乗ってまた帰るようだ。まあ俺にとつては2店舗目なのだな。

何はともあれ次の駅までの行き方などを教えてもらい切符も買ってもらったのでこれで何とかなるはずだ。

雪穂ちゃんへの帰り道は俺の行き先とは反対なので逆の便に乗りお別れをした。

無事次の駅に着き安心してはいるのだが、ここからが本番なのだ。先ほどの店の様に並んでいたらまた何十分も待たさせる羽目になってしまう。なんとしてもあのようなメンドクサイことは回避しないと!!

まあ回避する手段なんでもないのだがなーと考えているうちに目当ての店に着いた。

魁翔「よしっ!!いくぜ!!!」

魁翔「全然ヒトいないのかい?!?!」

え?!マジでないんすか?!

さっきの店のは何だったんすか? ってか俺のさっきの意気込みも完全にフラグだと思っただのに全然フラグ回収できないんかい!!

自分でも意気込み言いながら、「これ完全にフラグ立ったやつやん、絶対に何時間も待たされるやつやん」って思ったのに!!

魁翔「恥ずかしっ!!」

まあそういうことで特に何事もなく3個目のブツも無事ゲットしたということで次でラストなわけです。

次の場所は幸い今いる場所からそれほど離れてないので歩いて行ける距離だ。

魁翔「さっさとこれ買って帰ってえく、ってか今思ったら俺なんでもこつち先輩の手伝い普通にしてんだ？無償で働くとかどこの社畜だよ俺は」

あゝあ、にこつち先輩にこれ渡すときには何か交渉するしかないな。そうでもしないと割に合わねーわ。

まあ今はとりあえず最後の目的に向かって足を進めるしかないので俺は一步一步足を動かしていく。

ってなわけでやって参りました!!最終目的地のお店へと!!

そしてなんと!!CDの残り1品という最高のタイミングで俺はここにたどり着いたわけです!!

魁翔「やつぱ普段の行いがいいからだよなー、そうだよなー」

今そこで、そんなこと無いだろうって思った君は後で説教だ。

って事でCDを早速手にとりさっさと買いに行こうと歩きを進めたところで、CDコーナーに誰かが来たようだ。

そしてあろうことか最後の一枚が売り切れてCDが買えないことに相当悲しんでる

ようだ。

?? 「うう…まさかこんなに早く売り切れるなんてえ…」

んー？なにやら可愛らしい声が聞こえて来るぞー？これはあれだな、気のせいってやつだな

?? 「うう…次の入荷までどんぐらいかかるか分からないし、でもここの特典は一番欲しかったのに……」

君もここの特典狙いなのかよ!!

……何でおれは心の中でツツコミを入れているのだろうか。

………いかにいかに!! 話に耳を傾けるな! 同情なんかして渡してしまえばにこつち先輩に何をされるか分からん! アイドルが絡んでる時のあの人は中々クレイジーだからな……

?? 「はあ…取り敢えずかえろーかな…はあー」

くそ! 負けるな俺、負けるな俺!!

と、いつも自然と体が回れ右をして先ほどのコーナーに向けて足が進んでしまっている。

だめだ！これ以上進んでしまうと！！
あー~~~~~

魁翔「えつゝと、もしかしてA——RISEのCDが欲しかったのか??」

あーあ言つちまつたよ。もう後戻りはできねーぞオラ。

ちなみに少女の見た目というか雰囲気、中学生ほかったので敬語とか使わなかったんだがな……

何というか一部の部分のみ、この子中学生なんてレベルじゃ収まりきらないんですけど。

海未と比べると……コホンコホン

この話は置いて、話しかけたのはいいのだが、

??「えつえつ!!えつとその……私……いで……んですけど……くて」

全く聞き取れないんですけど!?

え?なに?俺いつからか難聴系主人公になっちゃったのかな?そんなどこぞやの金髪で目つきの悪くて友達居ないとか嘘ついてるやつじゃ無いぞ。

……話が脱線してしまったがマジでなに言ってるか分かんねーんだけど、話しかけたらキョドった感じだったし声めっちゃ小さいしこれはあれだな。

人見知りってやつだな、もしくは恥ずかしがり屋とか。

魁翔「えっと何言ってるのかあんまり聞こえないんだけどこれが欲しかったんだよな？」

そう言い俺はカバンに入れていたCDを出して少女に見せる。

そうすると少女は、コクツコクツと頷いてくれた。

はぁーと1人ため息をついて俺は決心をする。ここまで話を聞いたのだからもう戻ることは難しいだろう。まあ別に俺的には正直いうと、困ってる少女にこのCDを譲ってあげたいという気持ちの方が大きいので別にいいのだが。

魁翔「はい、これやるよ。じゃあな〜」

話が長引くとめんどくさい事になりそうなので渡したら速攻でこの場を離れる作戦を敢行した。

やはり予想道理というか、後ろでは「お金は!?!」とか「お名前を!?!」とか聞こえて来るので取り敢えず一回だけ振り返り、

魁翔「それは優しくしてカッコいいお兄さんからのプレゼントだよ!」

と、だけ言い残し俺はその場から離れていった。

フツ! どうだカッコイイだろ?

コレができるジェントルマンのやり方ってな!

……若干気持ち悪くてヤバい奴にも見えないこともない気がしてきたが、まあ別に大丈夫だろう。もう会うこともないだろうし、もし会ってもその頃にはお互い忘れてい
だらう。

はい、そう思っていた時期が僕にもありました。けれど現実つてのは小説よりも奇なり
りって言うしな。

え? 違うって? そんなこと知るか。

ってか気まずさが凄いんですけど。

用事も済んだのでにこっち先輩に指定された場所までいこうと思い、電車に乗ろうとしたのだが、まさか電車に乗ったら隣の席に座ってくるなんて。

コレは魁翔くんも驚きだよ!!

そしてお互いに「アツ!」と声を出したところで時間が止まってしまった。

まあそんなかんんで現実逃避をしているわけなのだが、

?? 「あのー……」

うーんマジで気まずい、さっきの俺は喋ったやつは確実にキモいよな? あれはマジで黒歴史になるやつだわ。

?? 「すいませんきこえてませんか?」

これは家に帰って布団の中で散々叫んだ拳句疲れて寝ちやうやつだな。

寝ちやうのかよ!!

?? 「ううゝ無視されちやうよく…ダレカタスケテく…」

あれ? そう言えばさつきから隣からなんか声が聞こえてくるのだが……

魁翔 「もしかして俺に言ってる??」

?? 「そうですよ、ようやく気がついてくれました!」

そう言うのとニツコリとした笑顔を向けてくれた。

おおー天使なのかな!? 私の闇の心が浄化されちやうゝ

魁翔「ごめんごめんちよつと考え事しててな、まあつてな訳でお疲れ様」

??「あ！は、はい！お、お疲れ様です??」

つてちよつと待つてください！」

華麗な話術によりこの戦線から離脱しようとしたのにあと少しというところで声をかけられてしまった。

つてか大きい声出せんじゃん。

魁翔「なんだよ、俺は今助けを呼ぶ声が聞こえたので今から人を助けに行かないといけないんだ」

??「絶対に聞こえませんでしたよね!？」

おおー突っ込む時は声が大きくなるのか。

魁翔「俺は正義の味方だから特別な耳を待ってるのさ。この耳にかかればどんな悲鳴だろうと半径100メートル以内のは聞き漏らさないのさ!」

??「なんか凄い風に言ってるけど、結構普通ですよね!？」

魁翔「まあな」

??「開き直りました?!?!」

魁翔「つてなわけできょうなら」

??「だから待つてくたさいってば!!」

ここで手を掴まれて引つ張られてしまいお互いの顔が向き合う形になってしまった。そして2人とも動かなくなり時間が過ぎていく。

魁翔「えつと：恥ずかしいのでそろそろ手を離しませんか？」

そこでようやくフリーズ状態から戻ってきた俺が声をかけると、少女もようやく回復したかと思つたら勢いよく手を離され何度も頭を下げられた。

ちよつと電車の中なのでそういうのはやめよーね？主に俺の精神が周りからの視線でやられちゃうから。

魁翔「それでどうかしたのか？つて言つてもさっきのCDの事だよね？別に気にしないでいいよ俺いらなしいし」

俺はいらないがどこぞの部長さんは欲しいらしいので、俺の命が危ういのだがまあいいだろう。

??「そんなつ！あなたが買ったのですから貰うことなんてできません」

うーん全然引いてくれないな。ぶつちやけ言うのと全然返してもらつてもいいのだが、それだと一回上げちやつてるので格好がつかないんだよな。

どうしたものかね〜

魁翔「うーん、別に全然いいんだけどなー。あ！それじゃあ貸し〜って事で今度俺が何か困ってたら何かしてもらおうかな？」

??「え？そんな事でいいんですか？いやでも、また会えるかもわかりませんし……」
魁翔「じゃあ連絡先でも交換しとかない？そしたらまた会えるし！」

??「それでいいのなら構いせんが…、せめてお金だけでも払いたいですけど……」
連絡先を交換しているのだがそれでも代金だけでも払おうとする。

本当に律儀な子だなー、貰えるものなんてタダで貰えばいいのに。

……ってか今更だけどこれって犯罪じゃないよな？女子中学生の連絡先を教えるも
らうなんてちよつとヤバい気もするんだけど？

魁翔「いいっていいって、その代わりまた今度なんかあったらよろしくね。それじゃ
俺ここだから〜」

そう言うときちょうど俺が降りる駅に止まったので俺は何か言われる前に電車を降り
た。

こんな風に誰かのためにたまには動いてもいいだろう。

つて事で今から目的の品を揃えてないのに部長さんの元に行かないといけないのだ、明日学校に俺はいけるのかね？殺されたりしないよな？

—————

やって参りました、地元の公園でございませう。もう時間も遅いので辺りは暗く、街灯の光がついている。子供達の影などは見られず閑散とした公園の橋にあるベンチの上で俺は待っている。

しばらくするとこちらに近づいてくる音が聞こえたので顔を上げてみると、やはり予想道理にこつち先輩がいた。

アー報告するの嫌だなー、絶対怒られるだろうなー、アーアーアー

矢澤「魁翔！目的のブツは手に入ったでしょうね!？」

魁翔「いや、ブツってそんな薬じゃあるまいし。まあはい、約束のものですよ」

そう言い俺は一つの袋を手渡す。もちろん中身は一つ足りないのだが。

矢澤「ん？一つ足りなくこれ？」

やっぱりバレしまったか。まあそうだと思いましたが。

魁翔「頑張ったんすけど最後の店だけ売り切れちやつて買えなかつたんすよなーアハハ」

にこつち先輩を笑っている俺をひと睨みすると、俺の顔を見てくる。いや正しくは俺の目をか。

俺の考えをより取ろうとするかのごとく俺の目の奥まで、網膜が見えるかのごとく覗き込んでくる。

しばらくこの時間が続くと、にこつち先輩はハアアとため息をついて額に手を置いた。

矢澤「まあ確かにスケジュール的にも無茶があつたのは本当だし今回は許してあげわ」

魁翔「え？まじつすか？」

矢澤「なによ??不満??」

魁翔「いやーなんて言うか意外だったんで。正直かなり怒られると思ったんで」

ってかあげちゃったこと言ったら確実に怒られるだろうなこれ。

矢澤「別にいいわよ、あんたもあんたで頑張ってくれたでしょうから。それよりも今日は大分迷惑かけただろうしお礼もしたいから、うちで晩御飯食べていかない？」

え？マジっすか???

11話 — お礼とまだ見ぬ女神との夏休み —

魁翔「えーと、お邪魔しまーす??」

にこ「何でそんなに疑問系なのよ?」

今俺は、矢澤家の玄関にてドアを開け中に入ろうとしていた。

だがなー……

いや、だつて緊張すんだろ!?

女の子の家に上がるんだぞ! 家族の人に何って挨拶しよーかとか、どうやったら失礼じゃないかとか色々あんじゃん!!

いや……でもにこつち先輩の家だもんな。

うん、にこつち先輩だから大丈夫だな。

まあ何処がとは言わないが、あの断崖絶壁の部位を考えれば、そんな女子として意識しないはずだ……

にこ「ちよつと、いま失礼な事考えてないわよね?」

魁翔「そ、そ、そ、そんなわけないじゃないですかーやだなーもう」

にこ「清々しいくらいに慌てっぷりね」

あぶねーあぶねー、危うく俺がにこっち先輩のセクハラ案件について考えてるのがバレるとこだったぜ。

え？ほとんどバレてるって？それは気にしたら負けなやつだ。

つとそこで部屋の奥から少女が2人こちらに向かって走ってやってきた。

??「おかえりなさいませお姉様ー」

??「おかえりーおねーちゃん！」

にこ「ただいまこころ、ここあ。今日はお客さんと呼んでるから自己紹介しなさい」
そうにこっち先輩が言う俺の存在に気づいたようで俺の目の前に来て挨拶をしてくれた。

こころ「はじめまして矢澤こころです。いつもお姉様がお世話になってます」

ここあ「矢澤ここあだよ！よろしくにいちちゃん！」

魁翔「おうよろしくな2人とも！俺は希咲魁翔だ！」

ここあ「きさき さきとつて言いづらいね！」

魁翔「まあそうなんだけど、面と向かって言われると少しくるものがあるな」

幼女にこうやって面と向かって言われるとなんか変な気持ちになるな。

決して変な意味じゃないぞ!!

大事な事だからもう一回言っとくけど決して変な意味じゃないぞ!!!

「こころ」「ダメでしょここあ！申し訳ありません魁翔お兄様」

魁翔「いや、君の言い方のほうが気になるんだが？全然君たちのお兄様じゃないんだけど」

「ここあ」「そつかあー、じゃあさき兄だな！」

魁翔「あーおつけおつけー、おれの声が聞こえない系だな。まあ別に呼び方は何でもいいけど」

「ここ」はい、三人とも玄関で騒いでないで早く中に入りなさい。それと魁翔、私は今から晩御飯の準備するから遊んでてもらっていいかしら？」

魁翔「別に俺だって軽く料理ぐらいできますし何か手伝いましょうか？」

一応お客さんという立場なのだが、何もせず遊んでいるだけつてのも気がひけるしそんな提案をしてみる。

「ここ」別にいいわよ、今日はお礼を兼ねて呼んでるんだし。それよりも妹たちの面倒を見てもらってたほうが助かるわ」

まあここで変に気を使つて言い続けてもどちらもいい思いをしないだろうしな。

魁翔「はいはいわかりましたよ。じゃあ2人ともイケメンなお兄さんと遊ぼうな」

「ここあ」「対してイケメンじゃないけどな」

魁翔 「はは、泣きそ……」

「こころ」「ここあ、こういう時はお世辞でも言うもんですよ」

魁翔 「そのくだりは目の前でされると心が張り裂けそうなんです」

幼女2人に散々貶されたせいで俺のメンタルはブレイク寸前である。

何はともあれ、にこつち先輩に頼まれたんだししつかりと遊んでやらないとなーと思
いリビングに移動すると小さな男の子がいた。

?? 「おとこのひと〜」

「こころ」「こちらが弟の虎太郎です！」

魁翔 「よろしくな虎太郎！俺は希咲魁翔だ！」

虎太郎 「さきと〜」

魁翔 「おう、いきなり呼び捨てなのはもう気にしないぞ」

矢澤家の俺の呼び方が独特なのだがまあその辺は気にしないようにしよう。

きつと気にしたらダメなやつだ……

「こころ」「ところで一つ気になっていたのですが、お姉さまとはどのような関係な
のでしょうか」

「ここあ」「あーそれ私も気になってた!?!お姉ちゃんの彼氏なの?！」

この子達は何言ってるのだろうか？俺とにこつち先輩がそんな関係のわけないだろ。

俺は別にロリコンじゃないし。

……いや、よくよく考えたらにこっち先輩は年上だったわ。

魁翔「まあそうだなー、どんな関係かって聞かれたら、ひと時のあつい時間を共に過ごした仲だな!!」

ザクツ!!

にこ「いったあー!!」

お? にこっち先輩が指でも切ったのかな? 全く危ないなーあの人は。

それにしてもあの時は本当にあついひと時だったな。2人で部室でライブを見ながら騒ぐなんて。

こころ「ひとときのあつい時間を過ごしたですか?」

魁翔「そうだな、一生懸命に棒を振ったり腰を振ったりしたな」

あそこまでハマってしまふとは自分でも予想外だったな。サイリウムを借りて振り回したり踊ったりしたのだから。

パコーン!!

魁翔「いつてえー!!いきなり頭をオタマで叩かないでくださいよ!!」

にこ「うっさいわね!!あんたは三人にどんな話をしてんのよ!!子供相手に如何わしい嘘を吹き込まないでよ!!」

はあ？この人は何言ってるんだ？おれはただ2人で盛り上がってライブ見てたのを伝えようとしただけなのに。

……あれ？もしかして……

魁翔「もしかしてですけどにこっち先輩なんか勘違いしてませんか？」

にこ「え!?なにがよ!!あんたが訳の分からない話したんじゃない!!」

魁翔「だから、2人でライブの映像見てあついひと時を過ごしてサイリウムとかの棒を振って踊ったりした事を話しただけっすよ?」

あれ？俺こんな感じで話してたよな？ちよつとニュアンスは違うがしれないけど大体は合ってるはずだ。

ってかにこっち先輩が俯いてプルプルしてんだけど大丈夫かね？

プルプルしすぎて着信の入ったスマホみたいなんすけど。

にこ「あんたの言い方が紛らわしいのよーー!!!」

パコーンと2回目の気持ちいい殴打音が鳴り響いたのはみなさんの予想どうりだ。

魁翔「全く酷い目にあつた」

にこ「あんたが変な感じで言うのが悪いんですよが」

魁翔「いや、俺は悪くないでしょう。勘違いしたにこつち先輩が悪いんですよ99%」
にこ「ほぼ私のせいじゃない!!」

だつてそうでしょ。俺的には全然紛らわしい言い方なんてしたつもりないし、間違つた解釈をしたにこつち先輩が悪い。

こういうのは自分を悪いと思つたら負けなのである!?!?

にこ「それよりもご飯できたし準備を手伝つてちょうだい。こころとここあ、虎太郎もこつち来てちょうだい」

こころ、ここあ、虎太郎「はい!」

俺たち4人も台所の方に向かい手伝いをする。今日のご飯はなんと!!
カレーです。

まあ定番だな。俺も好きだし別にいいんだけどな。別にお礼と聞いていい物を楽しんでた訳じゃないんだからね!!

俺のツンデレとか誰トクだよ……

まあそれは置いといてなかなかいい匂いをするな。

みんながカレーを皿について準備をできたので、席について食べようと思ったのだが、

思ってたのだが……

魁翔「俺の隣に座ってるこの人誰っすか??」

矢澤母「はーい! 自己紹介しまーす! 矢澤にこの母親の矢澤里美でーす! 以後お見知り置きを!」

いやっクセつよ!!

魁翔「あー、にこ先輩の母親さんですか。今日はいきなりお邪魔してすみません」

矢澤母「別にいいわよ! 息子が増えたみたいで嬉しいし、お義母さんって呼んでくれていいわよ!」

魁翔「ちよつとおかあさんの言い方に変な感じがあつたんすけど!？」

矢澤母「大丈夫よ! 2人が結婚してくれたらいずれそうなるんだし!」
にこ「ママツ!？」

本当にこの人はクセ強すぎだろ!

矢澤母「ほら冷めちやうし、家族団欒でご飯にしましよ!」

魁翔「いや、俺家族じゃないんすけど…」

矢澤母「い、ず、れ、よ!」

あーもうだめだ、完全にペースが持ってかれてる。

もう諦めて食事をするしかないわ。

矢澤母「はいじゃあみんなで、

魁翔「いただ

矢澤家「につこにつこにく〜く〜」

魁翔「いや!!なんでだよ!?!?」

魁翔「おおーにこ先輩のカレーうまいっすね!!」

にこ「当たり前でしょ!にこクラスのアイドルになると料理も完璧なのよ!!」

矢澤母「ふふっ!私がこの子に教えてあげたんだから当たり前よ!!」

なんかこの子にしてこの親ありって感じだな。あの強気で自信を持った性格は親譲りだったんだな。

矢澤母「それにしてもにこちゃんが男の子を連れてくるなんて本当に珍しいわね、今日はできちやつたことでも報告しにきたのかしら?」

魁翔「あなたはさつきから何を言ってるんですか……」

いい加減疲れて来たよ……

別に悪い人じゃないんだけど、相手をしてるだけで生気が吸い取られてる感じがする。

にこ「別になんでもないわよマ、マ……」

コホン！お母さん。ちよつとお札にご飯でも振る舞おうかと思っただけよ。こいつ一人暮らしだし」

矢澤母「へえー魁翔君は一人暮らしなのね。大変じゃないの??」

魁翔「まあ大変ですけど、正直ご飯なんて食べたらいいので」

矢澤母「それはダメよ？育ち盛りなんだからしつかりと栄養があるものを食べないと！なんならウチに毎日来てもいいわよ!!にこちゃんが喜ぶし!!」

にこ「別に喜ばないわよ!!」

魁翔「ハハハ…まあそこまで迷惑かけるわけにもいかないし大丈夫ですよ」

矢澤母「別に一人分増えるぐらいだったらそこまでは変わらないし大丈夫よねにこちゃん？」

にこ「まあそうだけど…」

なんか相当無理やりだなーと思いつつも、やっぱり誘いを受けるわけにはいかないだろう。

魁翔「うーんそこまで困ってるわけでもないですし大丈夫ですよ。またたまには来ようかと思えますけど」

矢澤母「あら！それは嬉しいわね！もうウチに住んだらどうかしら!？」

にこ、魁翔「絶対いや!!」

矢澤母「おぉーもう息びったりね!!」

にこ、魁翔「そんなことないわよ（です）!!」

そこからもしばらくはにこっち先輩の母親に散々いじられたので俺のメンタルはブレイクされたよ……

にこ「はぁーすまなかつたわねお母さんが……」

魁翔「別に大丈夫ですよ、何だかんだ楽しかったですし。まあ疲れましたけど……」

2人揃ってはぁーと息をついて、現在いるのは玄関である。

魁翔「それじゃあそろそろ帰りますよ、今日はありがとうございました」

にこ「別に、そもそも私が頼みごとしたんだからむしろ私の方がお礼を言わないといけないわね」

魁翔「まあそうですね、はやくお礼を言ってください」

にこ「手のひらの返し方がすごいわね!!」

だってよくよく考えたら、俺相当被害を被ってるわけですよ。なのに何で俺はお礼を

言つてたんだか。

にこ「まあ今日はありがとね、それと……さっきのことだけど……」

ん？急にモジモジしただけだ？さっきつてことは……

魁翔「あー結婚とかのことですか、しませんよ？」

にこ「違うわ!! つか何で私が振られたみたいになつてんのよ!!」

魁翔「え？違うんすか!？」

にこ「違うわよ!! まったくもう……さっきのつて言うのは……そのまたご飯ぐらいならい
つでも作つてあげるんだから……」

そう! ころとここあがあんたのこと気に入つてんだから遊びに来なさいよ! そし
たらまたご飯作つてあげるんだから!!」

魁翔「おおーこれは見事なツンデレですね」

にこ「誰がツンデレよ!! とにかくあの子達もあなたに会いたいだろうから特別にまた
来るのを許可してあげるわ!!」

魁翔「へいへいありがたき幸せですね」

本当にいちいち偉そーな先輩だなこの人は。まあこの人らしいっちゃらしいんだけ

どな。

魁翔「それじゃあ今度こそ帰りますよ」

にこ「ええ、呼び止めて悪かったわね。おやすみなさい」

魁翔「おやすみなさい」

ガチャリとドアが閉まり俺はマンションを後にした。

静まり返った闇の中で、俺は1人家への帰路を辿っていく。

—————

あれから時間も過ぎ、時は7月を迎えていた。

魁翔「あつい…暑すぎる…」

園田「だらしないですよ魁翔。学校まで我慢なさい」

穂乃果「海未ちゃんこれはもう無理だよ…」

南「魁翔くん、穂乃果ちゃん大丈夫??」

現在は朝ということで、何も代わり映えしない通学路を4人で歩いていた。

いや代わり映えしないわけではないな。季節が変われば風景も変わり、聞こえてくる音も変わってくる。

ただし夏は暑いしうるさいし俺は嫌いなんだよ……

魁翔「つてか何で海未はそんなに平気そうなんだよ?」

園田「私ですか?それは、心頭滅却すれば暑さなんて感じないに決まっていますから」

魁翔「こいつ本当に人間か?」

穂乃果「うーん分からない」

誰が化け物ですかとか海未の方から聞こえてくるが、きこえないーきこえないー

穂乃果「そうだ!?!」

魁翔「どうした?アホの穂乃果さんや?」

穂乃果「アホじゃないもん!つてか魁翔くんも数学はアホじゃない!!」

魁翔「何を言っている総合的に見れば俺の方が遥かに上なんだからアホなわけがない

!」

穂乃果「ううー！事実だから言い返せない!!」

ハッハッハッハッ!! 決定的な差が開いてるのだから俺がアホなんてことはあり得ないのさ!!

だからね穂乃果さんや、そんな上目遣いの涙目でこちらを睨まなくてももらえますか？
ちよつと可愛いと思つちやつたじゃありませんか。

南「それより穂乃果ちゃん、何か話があつたんじやないの??」

穂乃果「そうだ！魁翔くんのせいで忘れてた！」

魁翔「いや別に俺のせいじやないじやん」

穂乃果「海行こうよ!!!」

魁翔「そうですか、無視ですか。

………はい？」

今の聞き間違いかな？

園田「うみ、ですか？」

穂乃果「そうだよ!! ううーなんではやく気づかなかつたかなー!!」

南「うん！私も行きたい！」

いや海とかまだ7月だしはやいんじやねーの？まあ行つたことねえし分かんねえけど。

まあとりあえず、

魁翔「そうか、じゃあ三人とも楽しんでこいよ」

三人「えっ!!」

魁翔「えっ!! っつてなんだよ?」

びつくりするじゃねーか、そんなに大きな声で三人で言われると。

穂乃果「魁翔くんは行かないの?」

魁翔「え? 逆に行かなきゃいけないの??」

えええーと、また三人の声が響いた。

魁翔「いや何でそんなに驚いてんの?」

穂乃果「だって海だよ!! あのと青くて冷たくて塩辛い海だよ!!」

魁翔「いや知ってるから、そんな紹介しなくても知ってるから」

南「魁翔くんは海が嫌いななの?」

魁翔「いや別に、っつか暑いから外に出たくないだけ」

ヒューと風が吹き、三人からの冷たい視線を受けてしまった。

え? そんなに俺悪いこと言ったの?

穂乃果「よーしじゃあ4人で海に行こうー!」

あれ勝手に決定ですか? 俺には選択肢なんて与える必要なんてないっていう遠回し

な嫌がらせですかね？

まあそんな意図はないのだろうけど、

魁翔「でも実際問題行っても俺体力ないから泳げないぞ??」

三人「あつ!……」

おおー、一気にテンション下がっちゃったな。ヒートアップしたりダウンしたりとみんな忙しいな。

穂乃果「でもでも、泳げなくても多分楽しめるよ!!多分!!」

魁翔「多分を強調しすぎで全然説得力がないんだけど」

南「ことりも泳ぐの苦手だから魁翔くんと一緒に居てあげれるから大丈夫だよ!!」

園田「そうです!!私が魁翔をおぶっても泳げますから問題ありません!!」

それは男の子的には恥ずかしいので遠慮したいのですがね。

それにしてもそんなに俺に来てほしいものなの？

魁翔「別に俺が行かなくても大丈夫なんじゃないの?今まではそうだっただろ?」

穂乃果「でも!!でも……今年も魁翔くんと友達になれたんだからいつぱい思い出作り

たいし!……」

ああー!!もうなんちゆう悲しそうな顔してんだ!!

もうここまで言われちゃできる選択肢なんて一つしかないだろ!

魁翔「はあーもうわかったよ、行ってやるから」

そう言うと、三人ともパーと一気に笑顔になってくれて喜んでいる。

早速と言って、いつ行くかなど俺の前で話し合っているのだが穂乃果が色んなことを言いすぎて全然話しがまとまっていなわ。海未ががんばれよ。

そんなことを考えているとことりが俺の隣に来て、

南「ありがとうね魁翔くん！穂乃果ちゃんのお願い聞いてくれて！」

魁翔「別にいいよ、たまにはこう言うのも楽しそうだしな」

南「でも本当に無理はダメだよ？」

魁翔「分かっているって、まあ多分日陰で三人が遊んでいるのを見させてもらうよ」

南「ふふっ！ありがと！あー今年は魁翔くんもいるし楽しみな！」

魁翔「まあ俺も楽しみにしてるよ」

2人で顔を見合わせてまた笑いあった。

どこまでもセミの声が響き渡る通学路の中、4人の影が学校へと続く道へと向かっていつている。

今年の夏は今までの中で忙しそうになりそうだが、それ以上に楽しくなりそうでもあ

る。

こんな感情は今まで抱いたことなんてなかったが、案外悪くないかもと思いつつながら、これからも彼女たちと一緒にいて大丈夫なのだろうかという不安が入り混じる中、俺は今日も1日を過ごしていった。

12話 〈日常1〉

勝ちたい

魁翔 「ババ抜きで勝ちたい？」

園田 「はい！そうなんです！」

今、放課後の教室で海未と2人でのいるのだが唐突にこんな事を言い出した。

いや、話す事自体は唐突ではないのだがな。休み時間中に、昼休みに話したいことがあると言われて教室に残っていたんだけど。ウキウキワクワクしながら待ってたんだけどな。

まあ海未だし、そんな甘々な展開なんて期待はしてなかったんだけどな。けれど話しの方向がまったくの斜め上だったのでとても驚いた。

魁翔「てか話しの流れがまったく見えないんだけど??何で急にそんなこと言い出してんの?」

園田「穂乃果が今度海に行きたいと言い出したでしょう?」

魁翔「ああそうだな。でもなにか関係あるか?」

園田「遠出をする時は電車などに乗った際は、必ず暇な時間ができるでしょう?」

その時に穂乃果はトランプを持ってきてババ抜きをする事があるのですが、私はそれに勝てたことがないので!!」

ええー?トランプなんてただの運ゲーじゃん?絶対に勝てないとかありえないでしよ。

魁翔「そんなただの偶然じゃないのか?」

園田「ですが!今まで20回ぐらいは負けてるんですよ!!」

魁翔「どんな確率だよ!!」

もうそれ相手がイカサマでもしてんじやねーのか?」

園田「ですが…穂乃果とことりですし……」

魁翔「あー…じゃあそれは多分ないな」

その2人ならイカサマなんてしないだろうし、つてかそんな器用な真似ができなそーな気もする。

なにより海未は2人を疑うことなんてしたくねーだろうな。

魁翔「じゃあ海未が相当運が悪いだけじゃねーのか？それだつたらどうしようもねーぞ？」

園田「それはそうなのですが……、ですが何とかして一矢報いたいのです！」

魁翔「なるほどなあー……………」

俺は顎に手を当てて考える。

え？何でそんな考え方するかって？

そりゃ頭よさそーに見えるからに決まってんじゃん！

それにしてもババ抜きで勝つ方法かく、それこそ運以外で勝つとしたらイカサマしかない気がするんだけど？

運を良くする方法とかそんなのあるわけ…………

魁翔「あ、あの人がいたわ」

魁翔 「つて事で何かありますか希先輩？」

東條 「いやそれだけ言われても何もわからへんつて…」

魁翔 「じゃあ、あれがカクカクシカジカなんですよ」

東條 「なるほど…その海未ちゃんがトランプで勝ちたいと…」

園田 「はい…そうなんです…」

魁翔 「え??今ので通じるんすか??」

何ですか??最近の女子高生はカクカクシカジカで全部伝わるのが普通なの!?

カクカクシカジカで通じるとか、まじ希先輩パネエーつす。

ってか冗談抜きで怖いんですけど、まじで希先輩テレパシーでもできるのか??
海未も平然としてないでいつも見たいに突っ込んでよ!!

東條「うーん運気を上げるのも簡単じゃないけんなー……とりあえず園田さんこれを持って見て」

園田「これは……トランプ？」

魁翔「ババ抜きを実際に見るって事ですか？」

東條「そうしたら何か見えてくることもあるかもしれないんで？」

なんか含みのある言い方をしているが、まあ確かに俺も確認してなかったから見て見るのもいいだろう。

魁翔「いや……これはなんとというか……」

東條「スピリチュアルやね♪」

園田「なんで勝てないのですか!!」

結果から言うと、5回して海未は全敗だ。

つてか3人でやってるのに、希先輩が最初の時点でカードを全部無くなるので実質2人での勝負だった。

しかもそんなことが5回中3回とかもうチートだろ。まじで希先輩の運がチートな件について。

まあ問題の海未なのだがこれについては負ける原因がすぐにわかった。

顔に出すぎなのである。ババを取られそうになると安心した顔になるし、ババ以外を取られそうになると不安そうな顔をするから周りからしたらモロバレである。

しかしなーどうしたのか。それこそ希先輩みたいに速攻で抜けるしか勝ち目がないか？

魁翔「どうします希先輩？これは無理じゃないですか?？」

耳元に口を近づけて喋って見たのはいいのだが、これまたなんとも言えない、いい匂いがしてきたのですぐに距離を取る。

東條「どうしたん近づいたり遠くに行ったり？」

魁翔「い、いやなんでもないしゆよ」

動揺なんてしてないぞ！動揺なんてしてないから落ち着け俺！！

東條「まあ簡単な方法は一つあるで」

園田「本当ですか!？」

東條「はい、この中に入ってるやつを付けてトランプをやってみるとええでー。ただし！トランプをやる時まで開けないこと！」

魁翔「変なもの入れてませんよね?？」

東條「少なくともそれがあれば五分五分ぐらいの勝負にはなると思うで」

へえーそんなこと出来るもんなんて一体なんなんだ??

ってか一つ気になったんだが、

魁翔「何でその勝つための道具を今持ってるんすか??」

東條「フッフツ?スピリチュアルやね!」

こっわー、相談する内容が最初からバレてたって事ですか?そうですよね?
最近の女の人は読心能力がデフォルトメなんすかね?
なにそれズルイ。

特訓

今日も今日とてにこっち先輩の謎の呼び出しをくらい部室へと向かっているところである。

部室の前に着いたので早速ドアを開けて中へと入る。

魁翔「失礼しまーす」

矢澤「よく来たわね！」

魁翔「そりやあ呼び出されましたからね、つてかまたこのメンツなんすか？」

東條「魁翔くんこんにちわ〜」

魁翔「もしかしてにこっち先輩俺ら以外に友達いないんすか………?」

矢澤「そ、そ、そんなわけないでしょ！私クラスのアイドルになると腐るほどいるわよー！」

魁翔「え？にこっち先輩の友達には腐った人がいるんすか!？」

矢澤「違うわよ!?!そんなわけないでしょ!!」

いやまあそんなぐらい言葉の意味は分かるんすけどね。それにしてもまたしてもこのメンツか〜。正直嫌な予感しかないけど。

魁翔「それで今日は何の用ですか？またお使いですか？」

矢澤「違うわよ、今日はこのスーパードールの特訓につきあわせてあげようと思ってる!!」

魁翔「よーし、じゃあ今日はお疲れ様でしたー!!」

やはり面倒ごとだったので俺は即刻逃げるを選択した。

矢澤「待ちなさい！」

魁翔「グエツ！」

そしたら速攻で服の襟を掴まれて失敗してしまった。つてか服伸びるし苦しいしこ
ういうのはやめて欲しいんですけど。

東條「まあまあ魁翔くん付きあつてあげたらええやん？」

魁翔「ええーメンドクサイんですけど」

矢澤「この私の特訓に付き合えるんだから光栄に思いなさい！つて事で行くわよー

!!
」

おおーと拳を一人でにこつち先輩が上げて雄叫びをあげていた。いや、何故か希先輩もノリノリであげているんだけども。

あゝ面倒な事がなきやいいなと思いつつ部室から出て行く二人に俺は着いて行く。

矢澤 「つてことでまずはボイストレーニングよ!!」

魁翔 「ただのカラオケですね」

東條「そうやね、ただのカラオケやね」

矢澤「さあ、得点で勝負よ!!」

魁翔「いつから勝負になってたんですか……っつか嫌ですよシンDOIし」

実際全力で歌ったりするとシンDOIからなーあれ。一回一人でカラオケ来た時にア
ニソン熱唱したら一曲で死にそうになつたからな。

あの時は、三途の川の向こうにおじいちゃんご見えたなー（棒）

矢澤「さあ張り切って行くわよー!!」

矢澤 「ふふん！今のところは私が一位ね！」

東條 「92点なんて勝てっこないって……」

魁翔 「つてか絶対練習してるでしょあんた」

矢澤 「え、にこ、何のことか分からなくい♡」

クソこの人め！こんなに殴りたくなつたのは久しぶりだな。まあ殴ったら仕返しが怖いのではないけど。

そのこのビビリとか思った君！仕方ないだらおれの身体能力じゃ殴っても大したダメージもないだらーしな！

矢澤 「つてか私と希を歌わせといて自分だけ歌わないつもり？」

魁翔 「いやーだつてシンドイだけじゃないっすか」

東條 「まあまあ、私も魁翔くんの歌が聞いてみたいと思うけど」

魁翔 「まあ別に良いですけど、ただし一曲だけですよ？それ以上は死にます」

二人とも俺の言っている意味が分からないのか首を傾げているが、こればかりは事実なのでしょうがない。

さてと、それじゃあ今日は最近ハマってた異世界転生系の某アニメのOP曲でいきま
すか!!

どうでもいいけど、あの兄弟チートすぎだよね？人間なのいろんな種族とのゲーム
にことごとく勝っていくんだもんね！

魁翔「つよし!!それじゃあゲームを始めようか!!」

矢澤 「きゅ、96点ですって……」

東條 「おおーこれはすごいなー、つても……」

魁翔 「はあ……ハア……はあ……ああー死ぬ……」

矢澤 「一曲歌っただけでどんだけダメージ受けてんのよ!!」

だつてしょうがないじゃん、心臓弱いんだから全身に酸素が回らないんだよ!!
まあそれにしても良い感じだったな今日は。

いい最期だった……

魁翔 「我が生涯に悔いなし

ガクツ……」

東條 「あ、倒れた」

矢澤 「どんだけ体力ないのよ!」

おれが意識を回復するまで2人でまた歌っていたようで2人の歌声で目が覚めた。そしておれが眼を覚ますと次の特訓だ〜つてにこっち先輩がいい次はゲーセンへと連れてこられていた。

いや、何でゲーセンなの？

矢澤「次はこのアポカリプスモードエキストラでダンス勝負よ!!」

魁翔「いやだからトレーニングはどこにいったんすか？もうただの放課後に遊び歩いてるだけじゃないっすか」

東條「へえーこれでダンスができるん？」

希先輩に至ってはもはやにこっち先輩の話すら聞いてないという。

魁翔「希先輩見たことないんですか？」

東條「うん。こういうところにはあんまりこうへんけんな」

矢澤「そうねえ……まあ取り敢えず私が最初にやるから2人はそこで見てなさい」

魁翔「了解です隊長！」

矢澤「誰が隊長よ!!」

そういうと早速お金を入れてにこつち先輩がゲームを始める。

おおー自信満々で挑んでくるだけあつて相当うまいな。つてか初心者俺らができるわけねーだろこれ。

勝負にすらならないと思うんですけど。

まあそれ以前に俺がやったら確実に倒れるだろうな。笑

東條「へえーにこつち上手やなー」

魁翔「絶対にやり込んでますよあの人」

東條「まあそうやろーね、それにしてもにこつちは今日は楽しそーやね　フフツ」

魁翔「別にいつも通りでしょ？」

東條 「いやいやそんなことあらへんで？教室ではいつつも静かにしとるし」
魁翔 「え？そうなんすか?？」

てつきり教室でもうるさくしてるもんだと思ってたんだがな。あの人が静かにしてるとことか想像がつかないんだがな。

東條 「魁翔くんはにこつちが一人で部活している理由知ってる？」
魁翔 「他のメンバーが辞めていったとしか聞いてないですけど」

東條 「そっかー話してないんか……………」

消え入りそうな小さな声だったが確かに俺の耳には届いていた。
しかし前に本人が言いくそうにしてたしやっぱり何かあるのか。

東條 「ううん、魁翔くん!!」

魁翔 「急にどうしたんすか大きな声出して??」

東條「これからもこつちと仲良くしてやってな？」

矢澤「やったわよー!!見なさい、Aランクよ!!」

そこでちょうどゲームが終わったのか走りよつてきたにこつち先輩が自慢をしてくる。

そりやあやり込んでるだろーしいい結果が出るでしょーね。

魁翔「まあ本人が逃がしてくれなさそうなんでしょうがないですね」

東條「…………フツツ!魁翔くんは優しーな」

矢澤「ん?二人とも何の話してんのよ??」

東條「別にこつちの話をしたただけやで?」

矢澤「それは別にじゃないでしょう!なんか変なこと言ったんじゃないでしょーね!」

東條「別に大したことは話してへんで」

矢澤「本当でしょーね!!」

つくづくこの二人も気の合う同士なんだと思う。喧嘩するほど仲が良いとはよく言ったもんだと思う。

まあ別に希先輩に言われたからじゃやないけど、にこっち先輩といる事自体は楽しいから向こうから拒絶しない限りは俺から離れるようなことはしないだろう。

かと言つて深く踏み込むこともできないんだだけだな。いや、しちやいけないんだ。

まあ俺がどうこう言おうと結局はこれからもあの先輩に振り回されるんだろーなと思うと、思わず頬が緩んでしまう。

矢澤「何あんた笑つてんのよ、気持ち悪いわねー」

魁翔「言葉の暴力がすごくて、メンタルが破壊されるわこれ」

—————

お買い物

穂乃果「魁翔くんは水着は持ってるの??」

魁翔「うーん多分ないな、高校の授業で使わないし持ってないな」

穂乃果「よーしじゃあみんなで購入に行こう!!」

魁翔「えっ??」

穂乃果「へっ??」

いやいや何言っちゃってんのこの子は??女の子と一緒に水着を買いに行くなんて俺には刺激が強すぎるんだよ。俺の聖剣がエクスカリバーしちやうよ?

まあそこは流石に冗談だから、みんなお願いだから引かないでね？

??
つてか水着買いに行くのに男子を誘うとか無防備過ぎませんか？なにこれが普通なの

非リア充の俺には理解しかねますな。

魁翔「いやいや俺を誘う理由あるか??」

穂乃果「うーん……なんとなく!!」

なんとなくかよ!!まあ穂乃果だしそんな事だと思っただけ。

それにしても何とかして断る理由を見つけないとな。

魁翔「男の俺がいたら選びにくいだろうし三人で行ってこいって」

穂乃果「なんで魁翔君がいたら選びにくいのか??」

あーもうこの純粋な子は！

魁翔「ほら、海未とか俺がいたら恥ずかしくて選べなさそうだし」

園田「べ、べつに恥ずかしい訳じゃありません!!ただ……ちよつとアレなだけです……」

いやアレってなんだよ!!どれなんだよ!!

魁翔「ほらっ!ことりも俺がいたら選びにくいだろ??」

南「うーん、別に私は大丈夫だよ!魁翔くんなら平気だよ!」

そこまで信頼されてることに喜ぶべきなのか悲しむべきなのかわからない……
つてか誰も嫌がらないのかよ、もう女心なんて分からないよ……

穂乃果「よーしそれじゃあ今日の放課後はみんなで購入物だー!!」

このとき俺の死刑宣告が通告された。

if story ~ NIKO HAPPY BIRTHDAY ~

NIKO HAPPY BIRTHDAY
if story ~

魁翔「にこっち先輩を一日連れ出して欲しい??」

矢澤母「そうなのよ、その日はにこちゃんの誕生日だから準備している間は何処かに連れて行って欲しいの！」

だ、か、ら、にこちゃんの彼氏である魁翔くんには一緒に遊んできてもらいます!!」
魁翔「いや、いつから彼氏になったんすか…」

現在俺はにこっち先輩のお家にお邪魔させてもらって夜ご飯の方をご馳走してもらった後である。いや、いつ食っても相変わらず美味しいもんだわ。

にこっちは先輩はいまお風呂に兄弟たちを入れており、今はにこっち先輩のお母さんと2人きりで話している。

学校でご飯を食べにこいつて声をかけられて、最初誘われた時はもちろん断ったのだが、どうしてもこつち先輩のお母さんが話をしたいとのことなのでこうして来てみた。

そして何でもこつち先輩を家から遠ざけて置いて欲しいので一緒に遊んできてとお願いされたのである。

はい状況説明は以上!!

矢澤母「はい、ここに遊園地のチケットがあります!!これで遊んできてもらったら2人がデートできるし、時間も稼げるし一石二鳥ね!!」

魁翔「拒否権は……?」

矢澤母「もちろんないわ♡」

魁翔「ですよねくく(棒)」

まあそんな事だろうと思いましたが。つてかこの人準備良すぎだろ、チケット用意してるとか。

はあー休みの日ぐらい家でゴロゴロしておきたいんですけどね。まあ暇だから良いんですけど。

魁翔 「くそく何て声をかけたらいんだ？」

放課後となり、俺は今、アイドル研究部のドアの前で唸っている最中である。もちろんお母様から言いつけられたとうり遊園地に行くのを誘いにきたんだけど……

ってか！ 決してへんな人ではないのでソコの通りかかっている女子生徒の君、コソコソと話すのをやめなさい！

魁翔 「今度の休みに一緒に遊園地に行きませんか!!、なんか直球すぎるな……
次の休み俺と一緒にデートしないか?、いや誰だよ!!」

ってかデートっていう単語使うのは恥ずかしすぎるわ!! あーもうコレは無理なやつですな分かります。帰りましょう。

矢澤「あんた何してんのよ……?」

魁翔「うおー!!ビックリした!!」

もう諦めて帰ろうと思っていたら、不意打ちだっからびびったわ。

てつきり部室の中にもう居るもんだと思ってたし、いきなり背後から声をかけられたことに相当驚いた。

魁翔「き、奇遇ですね先輩!こんなところで会うなんて!!」

矢澤「いやにこの部室だし毎日来てるんですけど……」

魁翔「あー、そういえばここは部室の前でしたねー!!気づきませんでしたわ!」

俺の不可解な態度を不審に思ったのかにこっち先輩はジト目で俺を見てくる。

そして当然俺は目を合わせることが出来ず、明後日の方向に視線が泳いでしまう。

矢澤「あんたどうしたの……?とうとうおかしくなったの??」

魁翔「それをにこっち先輩に言われるのは心外なんすけど……」

矢澤「それどういことよ!!」

はあーと、にこつち先輩は態とらしく大きいため息をついてみせる。

矢澤「で、なにか用事があつたんじやないの？ さつきからこの辺をうろついてたみたいだし」

あーそう言えばそうだったな、すっかり忘れてたわ。 つかもう忘れたままって事で帰っちゃダメですかね？

はい嘘です、ダメですよ。 帰ったらお母様に何て言われることやら。 俺は意を決して口を開く。

魁翔「にこつち先輩って次の日曜は暇ですか？」

矢澤「えつと…その日は…ちよつと用事があるから」

え？ まじつすか？ これ詰んでるんヤツじやないつすか？

つか事前にお母様によると、その日は家において誕生日の準備を手伝ってくれる予定だから、暇なんだと思つてたんすけど。

あれ？もしかしてその準備の件にて断られてる感じっすか？

魁翔「いやいや、お母様にはその日は何も無いって聞いてますよ？」

矢澤「何でお母さんに聞いているのよ!! まあ確かに何も無いのはないんだけど…ってかお母さんって…:変なこと企んでんじゃないでしょーね？」

やべ、口滑らしたわ

魁翔「まあまあ落ち着いて落ち着いて、そしてこれを受け取ってください」

そう言いにこっち先輩にチケットを握らせる。よし後は喋って逃げるだけだ！

矢澤「何よこれ…:遊園地のチケット？」

魁翔「そうですよ、それじゃあ次の日曜はお出かけということなので10時にはお迎えに行くので家で待っていてくださいね。それではさばらばだ!!」

矢澤「あ！待ちなさい!! 私まだ了承してないでしょーが!!」

後ろからにこっち先輩の叫び声が聞こえてくるが俺は振り向かず、颯爽と逃げて

いった。

魁翔 「はあ……ハア………死ぬ……」
いやマジでなんで俺は走って逃げたんだ？
取り敢えず動けないので教室で寝ていこう……

矢澤「全く何だったのよあいつは」

私はいま部屋のベッドの上で、アイツから貰ったチケットを眺めながら放課後の出来事について思い出している。

授業も終わり部室に向かっていると、部室の前に頭を抱えた変なやつが一人。つてか見知った顔だったので、何してんだこいつって感情がまず沸き立ってきた。

話を聞くとなんでも、次の日曜に私を遊園地に誘ってきたようだ。

全く！大人気のスーパースーパードルってのはお誘いが多くて困っちゃうわ！！

まあ誘ってきた理由は大体察しはついてるのだが、ママ……じゃなくってお母さんが関わってきてる理由はよく分からない。

なのでその辺は多少警戒しておくのが必要だ。

矢澤「それにしても遊園地か、いつ以来だろう……」

自分が覚えてる記憶では相当昔のことなのでいつ行ったのかは、いまいち分からな
い。

お母さんも仕事で忙しくて、私も家の手伝いなどで忙しいこともありあまり遊びに
行った記憶はない。

別にそれが不満かって聞かれるとそういうわけでもない。家族のみんなと一緒にい
る時間は何よりも大切なものだから。

それでもやはり、行ってみたいなーとはいまの私でも思う。

まさかその夢がこんな形になって叶うとは思わなかったけど。

それにしても魁翔と遊園地か。あの私のことを先輩とは思ってもないような態度で
太々しく接してくる、私の仲の良い唯一の男子生徒の後輩。一緒に行くこと自体は嫌で
はない。むしろ楽しみでもあるぐらいかもしれない。

あいつと居ると我慢なんてせず、いつもの自分でいられるので結構気に入ってるの
だ。

でも男子と二人つきりで遊園地なんて……

矢澤「それってデートじゃない……!」

今更ながら気づいた私は、部屋のベッドの上で一人顔を赤くしている。

でもまあ魁翔だし、あんな奴に恋愛感情なんて持つわけないんだからね!!

……でも、もしアイツと付き合ったら………?」

矢澤母「あら♡?にこちゃん幸せそうな顔してるけどどうかしたのかしら♡?もしかして魁翔くんの事でも考えてた?」

ハア
!?!?

矢澤「マ、ママ!?いつからそこに!」

矢澤母「うーん、ベットの所でチケットを見始めたぐらいかしら?」

矢澤「相当前からじゃない!」

矢澤母「だってにこちゃんが呼んでも返事してくれなかったし」

矢澤「え、それって本当……？」

矢澤母「ええ、どうしたのかと思つて入つてみたら難しい顔したり嬉しそうにしたに
こちゃんがいて可愛かつたわ〜♡」

矢澤「可愛くない!!つてかママ、魁翔に何か言つたでしょ!？」

矢澤母「ええー別に、誕生日の日付とその日の予定ぐらいしか話してないわよ？」

ハアーとため息つきながら、やつぱりと思う。この件にはやはりお母さんが一枚噛んでたのかと思い、思わず頭を抱えたくなる。

矢澤母「それにしても、魁翔くんから誘われたのがそんなに嬉しかったのかしら♡？」

矢澤「なあ!?!そんなわけないでしょ!!アイツがどうしてもつて言うから行くだけだから!!」

アイツに誘われたからつてそんな嬉しいわけないでしょ!これは……その……ただでチケツトを貰えて行けるのが嬉しいだけだからね!!

矢澤母「分かったわよ、その日はちゃんとオメカシして行くのよ？」

矢澤「ハア、分かってるわよ…」

それだけ言うとママは部屋から出て行ってしまった。

これで今回の事がいくつかハッキリした。私の誕生日にサプライズで遊園地に連れていこうとアイツが考えたのだろう。

だが、アイツがそこまでの事をするとは思えないのだが、まあ考えても仕方ないだろう。行くときにまた話を聞いてみたらいいだろう。

次の日曜まであと数日

私は胸を高鳴らせながら過ごしていたが、自分自身ではその自覚もなく時間が過ぎていった。

今日はいよいよにこつち先輩の誕生日だ。

えーと財布よし、ケータイよし……ん？他にいるもんってあるのか？

まあいつか、思いつかないってことはそんな大事なものは忘れてないはずだ。まあ無かつたら無かつたで、別に高いものじゃなかったら買えばいいしな。

それじゃいざ戦場へ!!

ピンポーン

魁翔「にこつちせくンぱいあくそびくましょく」

ガチャリとドアが開きにこつち先輩が顔を出してくる。

矢澤「あんた朝からテンション高いわね…、まあスーパーアイドルのニコニーと遊園地に行けるのだから当然ね!!」

魁翔「あーはいはい、早く出てきてくださいよ」

矢澤「テンションの落差がすごいわね!?!」

一通りツツコミ終わるとため息をつきながらにこつち先輩がドアを開け出てきた。どうでも良いが俺の周りの人はため息ばかりついてるな、主に俺のせいかな。

にこつち先輩が出てきてその服装に目が奪われた。ピンクと紫のチエツクのスカートに、上はフリルなどが多く付いた白色のシャツを着ており、それに合わせているのか何時もの髪を結ぶリボンはピンクではなく白色となっていた。

矢澤「なによ…人のことジロジロみて」

俺がにこつち先輩を見入ってるのが気に入らなかったのか、少し不機嫌そうに聞いて

きた。

魁翔「ああーいや馬子にも衣装だなんて思いました」

矢澤「誰が孫よ!!私の方が年上でしょ!!」

魁翔「え?」

矢澤「え?じゃないわよ!」

あ、もしかしてにこっち先輩、馬子と孫で勘違いしてんのか?まあ確かにあんまり成績とか良くなさそ……………

魁翔「つて痛いんすけど?」

何故か足を踏まれてグリグリされてんすけど。

矢澤「あんたがいま失礼なこと考えてたからでしょうが!」

だから俺の周りの女の子は読心術身につけすぎだって。もうどこでそれ習えるんす

かね？

そんなくだらない事を考えていると、部屋の奥からにこつち先輩のお母さんが出てきた。

矢澤母「あら、魁翔くんおはよう。今日にはこちゃんと一杯遊んできてね〜」

魁翔「はい、今日はちよつとお借りしてきますね」

矢澤「人をもの扱いしないでよ!!」

矢澤母「あらあら、そのままテイクアウトしちゃつても良いのよ?」

矢澤「ちよつとママ?!?!」

魁翔「いやー、それはちよつと……」

矢澤「何でアンタは欲しがらないのよ!!欲しがりなさいよ!!」

魁翔「え?にこつち先輩、俺に貰って欲しいんすか?」

矢澤母「あらあら、にこちゃん大胆になつたわね〜」

矢澤「あぁー!!もう魁翔行くわよ!!」

にこつち先輩はそう言うのと俺の手を引き進み始める。

後ろからは行ってらっしゃいと声が聞こえてきて、にこつち先輩も声を荒げながら

も行ってきますと返事をしているあたり、そんなに起こっているわけではないだろう。耳が真っ赤に染まっているのを見る限り恥ずかしかったので逃げたのだろう。

まあ何はともあれ、いよいよデートもどきが始まるのでちやんとエスコート出来るようになるべく頑張ろうと思う。

あくまでなるべくなのでそんなに頑張るつもりは無いので悪しからず。

矢澤「さて着いたわね!!行くわよ!!」

魁翔「ウプっ……すいませんちよつとだけ待つてください……」

矢澤「いっつも思うけどアンタとことん体力ないわね」

ここに来るまで電車で移動してきたのだが、休日で遊園地行きの電車となるとどんだけ混むかはお分かりいただけるだろう??

そして見事に人混みにやられて俺は現在、絶賛グロッキー状態中である。

10分ほど休んで俺も全快には遠いが、大分回復したので早速回ることにした。

魁翔「俺この遊園地来たの初めて何で、何があるかわかんないんすよね。にこっちは先輩は来たことあるんですか?」

矢澤「そうね、けど小さい頃だったからあんまり覚えてないから案内とかは出来ないわね」

魁翔「そうですかー、まあ取り敢えずなんか乗りましようか。なんかありますか?」

そうねーとにこっちは先輩は上を見上げながら考えていると丁度ジェットコースター

が通って行った。

つてかあれ早くないっすか？本当に乗って大丈夫なやつなんですか？

矢澤「じゃあまずあのジェットコースターから乗るわよ!!さあ行くわよ！」

そう言うときまた俺の手を引きジェットコースターのある方へと向かう。

魁翔「いやーあれは後の方がいいんじゃないですかね？つてか乗らない方が良くないですかね？もしかしたら死ぬかもしれないですよ??主に俺が」

矢澤「大丈夫よ、その時はその辺に埋めといてあげるわ」

魁翔「無慈悲!!」

列を見つけ二人して並んでるが、やはり先ほどのをみた後だと落ち着かない。

魁翔「やつぱり乗らない方が良くないんじゃないですか？ほら結構並んでるし時間がなくなっちゃいますよ？」

矢澤「逆に今並んでないと後々混んできて乗れないじゃない」

うぐつ確かに一理あるかもしれない。

魁翔「にこつち先輩もしかしたら身長足りないかもしれないかもしれませんが、乗れないかもしれない
ませんよ!!」

矢澤「失礼なやつねー、140あれば良いって書いてあつたし余裕よ。つてかさつき
から乗りがつてないけど怖いのか?」

魁翔「や、やだなーそ、そ、そんなわけないじゃないしゆすすかー」

矢澤「いやそんな嘸み嘸みで言われても…、まあ怖くないんだつたら大丈夫ね、さて
順番来たし乗るわよ!」

魁翔「いやあー!死ぬー!!」

矢澤「ちよつと周りの人から見られて恥ずかしいからやめなさいよ!!」

座席は横に二人ずつ乗れる仕様となっており、当然俺たち二人は隣に座っていた。

にこつち先輩はウキウキしながら楽しそうに待っているが俺はそんな余裕もなく、ただ
ただだ不安しかなかった。

魁翔「ああー俺の人生はここで終わるのか、早かったな…」

矢澤「何言ってるのよアンタは…、そんな簡単にジェットコースターが壊れたりしないわよ」

魁翔「でも壊れないとも言いきれないじゃないですか!!壊れたらどう責任とってくれるんすか!？」

矢澤「そんなもん知らないわよ!全くもう世話がやけるんだから、はい」

そう言うときにこっち先輩が手を差し出してきた。俺は意味がわからなかったので取り敢えずその上に手を重ねてみた。いわゆる、お手だ。

矢澤「何でお手してるのよ!ああーもう!」

そう言うときにこっち先輩は、自分の手のひらに置いてある俺の手を握ってくれた。

魁翔「あのー何してんすか?」

矢澤「アンタが怖いって言うから仕方なくよ!感謝しなさい!!」

そう言うよりも一層強く手が握られにこっち先輩の体温が直に伝わる。緊張からなのかそれとも恥ずかしさからかは知らないがにこっち先輩の手はとても温かく感じる。

俺の手よりも小さい手だが、優しくとても温かい感じのする手だ。

矢澤「いやあー楽しかったわね!!」

魁翔「いや、ホントに死にますから……」

現在俺はベンチの上にて項垂れている。

ジェットコースターに乗り、にこつち先輩は楽しそうにはしやぎ俺は終始謎の絶叫を上げていて、この世の終わりが見えるかと思つていたのだが、その後にもう一回乗りたいと言うにこつち先輩のワガママにより後3回ほど乗せられて、現在死ぬ寸前である

矢澤「全くしようがないわねー、休憩がてら何処かでご飯でも食べましょ」

魁翔「ハイソウシマシヨ、ハヤクココカラハナレマシヨ」

矢澤「何でそんなに片言なのよ？」

フードコーナーに移動して何を食べようか迷つたが、結局ジェットコースターのせいで胃がグルングルンと揺さぶられてあまり食欲も湧かず、俺はポテトだけを摘みながらハンバーガー食べてるにこつち先輩をぼーっと見ていた。

矢澤「アンタそんだけで大丈夫なの？」

魁翔「ジェットコースター乗つたせいであんまり食欲でないすよ。逆にあんだけ揺らされてよく食べれますね」

矢澤「ふん！私クラスになるとあんぐらい余裕よ！それにしてもアンタは食わなさ過

ぎよ、ほら私のハンバーガー一口食べて良いから」

そう言うときにこっち先輩は食べかけのハンバーガーを俺の目の前に差し出してきた。しかも食べかけの場所を俺の前に向けてだ。

いやなぜ??

俺別にいらないうて言いましたよね?聞こえなかつたんですか、難聴系ヒロインですかあなは?

早く食べなさいと目で促されて、意を決して一口食べた。

矢澤「どう、美味しいでしょ!!」

魁翔「はいそうですね…」

いやアンタが作ったわけじゃないでしょーが。そもそも緊張とか色々なやつで味なんて全然感じなかつたんですがね。

まあ1つ思ったのは、自分のハンバーガーを胸張ってドヤ顔をしてるにこっち先輩が可愛いと思ってしまったことぐらいだな。

なんか悔しい……

矢澤 「さて次は何に行こうかしら」

魁翔 「うーん、どうしましょうかねー」

「あ、あれなんてどうですか？」

そう言い俺が指差したのは、これまた定番のおばけ屋敷である。

矢澤 「へ、へえーお、おばけ屋敷ねーべ、別に良いわよ」

もしかしてこの反応は？

魁翔 「お、にこつち先輩怖くない感じですか？」

矢澤「当たり前でしょ、あ、あんなものなんて所詮作り物よ！」

へえー、この人は怖いものが弱点なのか。

魁翔「よーし、じゃあ行きますか!!」

矢澤「い、いいわよ！ドンときなさい!!」

矢澤「ね、ねえ、さ、魁翔？そこにいるわよね？」

魁翔「居ますつてば、何回確認するんですか？」

矢澤「だ、だつてえ〜」

いやこの人、何回確認してんだよ。入ってからかれこれ20回ぐらい確認された気がするんだけど。

そこで通路の陰から一体のお化けが出てきて脅かしてきた。

矢澤 「イヤアーーーーー!!」

魁翔 「うるさ!! つか痛い痛い痛い、腕が締まるー!!」

どういう状況かというところ、お化けに驚いたにこつち先輩が俺の腕に抱きついてきて耳元で叫んでいる。

いやマジでうるさいんですけど、鼓膜が破れるわ!!

そして抱きついてくる力が異常に強いんですけど!!

矢澤 「イヤアーーーーー!! こないでーーーーー!!」

魁翔 「本当にこないでーーーーー!! 俺の腕がもげるーーーー!!」

結局途中でリタイアしてしまい、非常口らしきところから出してもらった。今はお化け屋敷の前にあるベンチの上に座っている。

矢澤「ま、まあまあだったわね」

魁翔「いや、どの口が言ってるんですか。人の腕をもごうとしたくせに」

矢澤「う、うるさいわね！」

はぁーもう、色々変な冷や汗とかかいて喉乾いたわ。

魁翔「ちよつと喉乾いたんで飲み物買ってきますね。何がいいですか？」

矢澤「水でいいわよ」

魁翔「りょーかいでーす」

そう言い残し俺は自販機を探しに行く。

けれど中々近くに見つからず結局、結構遠くまで来てしまった。

それにしても腕が未だにジンジンするんですけどね。あの人の力強過ぎじやありませんか？

魁翔「えーとみずみず、あとお茶でいつか」

一人でブツブツと言いながら自販機で飲み物を買ひ、さっさと戻ろうと思い早足でさっきの場所へと戻る。

戻ってみると、なんとにこつち先輩がガラの悪そうな男二人に絡まれていた。

今時ナンパしてる奴なんて初めて見たなー、アニメみたいだなとボーっと考えながら近づいていた。

ガラ悪男「なあなあ、いいから俺らと遊ぼうぜ中学生でも楽しめること知ってるからよー」

矢澤「さっきから行かないって言うてるでしょーが!! ってかにこは高校生よ!!」

ガラ悪男「またまたー、こんなにチツコイ子が高校生のわけないだろうー」

イライラしてるにこっち先輩をみながら、思わずプツと笑ってしまう。見ず知らずの人にナンパされた挙句、中学生に間違われてしまうとは流石だ笑

まあ、それは置いといてどうしたものか。俺が突っ込んだら間違いなく負けるだろう。それは自信を持って言える。まあ自信を持っていうことではないのだろうけど。

ガラ悪男「いいから行こうぜほらっ！」

矢澤「ちよ！やめなさいよ！」

そこで一人の男がにこっち先輩の手を掴んで行こうとしたので、俺は思わず、

バシヤ!!

手に持っていた水をぶっかけてしまった。やべ、やらかした。

ガラ悪男「おい…お前なんのつもりだ…?」

ひえーコエーナー、にこつち先輩よくさつきまでコイツらの相手してたなーと思う。まあ先に手を出そうとしたのは向こうだし俺は悪くない悪くない。

魁翔「あー、すいませんその子の連れでして。ちよつと暑さでやられてる変なお兄さんが見えたので涼んでもらおうかと水をかけてみました。

あ!!もしかして水がお嫌いでしたか!?じゃあ、」

そういうと次はもう1つの手で持っていたお茶を顔にかけてやった。

おーおーこれはご立腹ですね、これは俺死んだやつかな?

ガラ悪男「おいお前、黙って聞いてりや調子乗ってんじやねーぞ!!」

と言った瞬間、次の瞬間には俺の体が1メートルほど飛んでいた。おそらく殴られたのだろう、頬が痛い。

つてかやべーなマジでこの状況は、早く警備員さんとか来ねーかな。

つとそこでようやく、

警備員「何してるんだ!!」

恐らくこの場の近くにいた誰かが呼んでくれたんだろうけど、ちよつと遅過ぎやしませんかね？

おかげさまで一発食らつちまつたじやありませんか。

ガラ悪男の二人は警備員の人に連れて行かれて事情聴取だそうだ。俺たち二人も少しだけ話をさせられたがすぐに解放されたので良かった。

ちなみに殴られたとこの治療も軽くしてもらったのでラッキーだ。

先ほどから口数が少なくなつてしまつたにこつち先輩がいるのだが、そんなに怖かつたのだろうか？まあ取り敢えず時間も有限なので次のところを目指しますかね

魁翔「あーあ、ようやく解放されましたね。時間もロスしちゃいましたし次のところに急ぎましょう？」

矢澤「…………たね…………うにばか…:な…:、、

魁翔「え、何て言ってるんですか??」

矢澤「もうっ!! 本当にバカじゃないのあんた!! 何であんな相手を煽ることなんてすんのよ!! お陰でアンタが殴られちゃったじゃないの!!」

魁翔「いや何でそんなに怒ってるんすか? むしろにこっち先輩には被害がいかなかつたし上々の結果じゃないっすか?」

矢澤「そんな訳ないでしょーが!! アンタが怪我したら何の意味もないでしょーが!! 少しは人の気持ちも考えなさいこのバカ!!」

魁翔「あ、はい、すいません」

何で謝ってるのかはよく分からないですけどね、むしろ感謝される状況ではないのかと私は思ったんですけど!

矢澤「でも、まあ助けてくれてありがと……」

魁翔「あ、デレた」

矢澤「デレてない!!」

まあ何はともあれにこっち先輩の機嫌も戻ったので遊園地デートは再開された。

まあ、デートではないのだがな。

それからしばらく色々なアトラクションを回り、お土産コーナーなどでこつち先輩は家族へのお土産買っていた。

俺はというと家族も家にいないのでどうしよーかなっと思ひ、取り敢えず穂乃果と海未、ことりの分のお土産を買うことにした。

つとそこで1つの物が目に入った。

魁翔「あ、これって……………」

それから時間も過ぎ、もうそろそろ閉園間際となってきた。

園内も暗くなってきてもう乗れるアトラクションも少なくなってきたところで最後のアトラクションを俺たちは目指していた。

魁翔「さて、締めはやっぱり観覧車ですネ」

矢澤「そうね、それにしてもいつ見ても高いものねー」

にこつち先輩が上を見上げながら言うので、冗談交じりにおれが、

魁翔「まあそりやあにこつち先輩の身長からしたら大抵のものは大きいでしょ…つて痛いですつて」

矢澤「アンタがまた失礼なこと言うからでしょーが!!」

つと言い俺の足が踏まれる。まあまあ痛いんでやめて欲しいんですけどって思ったが、全然やめてくれる気配もないので諦めて、辞めてくれるのを待った。

って言ってもすぐに辞めてくれたので今は自由だ。

いやー自由って素晴らしい!!

まあそんなかなで観覧車に乗り込み今は外の景色を眺めている。

魁翔「へえー思ったよりも綺麗ですね」

矢澤「そうね、街のみんなの光、一つ一つ家の光がいろんな色に光っていて素敵ね」

会話は長く続かずそこで途切れてしまったが再びにこつち先輩が話し出す。

矢澤「今日はありがとうね、どうせお母さんが何か吹き込んだんでしょーけど楽しかったわ」

その言葉に思わず苦笑いが漏れてしまう。まあやはりと言うべきかバレてるよな。

魁翔「まあそうですね、あの人から誕生日だから夜ご飯のパーティの準備まで家の外に連れ出して欲しいって言われてチケットを渡されたんですよ」

矢澤「はあー全くお母さんったら」

言葉とは裏腹に少し嬉しそうに喋るにこっち先輩を見て一つ思い出した。

魁翔「あ、そういえばこれ渡そうと思つてたんですよ。はい、誕生日プレゼントです」

そう言つて俺が渡したのはカーネーションの模様が施されたネックレスだ。キョトンとした目で俺の顔を見てきた。あれ？なんか変なこと言つたか俺？

魁翔「どうしたんすか？なんか変なこと言いましたか？」

矢澤「いや、アンタこういうのは渡すタイプだとは思わなかつたから。しかもなんか案外センスがいいことに驚いたわ」

魁翔「あー、確かに渡すつもりはありませんでしたからね。それもさつきお土産買つてる時にある、なんかビビつときたつて感じで買っただけですしね。まあただの安物なんでいらぬなら捨てちゃつてください」

矢澤「フフツなにそれ？」

魁翔「さあ？」

そこからまた静寂が訪れてしばらくはそのままだったが、再びにこつち先輩が口を開く。

矢澤「ねえ魁翔は私がスクールアイドルをした頃の事とか誰かから聞いた？」

わずかに声を震わせながら言う言葉は、どこか寂しげで今にも消え入りそうな声だった。

それにしてもこのタイミングでこの話題とは、なぜかは分からないが、

魁翔「いや、知りませんよ。知ったところで過去なんて変えられるものでもありませんしね、変えられるのは未来だけですよ」

矢澤「フフツなにそれ？」

魁翔「ある人の受け売りですよ」

先程と同じような事を聞かれたが、今度は俺の答えは違ったものを出した。

変えられるのは未来だけ。過去なんてどう足掻こうと変えられるものではない。そ

れは受け入れるしかない事実であり世界の理だ。

矢澤「ねえ私の話を聞いてくれない？」

いつもは強気な声で喋る彼女だが、観覧車に乗ってからは弱々しく触れてしまえば壊れてしまいそんな感じがしてしまう。

俺は喋りはせず頷くだけをして、にこつち先輩に意を示す。

そこからはにこつち先輩が入学してからスクールアイドルを始めたことの話聞いた。にこつち先輩が部を作りたいと部員を5人集めて、無事に部活として認められてそれから一生懸命に努力をしたらしい。

そう、努力をし過ぎたと。

にこつち先輩が誘ったみんなはスクールアイドルをやってみたいという軽い気持ちで始めたのだろうけどにこつち先輩は違った。本気でスクールアイドルの頂点を目指していた。

にこつち先輩が必死にみんなを引っ張ろうと頑張り、初めてのイベントにライブをしたのだが結果は良くなり全体の中でもあまり良くない評価だったらしい。

それでもにこつち先輩はみんなを励まし、次に目指して努力をしようと言った。だが1人の子がもう限界だと、こんなに本気でやるつもりなんてなく、ただみんなで楽しくできたならそれで良かったのだと。1人が不満を吐き出すとそれにつられるようにみんなが辞めてしまったと。

そしてにこつち先輩は1人になってしまったのだと。他に人と目指すものが違い、努力をし過ぎてみんなに強要し過ぎたせいだと。

それでも諦めきれずに、未だに部屋に1人でいるのだと。

矢澤「ねえ、私が頑張ったのは間違いだっただのかしらね……………」

にこつち先輩の話聞き俺は

魁翔「そうですねもしかしたら間違っていると思う人もいるかもしれませんがね」

矢澤「!?　　そう、よね……………」

魁翔「それでも…それでも!!俺は間違っているとは思いません!!他の人がなんて言う間違ってるとは思いません!!この想いだけは絶対に否定させません!!」

目を見開きにこっち先輩は俺の顔を見る。

魁翔「確かに辞めていった人達からしたら、にこ先輩は異分子だったのかもしれないが、努力をすることのなかが悪いんですか！それだけ必死になって頑張った人を否定することだけは俺は絶対にしたくありません!!」

矢澤「なによそれ……ばかみたい……」

魁翔「バカで結構です。にこ先輩はまだ夢を諦めてないんですか？まだアイドルを指しているんですよね？」

矢澤「当たり前でしょ!!私は諦めたくない!!この夢だけ絶対に……」

にこ先輩は涙を目に自分の思いを口にする。良かったこの人はまだ折れてない、まだ諦めてない。

魁翔「なら俺から一つ頼みがあります」

矢澤「…なによ?」

魁翔「俺はアイドル研究部に入りたいです、ダメですか？」

俺の発言に驚いたのか目を点にしたような顔で俺を見てくる。

矢澤「それ本気で言ってるの？もう私しかないのよ？」

魁翔「ええ本気ですよ。俺の人生をかける最後の博打としては十分ですよ」

矢澤「人生をかけるって…大袈裟ね…」

にこ先輩は冗談として受け取っているだろうけど俺は本気だ。

高校生活で終わる俺の人生をこんなにも必死に足掻いてる人のために使えるのなら俺は本望だ。

魁翔「で、どうなんですか？」

矢澤「はあー別にいいわよ、部員が増えるのはむしろ大歓迎だしね」

魁翔「そうですか、それじゃあはいっ！」

矢澤「…なによこの手は？」

俺が差し出した手を訝しげに見てくるのだが、そんなに深い意味はない。

魁翔「いやなにつて、ただの握手ですよ？」

矢澤「なんでなのよ…まあ別にいいけど」

俺たちは握手を交わした。

これは正真正銘の俺の人生をかけた大勝負だ。俺の残りの命をかけてこの人を絶対にアイドルにする。そのために明日からは忙しくなるだろう。

まだまだやることもいっぱいあって、正直不可能と言っても良いだろうけど可能性はゼロではない。

諦めずに努力をし続けることに意味がある。努力したものが絶対に報われることがあるわけではないが、努力を辞めた人間が報われることなんて絶対にない。

そのために諦めずにつと歩み続ける必要がある。この人が歩みを止めずに進み続けられるように俺は支えていけるようにしたいと思う。

この時の俺はまだ思いもしないだろうこれから、9人の女神が揃っていき本当に願いが届いてしまうとは。そして絶対に忘れることのできない、そんな記憶ができてしまうなんて。

自分が死にたくないなんて思ってしまうなんて……

回る観覧車の中で俺は一つの誓いをして今日という日が過ぎていった。

13話　　夏休み前の1日

キーンコーンコーンコーン

いよいよ今日の授業の終わり、そして地獄の始まりを告げるチャイムによって俺の意識が覚醒した。

人によつては女の子たち、しかも可愛い子達と水着を買いに行くというのはご褒美だろうけど、俺にとつては刺激が強すぎるのだ。

あゝこれは無理だ、行つてしまつたら終わりなやつだな。よし帰ろう!!

魁翔「ちよつとやっぱ　　「よゝゝし!!それじゃみんなで行こーー!!」　　ですよ

ね……」

園田「何か今言いませんでしたか魁翔??」

魁翔「なんでもないよ……」

いやまあ何だかんだ言つても最終的には連れて行かれるのは分かつてるんだけどね。

でもせめて!!何か言い訳ぐらいさせてよ!!

穂乃果「ほら〜2人とも早く早く〜」

穂乃果とことりは既に準備を済ませて席を立っている状態にあり、後は俺と海未の準備を待つだけという感じだ。

園田「そんなに急がなくてもお店は逃げたりしませんよ」

ふむ

店が逃げるか、逃げるって言ったらどんな風に逃げるんだろーな。脚でも生やしてダッシュで逃げるなかもしれないな。

やば、考えただけで気持ち悪いなこれ。店の根元から脚が生えてきて走るとかUMA的な何かじゃねーか。

取り留めもないくだらない事を考えると、ふと3人ともが俺のこを見つめてきてることに気づいた。

魁翔「な、なんだよ？」

南「いやー、その……」

え、なに??なんか俺やらかしちやったの？

ことりに気を使われるとか結構シヨックなんですけども。

園田「簡単に言うのと先程から難しい顔したりニヤケたりしていて気持ち悪いですよ？」

魁翔「え?まじで??」

園田「はい、まじです」

残りの2人にも目線を送ると、苦笑い気味で目線をそらされた。まあそういうことだろう。

穴があつたら隠れたいとはまさしく今の俺の状態だな。

まあそんな事してたら、コイツらに俺のオケツが何されるかわからんしやらないけどな。特に穂乃果は何をするか分からん!

まあ取り敢えず心に傷を負ったところで……

魁翔「ちよつと心に傷を負った 「それじゃあレッツゴー!!!」
わせろーーーー!!!」

最後まで言

もう嫌だこの子、俺の話聞いてくんない。

――――

魁翔「なーやつぱり俺いなくても良くないか？海未だつて俺が水着を隅々まで舐め
回すように見るの嫌だろう？」

園田「どんな見方をしようとしてるんですか!!嫌に決まってるでしょーが!!」
魁翔「ほらそういう事なので俺はその辺をブラついてこよーかね〜」

そう言いコツソリと抜けようとしたのだが、案の定、服の襟を掴まれてしまった。

魁翔「……ことり?その手を話してくれると嬉しいんだけど?」

南「うーん、でも話しちゃうと魁翔くんどっか行っちゃうでしょ?」

頭をコクリと横に倒しながら喋ってるのは可愛いんだけどね、内容が内容なんだよなー。

魁翔「ほらさつきだつて海未が嫌だつて言つてただろう?これは俺なりの優しさでもあるんだぞ?」

園田「べ、別に私は大丈夫ですよジロジロさえ見られなければ、それに魁翔なんかに屈するわけにはいきません!!」

魁翔「なんかにとか言うな、ふつうに傷つくだろーが」

つてか屈するとかなんの話だよ？いつから俺たちは戦ってたんだよ。

南「そんなに魁翔くんは私達と行きたくないの……？」

魁翔「え、いや、そういう訳では……」

南「魁翔くん……」

え、何か嫌な予感がするんだけど。

ゲームで例えるなら、ボスが魔力をためていて次のターンに超強い技を撃つてきそうな感じみたいな。

うん、自分で言ってるんだけど分かりにくいなこの例え。

いやでも実際、ことり周囲の魔力がなんか集まってきたような錯覚が見えるんだけど。

いったい何が起きるっていうんだ。今から俺はことりに消し炭にされるのか!?

そして遂にことりが口を開き……

南「……………おねがぁい……………!!」

魁翔「ゴフツ!!」

園田「魁翔!」

穂乃果「魁翔くん!」

な、なんだと!?

今何が起きたんだ!?

ことりの口から甘い声が出たと思った次の瞬間、俺は吐血していた。

膝から崩れ落ちてしまい、慌ててきた穂乃果の腕の中で俺の意識は朦朧としている。そうか、ここが俺の最後なのか……………

魁翔「ごめんな…3人とも…短い間だったけど楽しかったぜ……………」

穂乃果「そんな魁翔くん…まだ一年だよ!!修学旅行とか沢山あるのに!……………こんなのだよ……………」

魁翔「ごめんな穂乃果……………後のことはまか、せ、た……………ガクツ……………」

穂乃果「魁翔く……………ん……………!!」

園田「いい加減にしてください!!」

魁翔「イテツ!」

海未からの鋭いチョップを受けて俺の朦朧としていた意識が戻ってきた。

まあ、最初から朦朧となどしていなかったんだがな。それにしても海未さん?もうちよい手加減していただけませんでしょうか?僕だってそんな悪気があった訳じゃ

ないんですよ。

はいすいませんでした、そうですね私が悪いですよね、だから振り上げてもう一回チヨツプをしようとしている手を引つ込めていただけると嬉しいですね。

真面目に頭がかち割れるかとおもいましたよ？

園田「悪ふざけもほどほどにしてください!!周りの人たちから見られてて恥ずかしいんですからね!!それに穂乃果もですよ!!」

魁翔 穂乃果「はい……………」

ニコニコとこつちを見ているが、元はと言えば君のせいだからな!!

まあ可愛いから許すけど!!

ハアーと思わずため息が漏れてしまう。まあ、美少女達が水着をキャツキャウフフと選んでる様を見るのは目に眼福なのだが、なにぶん男1人つてのは気まずい。

3人が選んでいるのをなんとも言えない距離感を保ちつつ俺は立っている。だって近づきすぎたら海末とかに何か言われそーだし、離れすぎたら男1人で入ってるの？キモっとか思われそーでこえーんだよ!!

そこで穂乃果がこちらにやってきて水着を自分の体にかざしながら口を開こうとする。

俺は予感した。

十中八九あの質問が来るだろうと。ここで紳士的に答えれないと男としてダメに思われてしまう!!

だが残念だったな!!事前に言われるのが分かっていたら答えることなんて容易いの

さ!!

さあ！華麗な俺の対応をみよ!!

穂乃果「どうどう！似合ってる!?!」

魁翔「ああ！似合ってるじよ!!」

はい噛みましたー!!

バカなのかおれ!!あんだけ頭の中でイメトレしたのにその上でこのざまか!!

目の前の穂乃果はポカーンとしてるし、後ろのことりと海未も笑いを堪えてる感じだし、もう死にたい……………

穂乃果「魁翔くん……………」

魁翔「何だよ……………」

穂乃果「可愛いね!!」

魁翔「可愛くねー!!」

アハハーと穂乃果は笑いながら「試着して来るね」とだけ言い残しカーテンで仕切られた個室の中へと姿を消していった。

魁翔「ああーもうやだ…死にたい……」

園田「そんな簡単に死ぬとかいってはダメですよ？悲しむ人だっているのですから」

そう言いながら近づいてきた海未の手には白いわゆるビキニタイプの水着があった。まあ水着の種類なんてよくわかんないんだけど。

魁翔「はいはい気をつけますよ、それにしても海未はそれを着るのか？」

園田「は、はい……へん…でしようか？」

やめて、そんな上目遣いで心配そうな顔をしながらこつちを見ないで!!
普段とのギャップが凄すぎてちよつとあれがアレでヤバいんですけど!

魁翔「い、いいんじゃないか??」

俺と海未との間で何とも言えない空気が流れてしまい、誰か何とかしてくれー! っと思っていたら、ことりが助け舟を出してくれた。

南「じゃーん! ことりのはどう??」

ことりも先ほどの穂乃果と同じように、服の上から水着を重ね感想を聞いてきた。

ことりは緑を基調としたデザインで白色のフリルがあしらわれたものだった。これもビキニタイプ??なのかな??

魁翔「うん似合ってるぞ!!」

南「ムツ!」

え、何か頬を膨らまして不機嫌アピールしてるんですけど俺なんかやらかしたか? ちゃんと褒めたよな。

ってかどうでも良いけど怒ってても可愛いとかマジで反則じゃないっすかね?

まあそれにしても何で怒ってるかわかんないだけだなあ、今までで1番うまく褒められたはずなのになあ。

魁翔「あのおーことりさんは何にお怒りになつてたのでしょうか?」

南「だって……海未ちゃんと穂乃果ちゃんの時は照れてたのに私の時は……そんなに私って魅力がないのかな……?」

あーそういうことか、つてか俺そんなに照れてたのか?記憶にごぎませんけどな。それにしても魅力がないか。そんな事は絶対じゃないんだけどなーって思うけどな。

言葉で言うだけなら簡単だけど伝えるのは難しいだろうな。

ことりが落ち込んでるのを見て海未がオロオロしてるのを見て少し面白い感じがするけど、これ以上ことりを放っておくのもダメだな。

まあ俺が何か言ったところで意味があるかは分からないけど、それでも何も言わないよりはかはマシだろう。

魁翔「ことり、別に俺はことりに魅力を感じてない訳じゃないからな。つてか3人中だったら1番女の子らしいじゃん」

南「そんな事ないよ……私はいつも2人に頼ってばっかで……私なんかより2人とも可愛いし……」

魁翔「はあー何でことりはそんなに自己評価が低いんだ？ほら手、貸して？」

俺が何をしたいのか分かっていないので首を傾げながら、疑問げな表情をしながら手を出してくれた。

俺はその手をとり、俺の胸に当てた。

魁翔「ほら分かるだろ、ことりの手とかに触れるだけでこんなに緊張してるんだぜ？」

平然と喋っている風に装ってるけどきつと顔は真っ赤になっているだろう。

でも、こんぐらいししないとことりも気づいてくれないだろうしな。ことりのためになるなら俺の羞恥心なんて捨ててやるぜ！

南「ホントだ……スゴイドキドキしてる……」

魁翔「だからそんなに自分のことを蔑むなって、そんな事言ったら周りの奴らも悲

しい思いするんだぞ?」

俺がそう海未の方に目配せをして、それに気づいたことは海未の方を見つめる。

南「そつかあー……ありがとね魁翔くん」

魁翔「どういたしまして」

至近距離からことりの笑顔を見れて非常に良かったのだけれども、ちよつといつまでも胸を触られてるのは恥ずかしいんですけどね。

魁翔「あのーことり?そろそろ手を離してくれるとありがたいんだけど」

南「うーんもうちよつとだけ♪なんか男の子って感じがするね」

魁翔「まあそりや男の子だからな」

それから試着から出てきた穂乃果が、ことりの真似をして近くにくつついてきたんだが、ちよつと目のやり場に困るんでやめてもらえませんかね??

本当に君たち男への警戒心が薄すぎじゃありませんかね？俺たちの様子見て呆れている海未を少しは見習ってほしいものだ。

何はともあれ今回のお出かけで学んだことは、女の子を褒める練習をしておくべきってことだな。

後は、穂乃果に羞恥心とか警戒心つてのを学んで欲しいものだな。

とにかく海に行くことが決まっちゃった事だし、俺も出来る範囲で楽しむとしますか。

余談だがこの日は3人のお買い物で時間が潰れてしまったので、俺は後日1人で海。パンを買いに行った。何で1人かって？

恥ずかしいからだよ、言わせんな。

HONOKA HAPPY BIRTHDAY

さて今俺は家にて明日の準備をしているのだが。

何の準備をしているのかというと、前々から約束していた海に、海未達と行くのだ、海だけに。

え？面白くないって？

そんな事言うなつてよ。

まあどうでもいい話は置いておいて、海に行くわけだが、その行った所の海の家で穂乃果の誕生日パーティーをする予定だ。ちゃんと少しスペースを借りることは話を通してららしい。

つてか、こういうところって借りられるのだね。

まあ、一応俺なりにプレゼントも選んでみたのだが、なにぶん未経験なので何を選んだらいいのか随分と悩んだのは記憶に新しい。まあ何はともあれ、明日は楽しい楽しい一日になりそうです。

多分………

準備をしながらテレビを見ているのだが、何か最近は海水浴での誘拐とかが多いらし

いな。人とか多いのに誘拐なんて出来るもんなのかね？

そんなことを考えながら準備を終わらした俺はもう眠くなつて来ていた。

魁翔「よーし準備できたし寝るか」

ベッドに身を投げて、寝ようとしたところでおれの携帯が震えていることに気づいた。

魁翔「なんだよこんな時間に、って海未??珍しいな」

普段、穂乃果とかことり（まあ主に穂乃果なのだが）とかとは電話をするのだが、海未からの電話は俺の覚えている限りでは初めてのはずだ。

海未のことだからよっぽどの事がない限りは電話なんてしてこないだろうからな。

魁翔「どうした海未？俺の声が聴きたくなつたのか？」

園田「いよいよ明日だと思いまして」

魁翔「あ、無視ですかそうですか。まあいよいよだな」

園田「はい、いよいよ……………」

ババ抜きで私が勝つ日が来ました!!」

魁翔「え？そつち？」

園田「そつちとは??」

魁翔「いや、穂乃果の誕生日の話かと思って」

園田「それもあります、明日は私にとっての決戦の日なのです!!」

たかがババ抜きでこの子は何を言ってるのでしょかね？
まあ本人にとっては今まで勝ててなかったからよっぽど楽しみにしてるのだろう。

魁翔「まあ、希先輩からもらったヤツをちゃんと持つてこいよ？つてかあれ何が入ってるの??」

園田「私もまだ開けてないので分かりませんが、これさえあれば私も勝てるはずですよ!!」

魁翔「まあ頑張れよー」

園田「もちろん魁翔にも負けてませんからね!!」

魁翔「え!?俺もやんの?」

マジか、ダルイなー、やりたくないなー。

あ、嘘ですつて海未さん。そんな殺気がプンプンするような雰囲気を出さないで下さいって。

魁翔「まあ、とにかく早く寝ろよー。つてか俺が早く寝たいのもう切るわー」

園田「はい夜分遅くにすいませんでした。おやすみなさい」

魁翔「へーい」

明日の海未はババ抜きで勝てるのかね？

つてか希先輩から貰ったやつつて結局何が入ってんだろーな。

そんな、一瞬にして強くなるよーな魔法のアイテムなんかあるもんなのか？

――――

つて思ってた時期が僕にもありました。

現在は無事、電車に乗り込みやはりと言うべきかトランプを持ってきた穂乃果の提案によりババ抜きが始まったのだが。

しかも罰ゲーム付きだ。最下位だった人はみんなにジュース奢りという。まあ今までの事から負けないだろうという自信があるからだろうけど。

え？待ち合わせとかの話がないって？そんなの穂乃果が遅刻したぐらいしか特にないので割愛です。

まあ、とにかくトランプが始まろうとしたので海未にアイコンタクトを送る。

ちなみに席は、目の前に穂乃果、隣に海未、そして穂乃果の隣にことりだ。

海未が自分の中のバックに入ってるであろう、希先輩から貰った秘密道具を出そうと
していた。

そう、出そうとしていたのだが途中で動きが止まりフリーズしてしまった。

一体どうしたのかと思い、海未が漁っていた荷物の中を見てみると、

魁翔「ひよつとこ??」

園田「ひよつとこですな」

何が入ってんのかとずっと気になってたのに、まさかの予想の斜め上どころじゃ変化球できましたよあの人。何だよひよつとこのお面って、なんだ？笑わかつ事で何か有利にでもなんのか？

魁翔「何故に??」

園田「私が聞きたいですよ!」

穂乃果「ん？さっきから2人してどうしたの??」

魁翔・園田「なんでもない（です）、なんでもない（です）!」

穂乃果「??」

若干穂乃果に怪しまれてしまったが、ってかどうすんの？

取り敢えずそのひよつとこのお面をどうするのか、隣の海未と話し合う。

魁翔「で、どうすんだよ？ 一応付けてやってみるか？」

園田「そうですね、もしかしたら何か意味があるのかもしれないし」

穂乃果がカードを配り終えたところで、いざ始めようとしたところで、海未がお面を手に取り装着した。

まあ、当然の如く何も知らない2人は哑然とした表情で目を見開いている。

俺も何も知らなかったら同じような表情をして、海未が狂ったのかと疑うだろう。

穂乃果「海未ちゃんが勝てないからっておかしくなった!？」

園田「勝てないわけじゃありませんし、おかしくなつてなんかありません!!」

これはただ……今日のラッキーアイテムです!!」

スゲーゴリ押ししてるんすけど。言い訳下手くそかよ。つてかこつち向かないでよ、結構こえーんだよ。

南「えつと……海未ちゃんはそれをするの？」

園田「もちろんです！ラッキーアイテムを持つてるのだから負けるはずがありません！！」

魁翔「別にラッキーアイテム持つてるからって負けないわけではなくねーか？」

穂乃果「てゆーか、本当にどうしたの？悩みがあるなら穂乃果がのるよ？」

園田「だからそんなんじゃないやありませんって！ほら、早くやりますよ！！」

めちやくちや心配されてますよ。まあ、たしかに何かあったのかと思いますよねこれは。

って事でババ抜きが始まったわけなのだが……

南「えつとこつちかな〜……………」

園田「……………」

南「それともこつちかな〜……………」

園田「……………」

案外ひよつとこお面大作戦が成功した模様だ。

なるほどな、希先輩が五分五分に持ち込めるはずって言うてたのはこういう事か。確かに、表情さえ見えなければ後は運勝負に持ち込めるからな。

ちなみに順番は席順に引いてるから俺は穂乃果をとる、海未は俺のをとって、ことりが海未のをとるって感じだ。

いやでもなー、電車の中でひよつとこがババ抜きしてるってのは、何ともシユールな絵面だな。

まあそんなこんなで、運勝負は海未に軍配が上がったようだ。

園田「やりましたよ!! 魁翔!! 1番ですよ1番!!」

魁翔「いや分かったから、顔近いって!」

あろうことか、喜びでテンションが頂点になってしまった海未は俺に抱きついてきた。

何かいい匂いがしたし、全体的に柔らかくてなんとも言えない感じ………ゴホンゴホンなんでもないですよ。

園田「は、破廉恥です!!」

魁翔「え？俺のせいですか？俺何もしてなくない？」

何も俺悪くないのに怒られるという、理不尽極まりないですよ。

そしてババ抜きが再開されて、次にことりが抜けていよいよ俺と穂乃果の一騎討ちとなった。

穂乃果が二枚持つており、俺が穂乃果からスペードの7を取れば勝ちだ。

魁翔「さーてとこっちなかなー」

そう言い、探りを入れてみるが意外なことに穂乃果はポーカーフェイスが上手く全くわからない。

魁翔「もしかしてこっちなかなー」

俺が話しかけても真剣な表情で顔一つ動かしてくれない。ってかなんか無視されて

るみたいで地味に傷つくすけど。

魁翔「よし、じゃあこれ……って」

穂乃果「んん……」

いや、取ろうとしてんのに何で取らせてくれないんだよ。

そんな上目遣いの涙目で見られたって俺は決して諦めないぞ。俺は男女平等主義者だから決して手加減なんてせんぞ。

だから、そんな可愛らしい目でこっちを見ないで下さい。

魁翔「あのー穂乃果さん？取りたいんすけど？」

穂乃果「んん……」

くそー力強いなコイツ。

引つ張つてもビクともしないんだけど。いや俺が弱いだけかもしれないけど。
どんだけこの子はジュースを奢りたくないんだよ。

10秒ほどこの状態が続きいい加減どうしようかと思つたが、

魁翔「ああー分かったよこつちを取りやいいんだろ」

結局、根負けした俺が諦めて違うカードを取った。まあ結果は当然の如くジョーカーだけだな。

次は穂乃果が俺のカードを引く番だ。

魁翔「はいどうぞ」

穂乃果「うーんこれは何で上げてるの？」

魁翔「スピードの7を上げてみた」

穂乃果「ほんと!？」

今のやり取りから分かるように、俺は片方のカードを上にはずらして上げている。まあしかも言ったとうり当たりの方をな。

よっぽど勝ちたいようだし、まあ誕生日だしな。

穂乃果「じゃあもらーい！

やったー揃ったー!!」

目の前で騒いでする穂乃果を見て、トランプ一つでこんなに楽しめるなんて幸せな奴だなーっと考える。

穂乃果が騒いでる隣ではことりが良かったねとやら声掛けをして上げている。

園田「何で教えてあげたのですか？」

魁翔「まあ誕生日ぐら……ってビビったー！そのお面付けたまま顔を近づけるなって!?!」

園田「あ、これは失敬」

コイツまだ付けてたのかよ。気づいたらあの顔が横にあるのはマジでビビったわ。

魁翔「あゝあちいゝ」

どうもこんにちは魁翔くんです。現在パラソルの下で3人を待っている最中です。もう動く気力もないので、うつむせで寝ています。

何を待っているかといえ、それはもちろんお着替えです。俺自体は着替えなんて1分もかかりませんでしたからね。

女子はまあ色々あるんでしょうね。何があるかは知りませんが。

つてかマジで熱いんですけど。もうパラソルの下から一步も動きたくないんですけど。

むしろもう帰りたいんで帰っていいっすかね？

園田「言い訳ないでしょうが」

魁翔「いい加減、人の心を読むのはやめてもらえませんか？」

園田「声に出てましたよ」

魁翔「え？マジで？」

園田「マジです」

そこで、ようやく上を向き海未へと顔を向けた。向けたのだが………

魁翔「何で上着てんの？」

園田「べ、別にいいじゃないですか!!あんまりジロジロ見ないでください!!」

あろうことか上からパーカーのようなものを羽織っていた。

いやだが、これはこれでいいのかもしれない。パーカーで水着の下が見えそうで見

えなくなっており、なんともエロそうな……ゴホンゴホンなんでもありませんって海未さん、だから殴ろうとしないてくださいよ。

ちなみに水着は前回買い物に行った時の、白色のやつかな？あんまり見えないので分らないが。

穂乃果「お待ちせー」

ことり「ごめんねー遅くなっちゃって」

魁翔「あー別にいいよそんなぐらい」

ことりも前回買い物で買ったであろう、緑を基調とした白のフリルがついた水着で、穂乃果は青と白のストライプで下にはなんかピンク色のリボンがついたようなやつだ。あと麦わら帽子を被ってる。なんか似合ってるって悔しい。

俺の語彙力じゃこの程度の説明しかできない。ってか何で俺はさっきから説明をしてるのだろう。

穂乃果「どうどう！似合ってる!？」

魁翔「おー似合ってるぞ、だからあんまり近寄ってこないでください」

穂乃果「おおー今度は嘸まずに褒めてくれた！」

魁翔「やかましいわ！」

いつまでひきづつてやがんだよ。あれは黒歴史だから思い出したくもないのに。

つてか何でこの女の子たちは普通に距離を近づいてくるの。俺のパーソナルスペースにあんまり入ってこられると勘違いしちゃいますよ？

しかも、ちよつと今回だけは本当に勘弁して欲しいんですけど。水着とかどこに目を向けたらいいかとか分かんないんですけど。

魁翔「まあそれじゃあ楽しんでこいよー、荷物番はしといてやるから」

穂乃果「ええー魁翔くんも行こうよー」

魁翔「暑くて動きたくない……」

穂乃果「じゃあ海未ちゃんにおんぶしてもらおう!!」

魁翔「それは勘弁してください」

穂乃果「ああーもう！海未ちゃんはそっちの手持って、ことりちゃんは左足ね！」

魁翔「え!?おいちよつと待てよ!」

まさかとは思うが、俺の手足を全部掴んで海の前まで移動したと思ったら……

穂乃果「いつくよーいちにのさん!!」

おもっいきし海に向かって投げられましたとき。

いやマジで飛んでる間、怖いんですけど。

魁翔「ぶはあ!!おい無理矢理すぎるだろ!ふつうに怖かったし!!」

なんか3人とも大笑いしてるし、マジで怖かったんだけど。

魁翔「よーし、そんなにやる気なら俺にだって考えがあるぞ！海未！ことり！！」

そういうと、先ほどやられたように穂乃果の手足を掴んでそのまま…

魁翔「おらぁー！！」

バツシャーーーつと水しぶきが散った。

穂乃果「ぶはぁ!!何すんのさ！ぜんぜん嬉しくないよ!!」

魁翔「うるせー、さっきの仕返しじやー!!」

まあ、それからはワイワイと色々やりましたわ。

水鉄砲で撃ち合おうとしたら、なんかことりだけ相当でかいのを持ってきてて何故か俺が集中狙いされたんすけど、マジで海の水はしょっぱい。

次に謎の相撲大会が始まって、1回目の海未に俺は3メートルほどぶつ飛ばされた。つてか触れてもないのにぶつ飛ばされたんすけどどうやったんですかね。

他にもビーチバレーをして穂乃果のスパイクを顔面レシーブで返してやったぜ!!

………なんか俺ばつかやられてんすけど気のせいかな?これはイジメつてやつですかね?

まあ、遊ぶペースとかも合わせてくれたのでそんなにしんどくはならなかったから良かったけど。

時間もお昼時となり昼食タイムとなり、海の家に行き早速準備に取り掛かる。まあ、ことりと海未がやってくれるので俺は穂乃果と一緒に待っただけなのだが。

いや、別にただまってるだけじゃなきいぞ?一応テーブル拭いたり皿とかの準備はしたからな?

今回は端つこの方のスペースを使いやらせていただけ。料理などはある程度は作っていて店に置かせていただけてるようで、何から何まで感謝感激雨あられてやつだな。

穂乃果と他愛もない話をしばらくしていると、料理を持った2人が来たのでその皿を受け取り机の上に並べていく。

つにしても前回の俺の誕生日の時といい、2人とも料理が上手いなー。それに比べて穂乃果は………うん、料理できるかなんて人それぞれだし比べちゃダメだな。

俺が穂乃果を見ていたことに気づいたのか……

穂乃果「どうしたの？私の顔を見て？」

魁翔「なんでもないよ穂乃果……人間人それぞれだもんな……」

穂乃果「なんかよく分からないけど私バカにされてる!？」

魁翔「おうよく分かったなエライな」

穂乃果「褒められても全然嬉しくない!!」

園田「はいはい、くだらない事言つてないで食べますよ」

2人で、はーいっと返事をした。そのあとお母さんみたいだなんて褒めたら頭を叩かれた。解せぬ。

魁翔「じゃあやつば誕生日の人が乾杯しないな」

園田「それもそうですね」

南「頑張つて穂乃果ちゃん!!」

穂乃果「わかった!!えつと……何言えばいいんだろ?」

ガクツとみんなで倒れてしまった。まあ穂乃果らしいっちゃらしいけど。

魁翔「何でもいいから思った事でいいよ」

穂乃果「うーんつとね……本日はお日柄もよくこんな足元の悪い中来ていただいて……」

園田「何で無理をして畏まった言い方してるんですか……」

魁翔「つてかお日柄が良いのか悪いのかぐつちやぐちやになつてるし」

南「アハハ……」

海未は呆れたように頭を押さえ、ことりは苦笑いの様子だ。かくいう俺もツツコミをするので必死だ。

なんだよお日柄が良くて足元が悪いつて、天気が良すぎて道路でも溶けたんですかね??聞いたことのあるセリフを無理矢理使ってる感がすごいな。

穂乃果「ぶー、せつかく頑張つて喋ろうとしてるのに!」

そんな口を尖らせてブーっとか言つても、可愛いだけだぞ。

いや、可愛いのかよ。

魁翔「ほらほら、もう何でもいいから」

穂乃果「もおー、じゃあコホン!今日は私のためにこんなステキな会を開いてくれてありがとう!!私も今年で16なので大人の女性になりたいと思います!!」

園田「大人の?」

魁翔「女性とは?」

穂乃果「もうー2人とも邪魔しないでよ！もういいよ！！じゃあいくよー！カンパーイ！！」

「カンパーーーーーーイ！！」

魁翔「お！上手いなこれ！」

穂乃果「ホントだ！美味しい！！」

園田「こら！はしたないですよ2人とも！」

魁翔「そんなこと言うなってお母さん」

穂乃果「お母さん！！」

園田「誰がお母さんですか！！って何回目ですかこのやり取り！！」

穂乃果「うわーんお父さん！お母さんがいじめるよー！」

南「よしよし、お母さんは今日は疲れてるんだよ」

園田「こ、ことりまで」

魁翔「よしよしお母さん、頭ナデナデしてやろうか？」

園田 「調子に乗らないでください!!

あっ?
!!??」

怒ってしまった海未は、手元にあつた物を無意識に俺に投げて来てしまった。
そう手元にあつたケーキを

穂乃果ことり「あ??
!!」

魁翔 「それは誕生日の人にやるやつだろ……ガクっ!!」

海未の気合の入つた一発は俺の意識を刈り取るのに十分すぎる威力を持っており、俺はあえなく意識を手放す羽目になった。

うーん、どこだここ？なんかさつき顔面に強い衝撃を受けた気がするけど。

つてか今のおれ変な体勢になってないか？普通に寝てるような感じだけど、妙に頭の位置が高くて、頭の下にはなんか柔らかくて暖かいものが……

そこまで考えて思考を一旦やめにして、目を開けてみると顔の目の前に穂乃果がいた。

ん??

何で目の前に穂乃果の顔が??

もしかしてこれは？つてかもしかしなくてもこれは……ひ、ひ、ひ、膝枕!?!?

魁翔「うわあー!!っていつてー!」

穂乃果「いったー!!」

勢いよく頭をあげたので、おれの上にあつた穂乃果と当然のごとくぶつかりお互いおでこを抑えてうずくまるといふ、なんとも間拔けな姿でいる。

穂乃果「もおー! 何すんのさ!!」

魁翔「いやだつてお前こそ…ひ、ひ、膝枕なんて何でしてんだよ!？」

穂乃果「ん? だつて何もないところで寝てたら首痛くならない?」

魁翔「いやだからつてな…あーもうなんでもないよありがとな」

穂乃果「うんどういたしまして!」

あーもうそんな純粋な思いでやって貰つてたんなら文句なんか言えないな。

まあ別にいい思いが出来たので文句があるわけじゃないんだけど。

魁翔「あー、ところで海未とことりは?」

穂乃果「ケーキダメにしちゃつたから責任持つて買つてくるつて行っちゃつたよ」

魁翔「そういえば顔面にシユートされたんだつたな…」

穂乃果「アハハ……起きたら謝つといってくれって言つてたよ？」

ハハつ海未らしいな、責任感が強いから何だかんだ言つて謝つてくるしケーキも自分のせいって思つて買いに行つたんだろーしな。

穂乃果「魁翔くんも大丈夫？なんか飲み物買つてくるけど何が欲しい？」

俺が行つてくるって言おうかと思つたけどせつかく気を遣つてくれているのだからありがたいと甘えることにしよう。

魁翔「普通に水とかでいいよ、悪いな」

穂乃果「大丈夫だよ！倒れてたんだからしばらく安静にしててね？じゃあちよつと待つててね！」

魁翔「ああ行つてらっしゃい」

ああーそれにしても情けないな、海未の一発でまダウンするとは。まあ海未の威力にも問題があると思うけど、俺自身も相当だよな。

まああともう少しだけ持つてくれたらいいかな、せめてコイツら3人という間だけはな。

それにしてもまだ眠いしちよつとだけ寝させてもらおうかね。

そう思っているとすぐに眠気は来て、俺は深い眠りの中に誘われていった。

? 「さ………てくだ……い」

魁翔 「うーんちよつと待つてくれよ」

? 「さきと!!!」

魁翔「はい?!? どうした?!?」

耳元で叫ばれたので俺の意識は一気に覚醒して、目が覚めた。勢いよく飛び起きて、目の前には必死な顔をした海未と心配そうな顔をしたことりがいた。

魁翔「どうしたんだよそんなに慌てて?」

園田「穂乃果はどこですか?! 連絡も通じないんです!!」

魁翔「さつき飲み物買いに行くっていったけど?」

園田「それは何時頃ですか?!」

魁翔「えっと確かさつき見たときは3時半ぐらいだったかな?」

園田「それは本当ですか?! 今は4時を超えていますよ?!」

は!?

一瞬俺は海未の言っている意味が理解できなかつた。いや、理解したくなかつたのかもしれない。

魁翔「クソが!!」

勢いよく俺は立ち上がり走り出した。海未とことりが後ろで何か叫んでいるが、俺はそんな声聞く余裕なんてなく、ただ必死に走り出した。

あの時、俺が代わりに行かなかつたばっかりにこんな事になるなんて!!何であの時、穂乃果に任せてしまったんだよ!

俺は走るのがダメな事なんて頭から抜け落ちてしまつて必死に周囲を探し回つた。

魁翔「くそ!範囲が広すぎる!!どこに行つたんだ!」

俺の頭の中では昨日のテレビのニュースがよぎつた。海水浴場での誘拐。それが今考えられる最悪のパターンだ。

闇雲に探しても見つかりっこない。考えるんだ。穂乃果は飲み物を買に行くつて言つてたな。つまり自販機だ。

確かこの辺で一番近くにある自販機……

道具とかの貸し出しをしているあそこだ!!

魁翔「すいません！さつき麦わら帽子被ったオレンジの髪の子見ませんでしたか!?」

店員「あーさつきそこで飲み物買ってたわねー。可愛らしい子だったからよく覚えてるわ」

魁翔「どっちに行つたとか見てませんか!？」

店員「そうねえー、なんか男の人と話してて向こうの方に行つてたかしらね？」

魁翔「人気の少ないほうじゃないかよクソが!!」

俺は店員さんにお礼を言うのを忘れて駆け出していた。

魁翔「ハア……ハアハアゼエイ……うう……」

さつきから走りっぱなしで心臓がすごい鼓動していて、激痛が走っているが今はそんなこと気にしている暇はない。

俺の直感が急がないとヤバイと告げている。

走って行くにつれてどんどん人気の少なくなっていく、岩場の近くに一つの麦わら帽子が落ちていた。

魁翔「ハアハア…穂乃果の帽子だ…どこだ！」

ようやく見つけた穂乃果の手がかりが見つかった岩場は当然のごとく人気はなく、先ほどまでいた場所とは大きく変わって静けさに満ちていた。

けれどもそこで………

穂乃果「離してください!!」

魁翔「穂乃果?!?!」

俺は声の聞こえた方に、もう限界を迎えた体に鞭を打って走り始めた。そして声の聞こえて来た岩場の方に近づいて来たところで、いつも見ているオレンジの髪が目に入った。

魁翔「穂乃果!!」

穂乃果「魁翔くん!?!」

ようやく穂乃果を見つけた俺が見たのは、3人の男たちに囲まれている穂乃果だった。

穂乃果は男たちを振り切り俺の後ろに隠れた。目には涙が浮かんでおり相当怖かったようだ。まあそりやそうだよな、こんな奴らなんかにここまで連れてこられちゃっていたらな。

魁翔「ハアハア……もう探し回ったんだぞ?ゼエ……ほら帰るぞ?」

そう言い、さつき拾っておいた麦わら帽子を穂乃果の頭に被せてあげた。

俺は穂乃果の手を取り男たちに背を向けて逃げようとしたが、そんなに簡単に行く相手じゃないようだ。

男「オイオイなに邪魔してんの？その子の彼氏かなんかかな？もうちよつとで良いとこだったからちよつとだけ引つ込んでいてくれるかな!!」

そう言うと、振り向こうとした俺の顔を殴りつけてきた。海末とかに普段殴られるとかとは全く違った感覚だ。

あー普段は海末も手加減してくれてたんだなつとくだらない事を考えながら俺は殴り飛ばされた。

穂乃果「魁翔くん!」

男「ほらほら君はこつちだよ!」

そう言うと、俺が顔を上げて喋った奴の顔を見ると、もう1人の男が穂乃果の首を絞める形で捕まえていた。

クソ！最悪の展開だ！俺1人じゃどうやっても勝てるわけがない。こんな事なら海未も連れてくるべきだった！

今できる最善手は、もしかしたら穂乃果を助けられるかもしれない。けどミスったら穂乃果にも危険が及ぶかもしれない。

でも迷ってる暇はない。やるだけやってダメだったらその時だ。

俺は立ち上がり男に殴りかかった。

けど俺の弱々しいパンチは当たる事なく避けられてしまった。

そして倒れ込んだ俺を男は首を掴んで持ち上げた。

人を1人持ち上げるなんてすげーパワーだな。俺にもこんな力があつたら普通に守れたのに。

穂乃果「魁翔くん!?!?」

ああーもうそんな心配そうな顔すんなって。この作戦さえ成功すれば助かるんだか

ら大人しく待つてろって。

魁翔「あーあ首締められるのは流石に苦しいわ、流石だよ暴力を振るうしかないゴミはスゲーな」

男「あん？」

あーそうだ怒れ怒れ。もっと俺に起こるんだ。

魁翔「だつてそうだろ？そっちの男2人と女の子に寄つてたかつてこんなとこまで連れてきて、この時点でゴミなのに、助けが来た途端そいつには暴力を振るつてなんとかしようなんて低脳で頭の悪いゴミクズのする事じゃねーか。ここにいろ3人とも本当にゴミみたいな人間なんだろーな」

俺はそこまで言うのと、持ち上げられてるので男よりも高い位置にいます。そこから唾を吐きかけてやった。

魁翔「本当にゴミみたいなお前らにはそれがお似合いだよ」

男「おいお前ら予定変更だ、コイツよっぽど死にてーみたいだしやるか」

そう言った瞬間、俺の顔面に激痛が走った。後ろから穂乃果の悲鳴が聞こえるが、正直意識も朦朧としているのであんまり声が入って来ていない。恐らく血も大量に出てるだろう。

顔の前にゴツゴツしたものがあるしおそらく、岩にでも顔から投げられたんだろう。

あーいつてなークソが。

俺は消えそうになっている意識の中で、必死に叫ぶ穂乃果の声が聞こえてくる。

穂乃果「魁翔くんを離してよ!?!私のことなら良いから魁翔くんには手を出さないでよ!?!」

男「うるせーな!お前は黙ってろ!」

穂乃果「きゃあ!!」

あー、もう失敗したな。穂乃果に怪我をさせないように頑張ったつもりだったのに、穂乃果がおれを助けようしてくれるのは予想外だったな。

このままじゃあちよつと不味いな。あと一つ何かできることはないか、時間稼ぎでもいい。海未たちも探してくれてるはずだから時間さえ稼げたらまだ可能性はある。

つて言っても、血が流れすぎてるせいか頭の考えもまとまらず思考も遅い。今おれが出来ることを必死に考えるが全然出てこない。

もう考えても仕方がないやれるタゲやるだけだな。

俺はもう動きそうにない体に無理やり喝を入れ立ち上がる。頭はフラつき焦点も定まらない感じだが、石を掴んでなんとか立ち上がった。

魁翔「おー穂乃果大丈夫かー？ちよつと俺はキツイから先に逃げてろーつとあぶねー」

喋ってる途中も足がおぼつかず倒れそうになってしまいが、あと少しだけと体に鞭を打ちなんとか持ちこたえた。

ここで穂乃果が逃げてくれたらこっちの勝ちだ。

さあ聞き分けよ 「嫌だ!!」
く逃げてくれないのかよ。

穂乃果 「絶対に魁翔くんを見捨てないもん!!」

あーもうそんな涙で顔ぐちやぐちやにしちゃって、せつかくの可愛い顔が台無しだよ。

まあ口に出すのは恥ずかしいし言わないけどさ。

男「おーおー大した絆だな。じゃあその女にコイツが死ぬところを見届けてもらおうか」

男はポケットからナイフを取り出してこちらに向けて来た。いや反則だろ。

そんだけ体格良さそうなのに武器使うとかないわー。

ピンチだと言うのに俺はこんなくだらない事を考えていた。

まあこの賭けは俺の勝ちみたいだしな。自然と口元が緩んでしまった俺を見た男が、

男「何笑ってんだよ?こいつが!死ねえー!」

男がナイフを振りかぶってくるのと同時に俺の横に一人の男が飛んできた。つてかあぶねーよ俺に当たったらどうするつもりだったんだよ。

魁翔「あぁーもうおせーよ海未」

園田「すいません探すのに手間取ってしまつて」

海未は穂乃果を捕まえていた男を投げ飛ばしてきたようだ。しかも俺の真横に。いやマジで飛んで来てる時、俺に直撃するんじゃないかとビビつたんすけど。

南「魁翔くん!!」

ことりも来ていたようで俺のそばに来てくれた。あぁー女の子に助けてもらつてるって格好つかねーな俺って。

魁翔「おうありがとーな、けど血が付きそうだろーしあんま近寄らないほうがいいぞ？」

目が覚めると、目の前には知らない部屋の天井があつた。まあ恐らくは病院とかだろう。

これが良くアニメの主人公とかが味わう、気絶した後の天井を見るやつかと俺は訳のわからない事を考えていた。

意識もはつきりとしてきて辺りを見回して見ると俺のベットに寄りかかるように穂乃果が寝ており、少し離れたところの椅子にことりと海未が寄り添うように寝ていた。

ふむ、中良きことは良いことだな眼福ですわ。

うーんと今何時だろうね、辺りが暗いから夜つてことは分かるけど。

取り敢えずケータイケータイつと。

近くに俺のバックが置いてありその中にケータイがあつた。オマケに穂乃果に渡しそびれたプレゼントも。

ふむ、夜の9時か。大分時間が経つちやつてるな。パーティを台無しにしちやつたこ

と謝らないとな。

つとそこで音をたててしまったのが悪かったのか穂乃果を起こしてしまったようだ。半目で俺の顔を見ているのだが、焦点もあつておらず恐らく寝ぼけているのだろう。

魁翔「おはよう穂乃果」

穂乃果「んーおはよう魁翔くん

つて魁翔くん?!?!」

魁翔「ん?どうした?」

穂乃果「どうしたじゃないよ!!なかなか起きないから心配したんだよー!!」

魁翔「あーそうかそうかすまん」

穂乃果「なんか軽いよ!!もう本当に心配したんだから……」

そう言っている穂乃果を見ると、目に涙を溜めている姿が映った。

あー、もうちよいしっかり出来たらなーと悔いが残ってしまう。あの時にもう少し

早く、もう少しうまく出来ていたら結果はかわっていて、穂乃果にこんな顔をさせずに済んだのかもしれないのにとり

魁翔「なんかゴメンな、もうちよつと上手く助けられたら良かったんだけどな何分おれ弱くてさ」

冗談めかした言い方で場を和ませようとしたが、穂乃果の顔は優れず、むしろ曇ったように映る。

穂乃果「違うよ!!穂乃果のせいで魁翔くんに怪我させちゃったのに!!魁翔くんは何も悪くないよ……悪いのは全部私なんだ……」

魁翔「だから気にすんなって、俺はこうして生きてるし穂乃果も無事だったんだし」
穂乃果「でも私のせいで魁翔くんが……」

魁翔「だから違うって、元はと言えば穂乃果一人に飲み物を頼んだ俺も悪かったし」
穂乃果「いやでも!穂乃果だって」

魁翔「あーもう!さつきから自分のせい自分のせいってそんなんでもいいだろ!!」

「悪いのはあの男たちです、はい終わり!!」

穂乃果「違うもん!!あの人も悪かったけどやっぱり私が悪いんだもん!!」

【うゝ】っと二人で一通り睨み合って、何が可笑しかったのかもよく分からないけど二人して笑いあつた。

あの時から久しぶりに見た穂乃果の笑顔は輝いていて、何よりも綺麗に見えた。

魁翔「アハハ、もうじゃあいいよそれで、その代わりコレは貸し1な」

穂乃果「うん!だから今度はいつか絶対に魁翔くんが困った時は穂乃果が絶対に助けてあげるから!!」

魁翔「ああ期待せずに待っておくよ」

なんでさー、っと穂乃果が言っているがそんなの無視して俺は荷物から一つの物を取り出していた。

こんな事になってしまつてすっかり渡しそびれてしまつていたプレゼントだ。

魁翔「ホラっ、穂乃果やるよ」

穂乃果「おっとつとつと、急に投げないでよ」

魁翔「はいはい、色々あつたし渡しそびれた誕生日プレゼントだ」

穂乃果「ホント!!開けて見てもいい!」

魁翔「ああもうお前の物だしご自由にどうぞ」

何かな何かなー、つと嬉しそうにしている穂乃果を見て思わず頬が緩んでしまっている。

やはり穂乃果はさっきの暗い顔よりこっちの顔に方が魅力的だ。まあ本人には死んでもいわねえけどな。だって恥ずかしいじゃん。

穂乃果「コレは麦わら帽子?」

魁翔「見た時に穂乃果に似合いそうだと思つてな、まあもう持つてたみたいけどな」
穂乃果「でも嬉しいよ魁翔くんがくれたプレゼントだもん!!」

そんな恥ずかしいことを笑顔で言われてしまいきつと俺の顔は真っ赤になっている

ことだろう。

幸い傷が多くてガーゼやら何やら貼ってあつて見えにくくなっているのが救いだ。

魁翔「あーそうかい、よかつたな」

穂乃果「うん！ありがとう魁くん!!」

ん？今なんか違和感をかんじたきがしたんだけど気のせいかな？

俺の感覚が間違つてなかつたらなんか名前が変わつてた気がするんだけど。

魁翔「なんかよく聞こえなかつたんだが」

穂乃果「ありがとう魁くん!!」

魁翔「聞き違いじゃなかった……」

穂乃果「だつてこっちの方が呼びやすいし、かわいいじゃん!」

魁翔「いやかわいさなんて求めてないんだけど」

いや、別に嫌なわけじゃないんだけどね、なんか照れくさくないか？

今まで違った名前前で呼ばれるのつてな、なんか分かるだろ？つてか分かつてくささい

よ。

魁翔 「別に今更変えなくてもいいだろ」

穂乃果 「もしかして……ダメだった……？」

あーもう！そんな目をウルウルさせてこつちを見ないでくれ!!

なんか可愛らしいし、愛くるしくてなんでもOKしちゃいそうじゃないか!!
なんか最近どんどん穂乃果に甘くなっている気がする。

魁翔 「別に……いいけど……」

穂乃果 「ありがとう魁くん!!」

そう言いながらあろうことか穂乃果が俺に抱きついてきた。

いや、いつもなら恥ずかしいので離して欲しかったけど、今日は走り回ったり怪我したりで全身がボロボロだったので、身体的にきついんですが。

まあ簡単に言う……

魁翔「マジでそれだけは勘弁してくださいー!!!死ぬーーー!!!」

こんな騒がしくしたせいで、当然ことりや海未も目を覚まして、しかも看護師の人にうるさいと叱られてしまった。しかもそのあとは海未にも怒られてもうへロへロだ。

つてか今回も俺悪くなくねーか？一方的にやられただけなんですけどね。

穂乃果の誕生日は一見、最悪の結果となってしまうたがそれでも最後にこうやって笑顔で入れたことはせめてもの救いだっただろう。

だが今回の事で穂乃果達にも迷惑をかけてしまつて、改めて俺とあいつらとの関係を見直す必要があるかもしれないと感じた。

俺がいるせいで良くないことが起きるなら、俺はあの中に居るべきではないだろう。

もしそうなら、俺はどうするべきなのだろうか。

答えはまだ出ない

14話 夏休みのとある日

魁翔「あちい……………」

どうも魁翔です!!

海に行つてから結構な日にちが立ち今は無事家にて生活しています。入院している間は穂乃果達3人が何度もお見舞いに来てくれたのは正直嬉しかった。けどな穂乃果、毎回騒ぎすぎで俺が看護師の人に怒られてるんだからもうちよつと静かにして欲しかったな。

無事退院したけどまだ頭に包帯はついており痛々しさが残っている。

まあそれは置いて、今日も今日とて夏休み中なのですが、この茹だるような暑さの中では何もやる気が出ません。つかマジで何なんだよこの暑さはヒデリなのかな?ソーラービームとかが1ターンで撃てちゃうのかな?

どこのメガリザードンだよ。ちなみに僕はYの方がかっこいいので好きです。

……………何の話だよ

くだらない事は置いておいて、俺は部屋に居るのだがこれが暑すぎる。どのくらい暑いかと言うとマジヤバってくらい暑い。

……もう語彙力すらなくなってきたわ。

別に冷房をつけちゃいけないわけだが、電気代の事もあるしおじさん達に遠慮してしまいつけてないわけだ。

だがこの暑さは本格的にマズイ。マジで頭が沸騰しそうな勢いだ。

魁翔「どこか出かけるか……って言っても涼しいところは……うん図書館でいいわ」

善は急げと言ったところだろうか、決めたら即準備に取り掛かる。って言っても着替えて財布とケータイぐらいしか準備をする事はないのだがな。

いざ準備が整い外に出ると、部屋の中とは違い直射日光に当たるため室内とは比べ物にならない暑さだ。

道路は真夏の日差しが照りつけ道路の上には陽炎が見える。ってか最近知ったけど陽炎って大気の密度の違いで出来るんですね。

まあ何が言いたいかと言うと、頭が痛いしめまいがしそうなほど暑いってことだな。

魁翔「取り敢えずさっさと行くか」

行くか、という声と同時にレッツゴーといった感じで手を突き上げるが、もちろん返事をしてくれる人もいなければ一緒に手を突き上げてくれる人もいなかった。

なんとも言えない虚しさに包まれながらも俺は目的地である図書館へと歩みを進めた。

—————

図書館へと入ると外の世界とは打って変わって冷ややかな冷気が漂う空間となっており、外で加熱されていた体は一気に冷たさを帯びていった。

中の空間は外の喧騒が嘘かのように静まりかえって、それもこの冷たさを醸し出している一因なのかもしれない。

さてと来たのはいいものの、別に読みたい本があるわけでもないしテキトーにぶらつこうかと考えていた。

魁翔「あれ？あれはもしかして……」

見覚えのある髪型の子を見かけたので少し驚かせてやろうと思ひ俺は気配を消してその子の横へと近づいた。

魁翔「あのーお隣よろしいでしょうか？」

西木野「別に構いま…：うえええ！ちよつと!?!急に出てこないでよ!!」

魁翔「ハイハイ図書館ではお静かに」

俺が言ったことで周りの人から注目されている事に気付いた真姫は顔を真っ赤にしながら小さくお辞儀をして、再び俺へと振り向くと鋭い目つきで睨んできた。

ひえーこんな鋭い目で睨みつけられたら防御力が低下しちゃうよ。

西木野 「誰のせいだと思ってるのよ!!」

魁翔 「え？俺のせいなの？」

西木野 「当たり前でしょーが!!」

ええーべつに俺そんなに悪くない？

こつそり忍び寄ってお隣いのですかって話しかけただけじゃん。

うん、べつに悪くない俺。

はあーと真姫はため息をつくると再び視線を下に戻すと、俺と話すことで中断していた勉強を再開した。

俺はやる事ないし本を読む気にもならない。まあだから真姫に構ってもらうことにした。

魁翔 「なあ何してるの？」

西木野 「見たらわかるでしょう勉強よ、ってか何でそんな包帯をつけてんのよ？」

魁翔 「でつかい蚊に刺されたんだよ。ってか暇なんだよなー」

西木野 「そう、帰ればいいじゃない」

もうちよい心配してくれても良いんじゃないですかね真姫さんや？

魁翔「暑いからそれは嫌なんだよな」

西木野「どうでもいいから私の邪魔をしないでくれる」

相変わらずのツンツンつぶりだなー真姫は。いい加減デレを見せてほしいものだ、それに俺に対してのツンが毎度ながら強いんじゃないかと思う。

つとそこで真姫がやっている勉強をボーと見ていると間違えに気付いた。

指摘したらしたで余計なお世話って怒られるかもしれないが、真姫もそれに気付いて様子もないのでお節介を焼かせてもらうことにした。

魁翔「そこの問3の問題間違えてるぞ」

西木野「うえええ！な、なにが間違ってるのよ!!」

本日二度目の独特な声をあげたかと思うと、机に拳を叩きつけながら立ち上がるものだから当然またもや周りの人からの注目を浴びてしまい真姫は周りの人にペコペコと

お辞儀をしていた。

そしてまたもや、キツと俺の方を睨みつけてきた。

魁翔「いやいや今度こそ俺のせいじゃないだろ」

西木野「うーうーそうだけど……」

魁翔「はいはいそれは悪かったな」

せつかく指摘してあげたのに怒られてしまったのでシユンとした感じでいじけてみた。まあ本当にいじけてる訳じゃないけどな。

ボーとまた真姫の方を見つめてみたが、先ほどとは違い何かそわそわしている様子だ。

ふむ。そわそわしているなら考えれることは一つだな。きつとあれだろう。

魁翔「真姫」

西木野「な、何よ？」

魁翔「トイレならあつちの道の突き当たりにあるぞ」

この後またもや真姫に叫ばれるわ怒られるわ睨まれるわの3コンボを受けてしまった。

せつかく心配してあげたのに何がいけなかったのだろうか謎だ。

真姫さまのありがたいお言葉（お叱り）を受けた後、真姫が先程そわそわしていた理由が俺が指摘した間違っていた問題を教えて欲しいとのことだ。が判明したので只今は先生として働いている所存であります。

まあ教えるって言っても元から賢い子だしほとんど教えることなんてないんだけどな。

ちなみに教えられるのは文系だけだからな？理数系なんてむしろ中学生に教えてもらえれるレベルだしな。

魁翔「で、ここは少し分かりづらいけど……

まあその分、文系は問題なく教えられるレベルなのでちゃんと教えてあげられるのだけだな。

勉強している真姫の横顔をチラッと見てみると真剣な顔で話を聞きながら取り組んでいる。こう見ると顔は美人なのに性格がキツイなとつい思いってしまう。

まあそっち系の人はこういうSっ気のある人がいいのかな？

西木野「ちょっと聞いてるの？」

魁翔「ん？どうしたんだ？」

西木野「こここのとこ教えてほしいんだけど」

おつとくだらない事を考えていたらいつの間にか自分の思考の中に入り込んでいたようだ。

真姫に話しかけられていても気づかないほどに。

西木野「しかし本当に文系だけはスゴいわね」

魁翔「だけとは失礼なやつだな」

西木野「じゃあ数学も教えてもらおうかしら？」

魁翔「やはり嘘でしたごめんなさい」

俺は年下の女の子に公共施設にてそれは綺麗なお辞儀をした。流石にここで土下座は憚られるので。

え？お辞儀もどうかと思うって？

ふっ！俺はプライドなんてゴミ箱に捨ててきたのさ！

……全然カッコつけるところではないなこれ。

魁翔「まあ理数系なんて社会に出ても使わないし必要ないしな」

西木野「屁理屈ね」

魁翔「うぐっ！」

だって計算も物理もそんなもん専門分野行かない限りは必要ないじゃん。つてかそう考えると社会系統も国語とかもなにも必要ないな。つまり勉強なんて必要ないって事だな。

つまり勉強なんかせずに遊びよくのが最適解ってことだな。

西木野「確かに必要ない知識も身につけさせられるのかも知れないけど、その努力をした過程が大事なのよ？」

魁翔「はいはいそうですねー」

俺が話を途中で遮って無理やり終わらしてしまったので少し不機嫌そうな様子が隣

から伝わってくるが知らないふりをしよう。

それにしても時計を見てみたらもう昼時となっていた。流石に朝からなにも食っていないのでお腹が減りすぎてグロッキーな状態になりつつある。

魁翔「なあ真姫、これから暇か？」

西木野「特にやることはないけど、どうしたのよ？」

魁翔「いや腹減ったから飯でもどうかかなーっと思っただけ」

西木野「別に良いわよちよっと思ちなさい」

そう言うと手際よく勉強道具をバッグの中にしまいこんでいった。

真姫の準備が終わったところで俺たちは立ち上がり図書館を後にした。

さてと誘ったのは良いものの別に何かを食いたいわけでもないんだな。

魁翔「さてお嬢様なにが食べたいでしょうか？パスタですか？ペペロンチーノですか？カルボナーラですか？タピオカですか？」

西木野「ほとんど選択肢ないし何で麺類ばつかなのよ、ってか最後のはご飯に食べるものでもないでしょ！」

魁翔「いやオシヤレな食べ物なんて思いつかなかったんで、でなにが良いでしょうか？できれば何百万もしないお店がいいのですが」

西木野「そんなお店なんて行かないわよ、あなたのオススメでいいわよ」

うーん、俺のオススメか。真姫をラーメン屋とかに連れて行ってみると面白そうだが、初めてだとあの雰囲気はキツイだろうし流石にそこはやめておくか。

と、なるとファミレスとかファーストフードとかが次の候補か。

まあ俺がハンバーガーとか食いたい気分だしあの某チェーン店にでも行くか。

魁翔「よし！じゃあ真姫お嬢様のために絶品料理の店にでも行きますか!!」

西木野「とゆーかさつきからそのお嬢様呼びするのをやめなさいよ!!」

魁翔「え、だってお嬢様じゃん」

西木野「もうイミワカンナイ！さつきと行くわよ!!」

毎度お馴染みの独特の怒り声を発して俺の前を一人でズカズカと歩き出してしまった。つてかあの子どもどこに行くか分かってないのにどこに向かってんだ？

あ、顔赤くして戻ってきた。真姫の好きなトマトのように赤いな。いぎ一人で歩き出したけど分からなくて恥ずかしさを抑えながら戻ってきたんだな。

西木野「ぼやぼやしてないでさっさと案内しなさいよ!!」

魁翔「はいはいお嬢様」

西木野「だからお嬢様禁止!!」

魁翔「へいへいほら行くぞ」

西木野「あ!ちよつと待ちなさいよー!」

なんか後ろから聞こえるけど俺は無視して突き進む。どうせすぐに追いつくだろうしな。

魁翔「うーん今日は何を食おうかねー」

そう呟きながら俺は某ファーストフード店のアプリを開きクーポン券を物色する。

テリヤキにチーズ、フィレオも捨てがたいな。うーん悩みどころだな。

俺が携帯を見ながら唸っているのを疑問に思ったのか不思議そうな顔をして真姫が尋ねてくる。

西木野「さつきから何を見てるのよ？」

魁翔「あーこれか？今から行こうと思ってる店のネットクーポンだよ」

西木野「へえー最近はこのなんもあるのね、ってどこに連れて行かれるかと思ったらファストフードなの？」

魁翔「まあお金持ちには無縁のものかもね、高級な店なんてクーポンないだろうし。ってか別にいいだろ美味しいし。それにこういう店あんまり行かないだろ？」

西木野「べ、別に私だっていろいろな店ぐらい行くわよ！」

魁翔「はいはいほら見てみ、どれか食いたいのあるか？」

まったくもおーなどとブツクサ言いながらも俺の携帯を覗き込んでくる真姫。ってか見るのはいいんだけど近づきすぎなんですけど。ちよつと離れていただきませんか？

俺の持っている携帯を覗き込むような形になっているため、俺の顔の目の前には真姫

の後頭部がきている。艶やかな赤色の綺麗な髪は毛先がカールしており真姫の上品な雰囲気醸し出しており、なんだか高級そうなシャンプールの匂いもしてくる。

……俺は何を考えているのだろう変態なのかな？

でもついつい考えちゃう！男の子だもん!!

うん気持ち悪いなこれ。

西木野「これを食べて見たいわね」

気がつくとも真姫は食べたいものを選んでいてそして、店の前に気づいていた。俺がしようもない葛藤をしているうちにこんな歩いてきていたようだ。

魁翔「りよーかいつと、買ってきてやるから真姫はテキトーに席に座っていいぞ」

俺は真姫から逃げるように距離を取りそのままレジの方へと早足で向かった。

魁翔「すいませーん、これとこれのセットをください」

?? 「はーい少々お待ちください」

俺はケータイに表示されているクーポンの番号を見せて注文を終えると、やることもなくボーと店内の上にあるメニューなどを見ていた。

やがてメニューを見終わると自然と、視線は下の方へと下がっていき、やがて店員さんと目が合った。

目が合ったというよりはずっと見られていたようだ。しかも見知った顔の店員に。

魁翔 「にこっち先輩!？」

矢澤 「遅すぎよ!! 何で今まで気づかなかったのよ!!」

魁翔 「いやあーちっさすぎて気づきませんでしたわ、ってかバイトですか?」

矢澤 「ちっさいのは関係ないでしょうが!! はあー、そうよ夏休みだしバイト中よ」

魁翔 「へえー大変ですね」

矢澤 「そうよ宇宙N.O.1アイドルはいつも忙しいのよ!!」

魁翔「バイトで忙しいアイドルはあまり見たくないっすね…」

矢澤「余計なお世話よ!!ほらはやくこれ持って彼女とイチャイチャしてなさい!!」

魁翔「今聞き捨てならない言葉が聞こえたのですがおれの幻聴でしょうか?」

俺と真姫がカップルってか?それはヤバイぞ、罵倒される毎日がしか見えないな。先ほども言ったが俺はそっち系じゃないからな。

矢澤「さつき仲よさそうに入ってきたじゃない」

魁翔「あれは知り合いの娘さんですよ、ってか中学生ですし」

矢澤「え!?あんたロリコンだったの……?」

魁翔「ちよつと黙ってていただけませんかね?」

こんな人のいるところでロリコン呼ばわりされたら俺が社会的に死んじゃうんだけど。まあ身体はもれなく死にかけなんだけどねテヘペロっ!

矢澤「ってかあんたその頭どうしたのよ?」

魁翔「あーこれっすか、蚊に刺されたんすよ」

矢澤「ふーんまあどうでもいいけど」

少しドライすぎませんか？さっきの真姫といい俺への心配が皆無なのは気のせい
ですかね？

少し拗ねたようにそうですか、とだけ伝えて商品を手に持ち真姫のいる席の方へと
向かった。

で向かって見たのはいいものの、真姫はなぜか席に座らずにオロオロとしていた。な
んか面白いのもう少しほっておきたいが確実にある後で怒られるのでさっさと迎え
にいきますか。

魁翔「真姫なにしてんの？」

西木野「べ、別にどうしたら良いのか分からなかったわけじゃないんだからね!!」

魁翔「いやもう自分で全部言ってるじゃん」

西木野「だって……店員さんが案内してくれないなんて知らなかったし……」

店員さんが案内してくれる店しか知らないなんてどんだけリッチなんだよ。これが格差社会つてやつか。

違うか。違うのか？分からんな。

魁翔「ほらじゃあここにも座つてさつさと食うぞ、もう腹減ったわ」

西木野「う、うん……」

さつそく二人で席について食事を始めたが真姫は思い出したかのように、

西木野「そういえばこれいくらだったの？今払うわ」

魁翔「あー別に良いよこんぐらい、大人しく奢られとけ」

西木野「いいわよ私の方がお金持つてるんだから」

魁翔「うう！そう言われるとあれだが……先輩としてそして男としての意地を守るために！！」

西木野「なんでそんなしょうもない意地を張るのよ……まあじゃあ大人しく奢られとくわ、ふふっありがと！」

一人暮らしの身としては二人分の食事を払うのは大分痛い、真姫の貴重な笑顔も拝めたことだし今回はそれでいいかな。

その後二人で食事を進めていき今は、二人とも食事を終え少し休憩しているが先ほど真姫に勉強を教えている時に気になった事を尋ねてみた。

魁翔「ところで真姫って高校どこに行くんだ？」

西木野「そうね、今のところは音ノ木坂に行く予定だけど」

魁翔「へえーもつと良いところに行くかと思つてたけど」

西木野「別に勉強なんてどこでも出来るわよ」

魁翔「まあ確かにそりやそうだ、まあ暇だったら文系なら教えてやるよ」

西木野「どちらかと言えば理数系を教えて欲しいのだけれど……」

まあ確かに医学系の道に行くなら理数系だわな。でも残念ながらさつきも言ったようにそつちはからつきしなので悪しからず。

こうやって未来の自分の後輩が出来ることが分かったのが今日の収穫だった。まあたまにはこういう日常も悪くないのかね？

15話 巫女さんと

8月も中旬を迎え、夏も本番と告げるような暑さを感じながら俺は駅の前である人物を待っていた。

駅前是人でごった返しており何倍もの暑さを感じてしまっていて正直言えば今すぐ逃げ出したいのだけれど、そうすると後が怖いのでおとなしく待つ事としよう。

現在は正午を軽く回ったところを俺の腕時計は示しており集合時間の12時半まではまだ時間に余裕がある状態だ。けれどこういう男女の待ち合わせでは男が必ず早くきて来ておいて、女が来て「ごめん! まった?」という言葉に「今来たところだよ」と優しく声をかけるのが定番と決まっている。なので例に見習って俺も少し早めに来てお待ちしているわけですが

……まあまだ時間には20分以上余裕がある訳だがな。

ってか、今日はまた何で俺を呼んだのだろうか? お昼ご飯は食べてこなくても良いって言われたので食べて来てないのだが、つまり何かを食べに行くという事なのだろうか。

そこまで俺の思考が回っていた最中に突如俺の視界が闇に包まれた。

：闇に包まれたって何かカツコいいなと思っただけど、よくよく考えたらチョット痛いな。

まあそれはさておき、感触からして誰かが俺の目に手を当てて視界を遮ってるのだろう。

?? 「だ〜れだ!？」

魁翔 「これで俺が思っただけの人以外だったら、それはそれでホラーなんすけど」

いや、だって考えてみろって。約束した人以外だったらそんなの変質者とかの類だろうが。知らないおっさんとかだったらホラーすぎだろ。まあ他の知り合いの可能性もあるかもしれないけど。って言ってもやってきそうな人なんて穂乃果とことりぐらいしか思いつかん。

魁翔 「つてかいい加減離してくれないですかね？暑いですし。」

東條「ありや？バレちゃったかーってどうしたの？怪我でもした？」
希先輩

あれから時間も立ち傷は結構癒えたので、現在は小さいカットバン程度しか貼っていない。まあそれでも顔に貼られてたら気になりはするのだろう。

ってか近い近い！どんだけ顔を近づけてくるんですか！傷口の部分触らないで！！
チヨツトまだ痛いのでやめて！

俺は逃げるように後ずさりをして希先輩の手から逃れた。全くほんとうにやめてほしいものだ俺の理性がやられちゃうわ。

魁翔「蚊に刺さたんですよ」

俺はぶつきらぼうに自分の心を落ち着かせながら言った。

東條 「蚊に刺されたからってそうなるのは無理があるんじゃないかな？」

魁翔 「でつかい蚊だったんすよ」

東條 「ふーんまあそういう事にしといたるわ」

まあこの人の場合は言わなくて分かっている可能性があるので怖い。この人はいつも俺の心を読んでくるからな。

東條 「まあ海ではお疲れ様やったな」

魁翔 「一応聞きますけど、本当は分かっています？」

東條 「ふふっ！スピリチュアルやね！」

いやどういふことですかねそれは？確かにスピリチュアルだけどね。

ってか何でこの人は知ってるんだよ。コエーワ。

もうこの人が何知ってても驚かない気がするわ。

東條「まあという事で頑張った魁翔くんのために今日はお昼ご飯を奢らせてあげようと思います!!」

魁翔「今俺の聞き間違いじゃなければ、奢らせてあげると聞こえたのですが？奢ってあげるのと言いだえたわけではありませんか？」

東條「もおー！ウチがそんな言い間違いするわけないやんくー！」

魁翔「できれば言い間違いであつて欲しかったのですけど……」

トボトボと歩き出した俺の後ろから希先輩も追いかけるように隣へときた。

「冗談やからなく」つと声をかけてくれてようやく揶揄われていることに気づいた。まあ昼飯一食ぐらいなら奢れないことはないが、一人暮らしかつ趣味にお金を費やしているので余裕がないというのも事実だ。

「つてか今更だけど何しに俺は呼ばれたんだ？昼飯つていうのは分かるけどなぜに俺？」

魁翔「今日はどうしたんですか？わざわざ俺なんか呼んで？」

東條「うーん？暇つぶしかな？」

魁翔「それこそ俺である必要ありますかね？」

東條「今日占いで後輩の男の子と12時半に時半に待ち合わせしてお出かけするといことあるかもって言ってたけんな」

魁翔「時間がピンポイント!!どこの占いですか!？」

東條「朝の4時44分の死兆星占いやで」

魁翔「時間が不吉だなおい!!名前のセンスも安直!!その割には占いの内容とのギャップがすごい!!」

東條「せやろ?ギャップ萌えってやつやんな」

魁翔「それは絶対に違うと思います!!」

愉快そうにケラケラと笑っている希先輩を見てため息が漏れてしまう。さっきからツツコミっぱなしで少々息も上がっており少し息が苦しい。まあこのぐらいならそこまでの問題もないが。

それにしてもこの人は本当に不思議な人だとおもう。コロコロと表情を変えて喋る。人との距離感の取り方も上手く決して不快な感じはしない。

東條「あー魁翔くんはホンマオモロイな〜」

魁翔「やられてるこっちはたまったもんじゃありませんけどね。ところで話戻しますけどどこに行くんですか？」

東條「あれ？言うてへんかったっけ？」

魁翔「はい、まあ昼飯でも食べるのかと思ってきましたけど」

東條「うーん、半分正解で半分不正解ってとこやね」

魁翔「つて事は飯を食べるし、他にもする事がある？」

東條「そうやで〜」

魁翔「へえー飯は行くところ決まってるんすか？」

東條「私は何でも良いけど、魁翔くんは何か食べたいものはない？」

何でも良いって一番困るやつすよね。

世の中の男の皆さん、奥さんに今日の晩飯なにが良いとか聞かれて何でも良いって言うてイラツとするらしいから気をつけてね!!最悪その場合、米と梅干しだけとか出て来る可能性があるの要注意です!!

まあ、冗談は置いて、俺も別段食いたいものがあるわけじゃないしなく〜。

つて事は希先輩が好きそうなものを……希先輩って何が好きなんだ？まあとりあえ

ず……

魁翔 「じゃあ、カチャトーラ？ エスカページュ？ シチリアーナとかにしますか？」

東條 「いやいや一個も分からへんのやけど」

魁翔 「ええ!! 希先輩ならカタカナのお洒落な食べ物詳しいと思ったのに!!」

東條 「私への偏見がすごいなあ! ってかホンマに何なんそれ？」

魁翔 「え? 知らないっすけど」

東條 「じゃあ何でそんなん知つとるんよ……」

魁翔 「いやぁーネタとして使えろと思つて」

この前、真姫との会話の時にペペロンチーノとかタピオカとか普通のお洒落そうなものしか言えなかったからなく、今度会った時に使つてやろうと覚えていたらこんなところで使えるなんて!!

まあ全然通じなかったんだけどな!! 真姫ならワンチャン分かるのかね??

……今度聞いてみよ……

東條 「魁翔くんは暇人なんやね……」

魁翔 「いやあーそうでもないですよ？夏休み中もゲームで忙しかつたですし！」

東條 「魁翔くんは暇人なんやね……」

魁翔 「あれっ？俺の声聞こえてないのかな？おーい聞こえますか〜」

東條 「大丈夫やで聞こえとるけん。聞こえた上で魁翔くんは暇人なんやねって言ったけん」

魁翔 「うわあ！辛辣!!」

東條 「まあ魁翔くんがやる事なさ過ぎて可哀想な話は置いといて、そこにあるカフェでお昼ご飯にせえへん？」

魁翔 「もう言い方に悪意しか感じないんすけどね!!別に俺はどこでも良いっすよ」

希先輩が言うカフェの方へと顔を向けると、そこには如何にもリア充どもが蔓延つて
そうなカフェが目に入った。

何て言うか、俺だったら一人では決して行きそうにないような店なのだが……

……なんか武者震いがしてきたな、決して普段行かないような所だからって緊張してるわけじゃないんだからね!!

魁翔「そそそそそれでは、いきまちようーかか!」

東條「どしたん急に!?壊れたロボットみたいになつとるやん!!」

魁翔「なななにをいいつてるのかわわわかりりませせんねねねー」

東條「もう何を言ってるかすら分からのやけど……」

くそ!!これがリア充どもから放たれるオーラによる攻撃か!!よもや俺にこれほどまでのダメージを与えるとは!!これは俺の封印されし小指の封印を解くとき!!
……チョット自分でも意味がわからないな。

東條「もうええから早よいくよ?」

魁翔「いやチョット心の準備がつて、ちよい手を引つ張らないで!」

希先輩は俺の手を掴むとグイグイと引っ張って行きカフェの中へと強制連行されていく。

もうちよいだけ心の準備する時間頂けないでしょうか？具体的には後30分ぐらい。

え？そんなに待てないって？

はいすみません

カフェの中へと入ると、さつきまで居た外の空間とは打って変わり、切り離された別の空間のようにヒンヤリとしており少し鳥肌が立つほどに冷えている。むしろ効きすぎな気がするんですけど。暑いのはよりかはマシだとは思うけど、それにしても寒すぎやありませんかね？

まあそれは置いといて、俺たち二人は窓際の席に案内をされて椅子に腰を下ろしている。先ほど注文の方も終わらせて今は目の前に座っている希先輩と談笑中である。

余談だが、注文する時うまく言えず囁んでしまい恥ずかしい思いをしたのは一生忘れられない思い出だろう。

東條「なんかこうしてるとデートしてみたいやな！」

魁翔「いやなんですか、せいぜい兄弟のお買い物程度にしか見えないでしょう」

東條「なんやつれないなく、そんなんじや女の子からモテへんで？」

魁翔「別にそんなんラノベの主人公じゃあるまいし、ノリが良くてモテるわけないじゃないですか」

東條「まあ魁翔くんは可愛い女の子を三人もいつも侍らせているけんモテる必要もないのかな?」

喋る直前に悪い顔をしたと思ったら、とんでもない誤解を招くような言い方をしてくれますねこの人は。侍らせてるとか、それこそ何処のラノベの主人公だよ。

つてかどちらかと言うと、いつも海未にしばかれてるから俺の方が立場が下な気がするんだよなく悲しいなく。

魁翔「侍らせてるとか人聞きが悪いですね、つてか何でそんな事知ってるんすか?」

そして純粋に疑問に思ったのだが、あの三人といる時にこの人と会ったことはない気がするんだけど?まあ遠くから見られたっていう可能性もあるんだけど。

同じ学校だし見られてても不思議ではないが、この人の場合、千里眼でも使つてそうでコエーワ。

東條「ふふっ、いつ何処で誰が見てるのか分からへんから気をつけた方がええで？」

魁翔「あらやだストーカーさんかしら？」

東條「魁翔くんがして欲しいのなら別に構わへんけど？」

魁翔「ヤメテクダサイ」

下らない会話をしていると頼んだ料理がテーブルへと並べられて食べ始めた。

因みに俺が頼んだのはペペロンチーノです。噛んでしまつてペペロンチーノと言つてしまいました。はい死にたかったです。

希先輩は焼肉定食だ。……ここカフェだね？つてかチヨイスが意外過ぎるだろ。店員さんも運んできた料理を逆にしておいて行つちやつたし。

あの後、食事を終わらせた俺たちは店を出て外の通りを歩いていった。何でも希先輩が行きたい場所があるというそうので俺は黙って付いて行っている。別に本当に黙っているわけではありませんけどね。

因みに先ほどのお昼ご飯はそれぞれがお金を払いましたとき。…だって一人暮らしだし常にお金はしんどいんだもん！

ちよつとそこの君！男としてどうなんだと思っただろう！！だって仕方ないだろう！ラノベやゲームとかで金なんて溶けていくんだよ！！

東條「どしたん難しい顔して？」

魁翔「男としての葛藤に苛まれてました」

東條「??」

俺の意味不明な言葉は当然のごとく希先輩には理解することはできず、何言ってるんだコイツはといった表情をされた。まあ確かに自分でも何言ってるんだって感じなんだけどさ。

魁翔「ところで何となく聞いてなかったつすけど、何処向かってんすか？」

東條「ふっふっふっ!!それは……ここだー!ー!ー!!!」

魁翔「こ!こ!こ!こは!!?!!
!!!ー!!

次回に続く

魁翔「いや続かねえよー！！！！」
東條「ビツクリした！急になんなん？」
魁翔「なんか突つ込まないといけない気がして……」

何か自分でも分からないけど、変な声が聞こえて突つ込まないという使命感に駆られたと言うますか。

東條「まあ魁翔くんがオカシイのは元からやし別にええか」
魁翔「何か納得されたけど理由が理由だし素直に喜べない！！」
東條「はいでは今回やってきましたのはこちらのライブ会場です」
魁翔「今日の希先輩なんか冷たくないっすか？スルーが多いんですけど、つてライブ

??
」

東條「にこつちが誘ってくれたやつなんやけど、当の本人が用事で来られなくなっちゃったので代理として呼ばれたのが魁翔くんです！っていうかにこつちの知り合いでこういうのが譲れるのが魁翔くんしか思いつかなかったそうです!!」

魁翔「あの人の交友関係の狭さには涙が出そうです……」

あの人は本当に友達がいなのだろうか？クラスでも希先輩以外の人とは話す人はいないのだろうか？

なにそれめっちゃつら。俺もそこまで交友関係は広くはないけどこれはちよつと

……

東條「そんなにこつちの話は置いて取り敢えず中にはいろく」

魁翔「にこつち先輩……」

東條「はいはいいいから入る入るく」

この後みたライブは、やはりと言うべきかスクールアイドルのライブだった。まああの人が行く予定だったやつだしな。因みに見に行ったグループは、なんでもにこっち先輩の最近の一押しของกลุ่มらしくアップテンポな曲などを多く作っており会場全体で盛り上がる事ができた。

今回も俺はノリノリで盛り上がってしまい、息切れで死にそうになってました。まあ毎度のことですね。そんなノリノリの俺を見て若干先輩が引いていたのが傷ついた。
つらい

16話　　夏の最後　前編

魁翔「ハアハア……ハア……」

荒々しくあがる息を押しさえ込みながら、たどたどしい足取りで壁に寄り添いながら己の下肢を動かす。目的の物がある場所へと向かうが、思うように体が動かずなかなか前に歩みが進まない。必死の思いで目的の物を手に持つと一秒でも早くそれを摂取したいがために飲み物を用意せずに、自分の口の中にある水分のみで食道に無理やり流し込んだ。

目的の物を飲み込むと、そのままその場に崩れ落ちるように壁にもたれかかった。それからいくらか時間が経つただろうか。やがて胸を締め付けるような痛みも過ぎ去り、ようやく体の力が抜けていった。

魁翔「ハア……最近はあるまいこなかったのにな……」

昔はよく出ていた発作も、今年度から高校に通いだしてからは一度も起きたことがなかった。検査は定期的には行っており特に大きな変化は起きていなかった。

そう、この前の海に行くまではだ。

あの日、穂乃果を探し回るために走った際に俺の心臓には今までで一番と言っているほどの負荷がかかったらしい。まあ今まで全力で走ったことなんて記憶にないから始めて全力を出したからな。

そのせいか、心臓へのダメージは凄まじく最近では発作が起きることが多くなっている。まあ自業自得と言えばそうなのだが、あの時の行動に決して後悔はない。むしろ人のために死ぬるなら本望みたいなものだ。まあそれを真姫のお父さんの前で言ったら叱られてしまいましたわ。もっと命は大事にしろって。

うーん毎回もう悔いは特にないって言ってんだけどな。

まあそんなかなで最近では発作のせいでこうやって倒れこんでしまうことが多くなっている。まあ幸いにも発作は夜にしかまだ起きておらず、自宅での場合のみなので周りには感づかれていないだろう。こんなことバテて周りから哀れまれるなんてまっぴらだ。

魁翔「さて準備でもするか」

俺は一人でにそう眩くと、先ほどの苦しみの際に額に溜まっていた汗を手の甲で拭き取ると立ち上がり自分の部屋へと向かう。

この夏休みは劇的な変化もイベントもなくもうそろそろ終わりを迎えようとしていた。

まあ、あつたはあつたのだが海での事とかはあまりいい思い出とは言えないようなものであるしな。

なのでそれ以外は特に何事もなく日常は過ぎていった。穂乃果が遊びに乗り込んできたり、ことりとお菓子を食べに行ったり、海未にしばかれたり、希先輩と遊びに行ったり、真姫と食事をしたりと。なんか一つ不穏な物が混じっていたがまあ気にしないでおこう。

そして最後のイベントとして近くの河原で行われる花火大会が今日はある。あまり乗り気ではなかったけれどあの三人に誘われてしまったので結局行く羽目になったしまった。

まずは穂乃果を迎えに行ってから一緒に海未の家へと向かい、そこでことりと海未と合流する予定だ。

先ほどの事も少し休憩しておきたいところだが、あいにく時間は待つてくれないので必要なものだけ持ち家を後にした。

—————

穂乃果 「魁くんおまたせ〜」

魁翔 「いやホント待ったんすけど」

穂乃果 「もう！そこは今来たところだよ！」

魁翔 「いや家の前で30分も待たさせられたし、ってか呼びに来たんだから今来たところ

ろって言ったらおかしいだろーが」

穂乃果が可愛らしくプンスカしているのだが、普通それをするのは俺の方じゃありませんかね？呼びに来てみたら、雪穂に穂乃果はお昼寝中って言われてめっちゃ待たされたんすけど。

つてかこれ絶対に海未に怒られるじゃん。なんだかんだ俺の責任になって俺がめっちゃ怒られるやつじゃん。さつきからメールがめっちゃきてる気がするけどまあ気のせいだと思っておこう。

穂乃果「あ！海未ちゃんから電話だ！」

魁翔「よしっ！穂乃果行くぞ!!時間がヤバそーだし少しでも急ぐために電話に出てる暇なんてないぞ!!」

穂乃果「あ、でも多分来ると、

園田「ほほう、人様をこんだけ待たせておいて電話にも出ないとはいい度胸ですね？」

魁翔「いやこれは違うんですよ海未さん？ちよつとだけあれがあれあれでして」

いやー別に悪気があつて遅刻したわけじゃないんですからね海未さん。決して電話に出るのが怖くて、必死に急いだふりを演出しようとしたわけじゃないですからね？

ですからその拳をしまつてくれませんか？ちよつと怖いんですけど。隣でことりは苦笑いしてるけどお願いだから助けてよ！

園田「へえー、あれがあれとはどれのことなんででしょうかねー？」

魁翔「いやーそれはあれがこれであれになつて、つて痛いんで拳でぐりぐりするのやめて!!」

俺の言い訳にイライラしてきたのか振り上げていた拳を俺の頬に突きつけてグリグリしてきていた。しかもとても良い笑顔をした状態でだ。

つてか頬骨がグリグリされて非常に痛いんだけど！そんなにグリグリされたらリンパの流れが悪くなっちゃって小顔になっちゃおうよ!!」

園田「そうですか、なら顔がなくなるぐらいまでしましょうか」

魁翔「あれ？俺声に出してた？」

園田「そうですね、よっぽど小顔になりたいみたいなのでもっとしてあげましょうか？」

魁翔「いやぁー！」

三分間ほどその後もグリグリされ続けたわけだが、この三分が案外長く非常に長い時間を感じられた。つてか今回も俺悪くないじゃん、何故か俺ばかりいつも怒られるんすけど。

ちなみにリンパの流れを良くする小顔効果つてのはあんなに強くしすぎる必要はないからね！中くらいの方力で皮膚がすこーし伸びるぐらいにさするだけでも十分な効果があるのでみなさんぜひやって見てね！

魁翔 「ううー俺悪くないのに……」

あれから海未の家まで移動してきて、現在ある部屋にて俺は待たされていた。

合流したのに何故再び海未の家まで来たかというところ、それは浴衣の着付けをするからだそう。まあ俺も来てから知ったのだが。って事で女性陣の三人がたは別室にてお着替え中で俺はこの客間にてお待ちをしているってわけだ。

魁翔「それにしても風情があるな」

この和室の感じは何ともワビサビを感じるものなのだろうか。座敷の匂いと言い、なんとも形容しがたいものを感じる。一回でいいからこんないい家に住んでみたいものだ。

部屋の向こうには縁側があり、庭には池や庭園といったものが見える。庭園は丁寧に手入れをされているようで、この家の人の几帳面さと言ったものが垣間見えた。

そして空には今にも落ちそうになっていく夕日が見えた。夏も終わりを迎えようとしており日の入りも少しづつではあるが早くなつて来ており、外からは未だ元気なセミたちが鳴り響いている。ってか夏が終わるっていうのにまだこんなに元気な奴らもいるんだな、その元気を少しでも俺にわけてほしいものだ。

夕方ということもあり気温も暑すぎず寒すぎずと丁度良いものであり、体を横にしているとなつて眠気が襲つて来てしまう。ってか眠すぎるわこれ。

家での発作のこともあり、体が疲れていたのか三人を待っている間に俺は眠りへと誘われて夢の世界へと落ちて行くのだった。

気づけば俺は大きな桜の木の前にいた
ここは何処なのだろうか見覚えはない
そもそも何故こんな場所にいるのだろうか？

視線はいつもよりも低い位置にあり
手や足も小さい

つまりこれは夢の世界

もしかしたら自分の中にある過去の記憶の世界なのだろうか？

………と………ん………

ふと誰かの声が聞こえる

遠くから自分のことを呼ぶような声が聞こえる

けれどはつきりとは聞こえず自分を呼んでいるかどうかはつきりとは分からない
これは誰の声だろうか

お母さんの声だろうか？

—いや 違う—

お父さんの声だろうか？

—いや 違う—

けれど俺は昔の事なんて両親の事しか知らない

だとしたら これは誰の声なのだろうか？

さ……………と……………ん……………!

あ、声が近づいて来ている

どこから聞こえているのかは分からないけれど徐々にではあるけど声が鮮明に聞こえている気がする

頭を周りに振りどこから聞こえているのかを必死に探すけどどこにも誰もいない

…さき……………とくん!……………

あ、また声が聞こえた

声はさつきよりもはつきりと聞こえた

自分と呼ぶ声は誰のものかは分からない

分からないけどとても懐かしい感じがする

これは誰の声だったろうか……………

世界が一瞬消えたかと思うと俺はまた桜の木の目の前にいた
けれど先程とはここは見覚えのある場所だ

俺が数ヶ月前に見た桜

そう学校の桜の木の前に俺は立っていた

また誰かの俺を呼ぶ声が聞こえる

だけどこの声は聞き覚えがある

最近では何回も聞いた声だ

穂乃果「魁くん!!」

勢いよく走ってくる穂乃果に手を振る

そして突進してきそうなので目を閉じて手を広げ受け止める姿勢をしていたがいつまで経ってもその衝撃はこなかった

目を開けてみると穂乃果は既に俺の後ろへと行っていた

そこには自分がいてもう一人の自分が穂乃果を受け止めていた

ああそうか夢だもんな

これから起こるのであろう未来の夢でも見ているのだろうか

あの二人を見る感じ卒業式を終えた直後って感じだろう

そう考えると自分が卒業するまでは生きていけるのかと思い少し安堵する

気づけば向こうの自分は女の子たちと共にいた

見覚えのある子もいれば見たこともない子たちもいる

また制服ではなくスーツの人達もいるので卒業生か誰かだろうか？

みんなと話している自分はとても穏やかに笑っていた

こんなにたくさんに人たちと笑い合えるような未来がくるのだろうか？

もしそうだとしたらそれは本当にあるべき未来なのだろうか？

あそこにいる自分は自分の体の事をみんなに伝えているのだろうか？

もしかしたらあそこにいるみんなと共に生きていこうとする未来を選んだのだろうか？

— 分からない —

何故あんなにも楽しそうにみんなと笑い合っているのだろうか？

— 分からない —

自分はこのまま未来へと生きていっていいのだろうか？

— 分からない —

自分には分からない事だらけだ

考えるだけで自分の頭はオーバーヒートするぐらいまで熱くなり考えることが嫌になつてくる

俺は穂乃果たちと未来へと一緒に進んで生きたいのだろうか？

本当に分からない事だらけだ

気づけば夢の世界の形は壊れていき周りの風景や建物が崩れていつている

くああ夢の終わりかももう少しだけ自分を見ていたかった

くそうすれば答えが見つかったのかもしれない

壊れていく世界の中で意識に霧がかかっていく中目を開けた先には穂乃果がいた
すると穂乃果と目が合い彼女は何かを伝えようと口を開いていた
けれど俺には伝わらずどんどん意識が薄れていく

くああ彼女は何を自分に伝えたかったのだろうかそれだけが気がかりだく

――――

穂乃果「おーい魁くーん!!」

南「ほ、穂乃果ちゃんそんなに叩いちやダメだつてく」

穂乃果「えくだつて魁くん起きないんだもん!」

園田「どいて下さい穂乃果、私が一発で起こして見せます」

南「海未ちゃん！それはさつくくんが死んじやう!!」

気づけば何やら海未が不穏な事をしようとしているのが聞こえてくる。海未にやられると起きるところか永遠の眠りにつきそうなんですけどそれは。

ちなみにことりが俺の呼び方を変えたのは穂乃果に影響されてのことだ。なんか恥ずかしいからやめて欲しいところだけど二人とも辞めてくれる気配はない。

海未は恥ずかしいらしく相変わらずだ。まあ俺的にはそちらの方がよいのだけれど。

魁翔「もう起きてるから大丈夫だよ、つてか穂乃果が叩いてたの地味に痛いんだけど」
穂乃果「あ！魁くんおはよう!!」

目を開けて返事をして見るとそこには浴衣を着つけた三人が目の前にいた。そういえば三人が着付けをしている時間に待っていたら……あれ何してたんだっけ？

穂乃果「あれ？魁くんどうしたの？」

魁翔「どうしたって何のことだ？」

南「だってさつくん……」

園田「何で泣いているのですか……？」

魁翔「……え？」

自分の目の元へと手の甲を持っていくと、たしかに自分は涙を流していた。自分は確かに泣いていたようだ。

けれども何でだろう？何か大事な事を忘れている気……

魁翔「そうだ……誰かに呼ばれててそれから……」

なんだっただろうか？どこかで誰かに呼ばれていた気がするけど、そこから先が思い出せない。何か大事な事を見ていた気がするけれど全然思い出せない。

穂乃果「大丈夫魁くん??もしかして私が叩き過ぎちゃったのが痛かった??」

魁翔「あくそうじやないから大丈夫だって、ただ………」

穂乃果「ただ?」

魁翔「……いや何でもない、ちよつと変な夢を見てただけだよ」

!!
そう言うのと俺は立ち上がり三人の前に立つ。させと、今日は祭りだし楽しみますからね

先ほどまでモヤモヤしていた気持ちを吹き飛ばしたいので、無理やりにもこれから
の楽しい事を考えて先ほどまでの思考を打ち切った。

KOTORI HAPPY BIRTHDAY 前半

魁翔 「こどりの誕生日?」

園田 「はい。なのでその日は四人で誕生日会をしようかと思うのですけど大丈夫ですか?」

魁翔 「まあ多分大丈夫だけどさ」

穂乃果 「よーし!じゃあ張り切ってこー!!」

なんか展開早くないっすかね? 付いていけないの俺だけっすか? そうっすか。

それに、張り切ってこーって、まだ結構誕生日まで日にちあるのに今から張り切ってどうするんだよ。

そんなに張り切っていると張り切り過ぎちゃって張り切れちゃうぞ。

…ちよつと自分でも何言ってるのかわからないな。

ってかプレゼント何にしたら良いだろうな……
女神であることに何をプレゼントするべきなのだろうか??
あれ？天使だっけ？まあどっちでもいいか。

—————

現在シヨッピングモールにて俺は悩んでいた。フードコートに座り、某人類補完計画をしようとしていたあの人様に、手の甲に顎を乗せて。特に他意があるわけではないがなんかやりたくなかったのでやってみた。

穂乃果の時みたいに、実際に見て回ったら何かピンと来るかもと思って来て見たが特にこれと言ったものは見当たらない。

見るのを諦めてことりについて考え、プレゼントを模索してみたものの……

ことりの好きなものと言えば、チーズケーキ……海未……枕……服……穂乃果……

うむ！考えても思考がよく分からない方に行ってる気がするわ!!

つてかも、あの二人にリボン結んで渡してみるか？これ名案じゃね??こんなくたらない事しか思いつかず、ただ時間だけが過ぎて行くだけの俺は打ちひしがれていた。

これはマズイぞ、もう誕生日まで時間もないし悩んでる暇はないぞ。くそ！こうなったら最終手段を使うしかないのか?!

いやだがこれは余りにも危険だ。どのくらい危険かというと、不機嫌な海未のほむまを勝手に食べちゃった時並みに危険だぞ。

ちなみにその時はマジで死にかけてたわ。僕はその時に、海未のほむまんには手を出さないと誓いました。

南「何が危険なの?」

魁翔「これをやったら俺の評価が下がりこりに嫌われてしまう危険性もあるって事だな。まあそれは冗談としてもあまりいい手ではないな、格好がつかなさすぎて」

俺が今考えていることは、もう諦めて欲しいものを直接聞いちやおう作戦!!

略してMMT作戦だ!!

うん、略す位置が変すぎて検査の方法みたいな名前になっちゃってるな。

この手段は相手の欲しいものを渡す上では良いだろうがサプライズ性もなくなるからなー。

でもこのままだと何も渡さないとい論外なことになりうるし、かといって中途半端なもの渡したらそれはそれで俺の印象がなー。もうー全然思いつかん!!

南「?? 何のことか分からないけど私はさつくんのこと嫌いにならないよ?」

魁翔「確かにことりは天使だからそんな事ないだろうけどな〜……………つて、んん??」

南「そんなこと言われると照れちゃうよ〜」

魁翔「……………ことりいつからいたんだ?」

南「えつと……………まずいぞ時間がないぞ!とか言ってる辺りからかな〜」

魁翔「それなら早く声をかけてくれよ……………」

はぁー結構前から聞かれてるし…………

つてか心の中で考えてたつもりが声に出たのかよ恥ずかし!!気づいた時点で声をかけて欲しかったんですけどね…………

ていうか聞こえてったことは…………

俺は恐る恐る大事な事を確認するために口を開いた。

魁翔「聞いてたつてことは今俺が何に悩んでいるかも分かっている…………?」

南「えつと……………まあ…、アハハ……………」

はぁーっと、再度俺はため息が漏れてしまった。まあ漏れてしまうのも仕方ないだろう。極秘にプレゼントを探しに来たところを本人に見つかってはしまうとは何とも気持ちまずい。

南「あのね！私別にプレゼントなんかなくても祝ってもらえるだけで嬉しいから!!」

魁翔「ゴハツ!!」

南「さつくん?!?!」

くっ!!天使かよ!!

あれ?女神か??

どっちでも関係ないけどな!

もう気を使われちゃってる自分が情けないよ!!こんな可愛い女の子に気を使わせちゃって何が男だ!!絶対に喜ばせてみせないとな!!それじゃないと男が廃るってもんよ!!

俺の突然の吐血にオロオロしていることを尻目に俺は、ことりの目の前までいき両肩を掴んだ。

えっ、ということりの驚きの声が聞こえた気がしたかもしれないがこの時の俺は全然耳に入ってくる様な状態でもなく、ただことりのために頑張ろうという気持ちでいっぱいだった。

南「さ、さつくん……??」

魁翔「ことり!!俺は絶対にお前を喜ばせて見せるからな!!幸せにして見せるからな!!」

南「さ、さつくん!ここお店!!」

魁翔「……………あつ」

あの後ことりの手を引き、逃げる様にその場を後にしたのは言うまでもないだろう。気づいた時には周りから歓声などが聞こえてきて人だかりが出来てしまっていた。

後々考えたらあそこってフードコートだからそれなりに人がいるわな。

ことりと顔を真っ赤にしながらショッピングモールを後にした俺たちは顔を合わせる事が出来ず、そのまま解散となり家に帰った。

ってか今更なんだけどあの時、ことりの手を引いてたんだよな。今考えると緊張で手汗出て来たわ。

結局、誕生日のプレゼントも決まらず何をしにあそこまで行ったのか分からない結果となってしまうた。まあことりに会えたので良しとするか。

魁翔「まあそんな訳ですよ、という事で何かいいアイデア思いつきませんか？ つか

早く思いついてください」

矢澤「いきなり来たかと思えば急にノロケ話を始めて何のつもりなのかしら……？」

ところ変わって現在俺はアイドル研究部の部室にいる。もちろん今俺の目の前に座っているのは断崖絶壁で有名なこにーこと矢澤にこ先輩だ。

通称にこっち先輩、現在は苛立っているのか少し睨みつけるかの様に俺のことを見ているがアイドルとしてのスイッチが入れば魅力的な笑顔を振りまくスクールアイドルとなる。まあ現在はアイドル活動をしてないみたいだけど。

矢澤「ものすごく失礼な言葉が聞こえた気がするし、その通称で呼んでくるやつはあんたと希だけどね」

魁翔「そんな！にこっち先輩に名前を呼んでくれる友達すらいらないなんて!？」

矢澤「しばくわよ?？」

魁翔「まあ冗談は置いて早く考えましようよー」

矢澤「つてか急に部室に来たかと思えば訳の分からないことを話し出して私にアイディアを出せとかどんだだけ自分勝手なのよ!!」

魁翔「そ、そんな!?!照れますって……?!?」

矢澤「ぜんぜんほめてな——————い!!どんだだけポジティブなのよあんたは!!脳みそ忘れてきて頭の中にポジティブさだけを詰めてきたんじゃないの!?!?」

魁翔「いや、脳みそはとれませんから」

矢澤「マジレスするな——————!!!」

先程から情緒不安定気味に叫びまくっているのだがどうかしたのだろうか? まあ原因は俺なのだが。つてかこのままじゃあ話が進まないのだからな。

どうしたものかと頭をかきながら考えていると部室のドアが何者かによつて勢いよく開かれた。

開かれた際の大きな声にびっくりしたのかにこつち先輩は椅子からずり落ちてしまいなんとも言えない姿となつてしまっている。

東條「話は聞かしてもらったで!!」

魁翔「いや勝手に聞かないで下さいよ、ってかどこから聞いてたんですか??」

東條「魁翔君が女の子のプレゼントを買いに行ったという話をしている辺りからかな??」

それ最初の方じゃん

魁翔「それならさっさと入ってきてくださいよ、部室の中の声を廊下から盗聴まがいの事している生徒会役員なんて聞いたことないですよ」

東條「いや〜〜何か一回タイミグ逃すと中々入れなくて」

矢澤「ってかそんな勢いよくドアを開けるんじゃないわよ!!びっくりしたじゃないの!!」

東條「ええやんええやん、そんな減るもんじゃないんやし」

矢澤「あんたのせいでこっちの神経がすり減ってんのよ!!」

魁翔「おっ! うまい!! 流石スクールアイドルにこにー!!」

矢澤「うるさいわ!! で、何しにきたのよ希は??」

東條「あ、そうそう! 魁翔君が彼女のプレゼントに悩んでるって話やったね??」

あれ? なんか話が訳のわかんないようになってるのだけれど??

俺とことりが付き合ってる??

ないない、ことりには俺なんかよりはもつといいやつが見つかるだろーしない。まあ彼氏を連れてきたらその相手を見定めるために殴りかかってボコボコにされてやるからな!!

うん、勝てないからね俺じゃあ。ボコボコに返り討ちにされて終わりだな。

魁翔「別に付き合ってませんけどね??」

東條「え? そうなん?? さっきの話からして付き合ってるのかと思っただけ??」

魁翔「どうしたらそんな風に聞こえるんですか……??」

矢澤「いや、どつからどう聞いてもそういう風にしか聞こえなかったから」

俺が呆れた様に聞き返したら、まさかのにこつち先輩からの一言を言われて少し驚いた。

まさか客観的に聞いているとそんな風になっていたとは。

東條「まあその話はおいおい聞くとして……」

魁翔「おいおい聞くも何も付き合ってませんからね??」

東條「彼女の誕生日を祝うとしたら……」

魁翔・矢澤「したら??」

東條「そう!!!!

で決まりや!!」

魁翔「チエンジで」

東條「なんやチエンジって!!」

焼肉

魁翔「どこに誕生日に焼肉に連れて行ってもらって喜ぶ女子高生がいるんですか!？」

東條「はくくい!」

矢澤「私たちも大概だけど、あんたもだいぶズレてるわね」

東條「そうかな?？」

希先輩が不思議そうに首を傾げているのだが、むしろ不思議なのはこっちなのだが??
なんであの人はこうも焼肉を好きなのだろうか??つてか肉が好きなのにあんだけナイ
スバデイを維持しているとは……。

食べた脂肪が全てあの双丘にいつているのだろうか?

じゃあにこっち先輩の食べたものはどこに消えているのだろうか?身長にも、あちら
の方にもどちらにも行っている様子がないのだから不思議だな!!

矢澤「よしっ、あんたそこに直りなさい。いまから首をへし折ってあげるから」

魁翔「それ普通に殺人ですからね!いまあなたは後輩に向かって殺人予告してますか
らね!!」

東條「まあまあにこつちも抑えて抑えて、事実なんやからそう怒らんといて」
矢澤「あんたに言われるのが一番腹立つのよ!!」

ブツクサブツクサなんかにこつち先輩が言っているがまあ気にしない方向で行こう、それにしても結局いい案は出ないな。もう時間もないしいい加減決めないとやばいんだけどな。

魁翔「にこつち先輩は何かアイデアないんすか？」

矢澤「そんなスクールアイドルのDVDとかでいいんじゃないの??」

魁翔「チェンジで」

矢澤「ぬうわんでよおー!! いいじゃない、それ渡しとけば大抵のやつは喜ぶじゃない!!」

魁翔「もうまともな感性の人がいない……」

東條「つてかそもそもわたし達は相手のことも知らないんやけどね」

矢澤「今更ね」

たしかにそういえば言ってなかったな。

忘れてたせてへっ!!

魁翔「まあ控えめに言って天使ですね」

東條「控えめに言わんかったら??」

魁翔「女神ですね」

矢澤「うん、あんたの頭が一番イかれてることだけは分かったわ」

あれー?おかしいなあ?

ちやんとことりの特徴を教えたつもりなのにな??

東條「まあ私たちで話し合ってもこんなもんだろうと思つて予め助つ人を呼んでおきました!!」

魁翔「助つ人??」

矢澤「誰よそれ??」

東條「にこつちは知つてる人よ、魁翔くんも多分見たことはあると思うけど??もうそ

ろそろくると思うんやけど」

そこまで希先輩が話し終えたところでドアをノックする音が聞こえた。多分、希先輩が言っていた助っ人の方だろうか？

それにしてもにこっち先輩は知っていて、俺も見たことがある人か。多分上の学年なんだらうけど、俺が見たことあるっていうとだいたい絞られることになるだらうけど誰なんだらうな。

東條「入ってえーでー」

矢澤「なんであんたが入室の許可出してんのよ」

?? 「希一、こんなところに呼び出して何の用なのよ?？」

ドアが開き一人の女性が入ってきた。

まず目に入ったのはその綺麗な髪の毛だった。綺麗な金髪の髪は、髪自体が発光しているかのような艶やさを持っており外国の方のような上品さを醸し出していた。また、髪の綺麗さに負けないような顔立ちで日本人離れした美貌を持っていた女性が俺の目に飛び込んできた。上品さの中に孤高の気高さのようなものも感じ取れ、すごい綺麗な人だなと思った。

印象としてはハーフの人だろうかといった印象を持った。それと希先輩の言ったとわりどこか見覚えのある人だった。

そして胸部に目を移せば希先輩に負けないであろう武装もしており、誰もが認める完璧な美少女であろう。

……なんかこの場にいるにこっち先輩が居たたまれなくなり悲しい気持ちになってくるのは俺だけだろうか?？」

そんな俺の気持ちをいざ知らず最初に声をあげたのはにこっち先輩だった。

矢澤「ゲツ！副会長……」

副会長「あら？矢澤さんこんにちは。それと……あなたは……？」

あー副会長か、どうりで見覚えのあるはずだ。多分集会なんかで見たのだろう。だから希先輩も見たことはあると言っていたのか

そんなことを、副会長さんを見ながらボーっと考えてたら副会長さんの視線が俺の方へと向き話しかけてきた。

確かに俺はこの人のことを知ってはいるけど、向こうはこんな一般生徒の事を知らないだろう。

魁翔「えつーと、一年生の希咲魁翔です」

絢瀬「そうよろしくね、私は絢瀬絵里よ。まあ一応副会長だし知ってはいると思うけど」

すいません!!名前までは知りませんでした!!ってか副会長ってにこつち先輩が言うまできづきませんでした!!

ってか入ってきたときは怖そうな感じだったけど、今話したときはなんか優しそうな感じっていうか。

絢瀬「で、こんなところに呼び出して何の用かしら希??」

「またもや真剣な目つきになり希先輩に話しかける絢瀬副会長は最初の時と同じような威圧感のある怖い感じに戻っていた。」

東條「そんなえりち怖い顔せんといて、魁翔くんも怖がつてるじゃん」

絢瀬「……ごめんなさいね魁翔くん」

魁翔「あー別に気にしてないんで大丈夫ですよ?」

まあ少し怖かったけど

矢澤「で、希はコイツに相談しようと思ってるの??お高い副会長さんに聞いてもいい

答えなんてこないと思うけど?」

絢瀬「あら? コイツ呼ばわりとは心外ね矢澤さん? 私にはちゃんとした名前があるのだけれど、私の自己紹介が理解できないほど頭が残念なのかしら」

矢澤「ぬうわんですって~!!」

魁翔「まあ否定はできませんね」

東條「確かにそうやね」

矢澤「あんた達はどっちの味方よ!!」

どっちの味方なんて決まってんじゃん

魁翔「まともな人」

東條「えりち」

矢澤「まさかの味方がいない!!」

絢瀬「結局なんなの? そんなコントを見せにるために呼んだわけ?? 矢澤さん私もそん

なに暇ではないのだけれど?」

矢澤「違うわよ!! ってかコントもやってないわ!!」

魁翔「あのくすみません、要件っていうのは俺の方からありまして」

絢瀬「そう君からなのね、矢澤さんからだったら断つてたかもしれないわね」

矢澤「なんであんたは私に対してそんななのよ!!」

東條「にこっちの接し方に問題があると思うけど……」

あとから希先輩に聞いた話だが、絢瀬副会長はその見た目や文武両道という生徒の模範とも言える立ち振る舞いから、多くの生徒から憧れられていて支持されているらしい。

何でもその人気があの人には気に入らないようだ。まあスクールアイドルとして人気者になりたいにこっち先輩からしたら羨ましくて妬んでいるのだろう。

身長などもちっさいけど人間としてもちっさいなあーと思ったのはここだけの話だ。

絢瀬「はあー、友達の誕生日プレゼントが決まらなくて悩んでるねー」

魁翔「はい、こんな事を相談してすみません絢瀬副会長」

絢瀬「別に構わないわ、生徒に寄り添い悩みを聞いてあげるのも生徒会としての役目なもの」

おおーこんなアニメにも出てきそうなセリフを言う生徒会の人があるなんて。現実の人なんてこんな面倒ごとに関わろうとしないだろうに。

これ絢瀬副会長の人気につながっているのかもしれない。

東條「で、えりちは何がいいと思う??」

絢瀬「そうね……そのお友達の事を詳しく知らないから現実とは言えないのだけれど女性ならアクセサリーとかインテリアになりそうなものとか良いんじゃないかしら？他にもファッションに関するものとか」

魁翔「ま、マトモだ!!」

絢瀬「きや!!」

他の二人がまともな事を言ってくれなかったのでこの人にもあんまり期待はしてなかったのに、普通な事を言ってくれたのでつい嬉しくなってしまうって机から顔を乗り出して近づけてしまった。思いのほか驚かれてしまってちよつと傷ついたけど……

ちなみに俺たちは今、机を挟む形で席についており俺の隣にこつち先輩、正面に絢瀬副会長、その隣に希先輩という感じだ。

魁翔「す、すみません！初めてまともな事を言ってくれる人がきたので」

絢瀬「べ、別に大丈夫よ、っていうからあなた達は何を言ってたのよ」

東條「んっーと、焼肉にスクールアイドル??」

絢瀬「……………相談相手が悪かったわね」

魁翔「俺も今更ながら後悔してしてます」

俺と絢瀬副会長は共にため息を漏らし、にこつち先輩は文句をグチグチ言っている。希先輩はケラケラと言った感じに笑っている。

つていうか実際にケラケラ言ってるのだけけど。

絢瀬「まあさつき言ったファッションって言うのは相手の好みもあるだろうしあまり勧めれないけど」

魁翔「あー、確かにその友達結構ファッションにはこだわりがあると思うのでちよつと難しいですね」

絢瀬「まあ、別に今私が言った事にこだわる必要なんてないわ。要は気持ちが変わるような物を選べば大丈夫よ」

絢瀬副会長はそこまで言うのと立ち上がり、じゃあ、と告げて教室を立ち去ろうとしている。

東條「あれ？えりち用事あるの??」

絢瀬「誰かさんに呼ばれたせいでまだ仕事が終わってないのよ、それじゃあね」

魁翔「あ、はい！ありがとうございます!!」

なんか久しぶりにまともな人と話した気がする。俺の周りにはアホのオレンジぢちゃんに、天使に、青い鬼しか居ないからな。他にも腹黒ツインテールにツンデレトマトにスピリチュアル巫女さんとかな。

魁翔「それじゃあ俺もそろそろ行きますよ、何となく方向性は見えた気がしますしね」

東條「そっかあ、ええ報告期待しとるけんね」

矢澤「まあ頑張んなさいよ」

笑顔で言ってくれる希先輩にぶっきらぼうに答えるにこっち先輩。まあ何だかんだにこっち先輩も面倒見はいいので気にはしてくれてるだろう。

それにしても絢瀬副会長は綺麗な人だったなあ。あんな人ラノベやアニメにしか存在してないと思ってたわ。金髪生徒会副会長の頭脳明晰スポーツ万能で容姿端麗とかどんだけチートなんだよ。

あ、そう言えば海未も結構当てはまるところはあるな、でもあいつは怖いからなあー。まあ絢瀬副会長も最初は怖かったけど話してみると案外優しく話しやすかったからな。

新しく出会った先輩との会合に心弾ませながら、明日はまたあのシヨピングモールにいこうと心の中で考えながら俺は帰路に着いた。